

令和5年度 老人保健事業推進費等補助金
(老人保健健康増進等事業分)

認知症地域版希望大使の普及促進と 活動強化に関する調査研究事業

報告書

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ

令和6年3月

目 次

要 旨	i
1章 事業概要	1
1. 背景と目的	1
2. 事業内容	2
3. 事業構成と経過	9
2章 希望大使事業のネットワークづくり	12
1. 「認知症本人発：希望のリレーフォーラム」及び「拡大本人ミーティング」	12
2. 全国希望大使交流会議の開催	14
3. 希望大使任命・活動推進セミナーの開催	37
4. 希望大使のネットワーク化等に関する情報	52
3章 実態調査結果	54
1. 都道府県調査	54
2. 市町村調査	83
3. インタビュー調査結果	103
4. 大使活動を支える支援者・家族調査	121
4章 事業成果物	127
1. 事例集及び手引きの作成	127
2. Web コンテンツの作成と公開	129
3. 国内外への情報発信：PR コンテンツの作成と公開	129
5章 考察と提案	130
1. 地域版希望大使を設置する意義と効果	130
2. 本人の思いを起点とした希望大使の役割とあり方	133
3. 地域版認知症希望大使の普及と活動支援に向けて(提案)	135
資料編	143
1. 設置済・都道府県調査票	145
2. 未設置・都道府県調査票	151
3. 市町村調査票	155
4. 希望大使本人調査票(事例収集依頼)	160
5. 希望大使活動支援アンケート	161

要 旨

1. 事業目的（第1章）

本調査研究では、すべての国民が認知症とともに尊厳と希望を持って暮らせる共生社会の実現を推進していくために、「認知症施策推進大綱」において令和7年までに「全都道府県で設置する」とされている、地域版希望大使の取組を全国に普及するとともに、活動の更なる活性化・質の向上を図ることを目的とする。

そのために、都道府県における地域版認知症希望大使事業及び関連する施策等に関する実態把握をもとに、希望大使を設置する意義を分かりやすく明示し、都道府県における事業の推進に資する情報を提供する。また、都道府県をまたいだ本人及び活動支援者のネットワークづくりや都道府県担当者間の関係づくりなど、関係者の連携強化に向けた支援（交流会やセミナー）に取組み、各々のモチベーション向上や好事例情報に基づく活動の活性化、事業の質向上、新たなチャレンジ等に繋げていく。

2. 事業内容（第1章）

1) 希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査：

都道府県調査、市町村調査、インタビュー調査、希望大使の活動を支える支援者調査

2) 全国希望大使交流会議の開催

3) 希望大使任命・活動推進セミナーの開催

4) 希望大使活動事例集及び任命と活躍推進に向けた手引きの作成

5) Web コンテンツの作成と公開

6) 国内外への情報発信とそのあり方の検討

3. 主な調査結果（第3章）

【都道府県アンケート調査】（p53～）

- ① 回収数（率）：都道府県 47（100.0%）（うち大使設置済み都府県 20、大使未設置道府県 27）
- ② ※以下、設置済み都道府県は「設置済」、未設置道府県は「未設置」と表記。
- ③ 設置済の場合の大使候補者の把握方法は、「管内市町村等に推薦を依頼」が 42.6%、「家族の会等、関係団体に推薦を依頼」が 40.4%の順に多かった。定性分析では、市町村や関係団体とのこれまでの関係構築や意思疎通等が円滑な任命に繋がるポイントになっていた。
- ④ 設置済で大使事業の予算化をしている割合は 75.0%、活動上の保険加入率は 5.0%となっていた。また、大使への報酬を「支払っている」との回答は 65.0%、支援者への報酬は「支払っている」との回答は 40.0%で、支援者の支払い率が低かった。
- ⑤ 認知症施策等への本人の参画状況について、設置済では「本人が委員等のメンバーとして参画している」が 35.0%（未設置は 22.2%）、「メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある」が 15.0%（未設置は 0.0%）であった。
- ⑥ 大使事業を進める上で困難や課題があると感じている担当者は全体の約 8 割となっていた。具体的な内容は「大使の活動の継続や今後の展開のあり方について検討が必要」が約 6 割であった。また、未設置では、「事業の進め方がよくわからない」「大使の適任者がみつからない」などの項目が 4 割～

5割であった。

- ⑦ 大使事業は、他の認知症施策と連動すべき事業だと考える担当者が、全体の74.5%と高率であった。
- ⑧ 担当者としての気づき・感想について、設置済では「自分自身の認知症観が変わった」が80.0%（未設置は44.4%）、「前向きになる本人や家族に出会えた」が60.0%（未設置は25.9%）であり、大使事業の実施有無で意識の差があった。
- ⑨ 今後の事業展開を踏まえて担当者が望むことは、「全国の大使が交流できる機会づくり」90.0%、「都道府県担当者同士の情報交換が出来る機会づくり」85.0%、「取組の効果を示せるわかりやすい評価指標」50.0%等であった。

【インタビュー調査/支援者・家族調査】（p103～, p121～）

- ⑩ 県担当者へのインタビュー調査等では、大使事業を通して本人と直接交流する中で認知症へのイメージがマイナスからプラスへ、認知症や認知症の人への理解が大きく変化したとの共通点を確認した。また、県担当者をはじめとする行政全体の意識が本人に向けられ、認知症施策全体の基盤に本人の声を据えていくきっかけになっていた。
- ⑪ 希望大使へのインタビュー調査等では、認知症の普及啓発のあり方について多くの意見が挙げられた。中でも、「大使の存在そのものが『希望』になるべき」との考え方は、今後の事業展開における重要な視点になった。
- ⑫ 「大使」の肩書きを持つことで、本人には一定の使命感が生じ、個人として活動してきた頃よりも積極的に人や場と繋がりたしたり、都道府県との関わりを大切にしたりするようになっていた。また、「希望大使」という役割を通して自ら考え、学び、勇気を持って前進しようとしていた。
- ⑬ 支援者へのインタビュー調査等では、大使にとっての伴走者は必ずしも一人とは限らず、場面ごと、状況ごとに複数の支援者がチームで支えていくことの重要性が示唆された。また、支援者・家族調査では、大使活動をサポートする際、依頼者側による支援者（家族を含む）への配慮が不足している実態も確認できた。交通費や謝金等の金銭的なことに留まらず、『本人が活動するためにはどのようなサポートが必要なのか、なぜ支援者が必要なのか』等依頼者側への理解を求める声が多かった。

4. 成果物（第4章・第5章）

本調査研究事業で得られた調査結果および全国希望大使交流会議や活動推進セミナーの結果をもとにした検討委員会での議論により、改めて希望大使事業の意義と効果等を明確にし、希望大使の普及と活動支援に向けた取組み課題を関係者間で共有することが重要であることから、本報告書5章に以下の考察と提案をとりまとめた（p130～）。

1. 地域版希望大使を設置する意義と効果
2. 本人の思いを起点とした希望大使の役割とあり方
3. 地域版認知症希望大使の普及と活動支援に向けて（提案）

また、希望大使活動事例集「わたしたちの暮らしと活動—地域版希望大使2023年度」及び都道府県向けの手引き「地域版希望大使の任命と活躍推進の手引き—2023年度」を作成するとともに、「全国希望大使交流会議」「活動推進セミナー」「全国版希望大使ミーティング」や各地のインタビュー、事業期間中の大使活動の記録（動画）等を基にしたWebコンテンツを作成し、国内外に情報発信した。（p127～）。

1 章 事業概要

1. 背景と目的

1.1. 背景

令和元年にとりまとめられた認知症施策推進大綱には、「認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会を目指す」との基本的考え方が示され、認知症があってもなくても同じ社会の一員として地域を創っていこうとする動きが進み始めている。令和5年には「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が成立し、共生社会をともに創っていこうという動きがさらに本格的に進んでいくことが期待されている。

本研究事業のテーマに挙げる「地域版認知症希望大使」は、大綱における5つの柱のうち1番目に挙げられている「普及啓発・本人発信支援」の具体的な施策に位置付けられている。「認知症の人が生き生きと活動している姿は、認知症に関する社会の見方を変えるきっかけともなり、また、多くの認知症の人に希望を与えるものである」との考えに基づき、都道府県が任命する地域版希望大使が自らの言葉で語り、認知症になっても希望を持って前を向いて暮らせる事を地域社会に向けて発信していくための取組として、令和7年までに全都道府県に設置するとの目標が示されている。

これらを踏まえ、認知症施策の策定・実施の責務を負う都道府県は、「地域版希望大使」を設置する意義を十分に理解し、希望大使事業の円滑な運用と活躍支援に向けて取組む必要がある。

令和5年3月時点における地域版希望大使の設置数は、47都道府県中16都府県。令和4年度に当法人が実施した「地域版認知症希望大使の普及促進と活動支援に関する調査研究事業」（令和4年度老人保健健康増進等事業）の結果によると、地域版希望大使設置に対する都道府県の捉え方はさまざまであり、事業への理解が浸透していない状況も確認された。また、大使の設置プロセスにおいて担当者が困難や悩みを抱えている状況も散見され、大使事業の推進に向けての情報提供及びサポートを行うことが共生社会の実現を推進する上で重要と考えられる。

1.2. 目的

本調査研究は、すべての国民が認知症とともに尊厳と希望を持って暮らせる共生社会の実現を推進していくために、「認知症施策推進大綱」において令和7年までに「全都道府県で設置する」とされている、地域版希望大使の取組を全国に普及するとともに、活動の更なる活性化・質の向上を図ることを目的とする。

そのために、都道府県における地域版認知症希望大使事業及び関連する施策等に関する実

態把握をもとに、希望大使を設置する意義を分かりやすく明示し、都道府県における事業の推進に資する情報を提供する。また、都道府県をまたいだ本人及びパートナーのネットワークづくりや都道府県担当者間の関係づくりなど、関係者の連携強化に向けた支援に取組み、各々のモチベーション向上や好事例情報に基づく活動の活性化、事業の質向上、新たなチャレンジ等に繋げていく。

2. 事業内容

2.1. 検討委員会の設置と実施体制

【検討委員会】

認知症本人大使「希望大使」、地域版認知症希望大使、都道府県及び市町村の認知症施策担当職員、キャラバンメイト/チームオレンジ関係者、認知症関連領域の有識者等からなる検討委員会を設置し、事業年度において全3回のオンライン開催を行った。検討委員会では事業全般の進め方の検討、実施事業の評価、実態調査結果の検証等を行い、希望大使事業の今後の展開に向けた提案をとりまとめた。

氏名（敬称略）	所属
長田 米作	とうきょう認知症希望大使（東京都希望大使）
山中 しのぶ	高知家希望大使（高知県希望大使）
丹野 智文	認知症本人大使「希望大使」（全国版希望大使）
上村 佐和子	兵庫県保健医療部健康増進課 認知症対策班
横山 麻衣	藤枝市 健康福祉部 地域包括ケア推進課
渡辺 幸恵	医療法人山育会/桐生市地域包括支援センター山育会
栗田 圭一	地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター研究所
永田 久美子	認知症介護研究・研修東京センター
鎌田 松代	公益社団法人 認知症の人と家族の会

【長田委員（希望大使）アシスト】（敬称略）

永井弘美、宮澤逸子／田柄地域包括支援センター（ボランティア）

奥村綾子、横塚亜美／田柄地域包括支援センター

【オブザーバー】

厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課（第1回～第3回参加）

高知県在宅療養推進課（第1、3回参加）

青森県健康福祉部高齢福祉保健課（第2回参加）

秋田県健康福祉部長寿社会課・調整・長寿社会推進チーム（第3回参加）

【事業実施事務局】

渡辺 紀子 (日本認知症本人ワーキンググループ)
宮前 史子 (東京都健康長寿医療センター)
小森 由美子 (日本認知症本人ワーキンググループ)
山梨 恵子 (日本認知症本人ワーキンググループ)

【検討委員会 経過】

開催日	内 容
第 1 回 8 月 31 日	1. 本研究事業の目的・内容について 2. 希望大使任命状況について 3. 討議／検討事項 ①地域版希望大使の任命・活動による効果の整理 ②地域版希望大使の任命・活動による課題の整理 ③実態調査の検討 ④全国希望大使交流会議及び希望大使任命・活動推進セミナーの実施
第 2 回 12 月 7 日	1. 第 1 回検討委員会 討議のふり返り 2. 事業経過について（報告） ① 認知症本人発：希望のリレーフォーラム開催報告 ② 希望大使同士のエリア内ネットワーク化の動き ③全国希望大使交流会議開催報告 ④希望大使任命・活動推進セミナーの開催報告 ⑤全国実態調査進捗状況の報告 3. 委員会提案事項に関する検討
第 3 回 3 月 1 日	1. 希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査結果について ① 都道府県調査結果 ② 市町村調査結果 ③ インタビュー調査結果（希望大使及び支援者、都道府県担当者等） 2. 委員会提案事項に関する検討

2.2. 希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査

希望大使の活動状況及び本人発信支援の実態調査を行い、事業の効果や課題に関する分析を行った。(第 3 章)

2.2.1. 都道府県調査

① 調査対象・回収率

都道府県認知症施策担当部課の担当者を対象にアンケート調査を実施。

i 地域版希望大使設置済みの都府県 20 箇所（回収率 100%）

ii 地域版希望大使未設置の道府県 27 箇所（回収率 100%）

② 調査方法

メールによる調査票の送付及びメールによる調査票の回収

③ 調査実施時期

令和5年11月～12月

④ 調査内容

調査票は、地域版希望大使を設置している都府県（以下、「設置都府県」と）と、設置していない道府県（以下「未設置道府県」）の2種類を作成した。なお、設置都府県と未設置道府県の比較が可能となるよう、主要項目については共通の設問とした。

【地域版希望大使 設置都府県】

I. 基本情報	
1	都道府県名
2	人口規模
3	高齢化率
4	認知症施策担当部署名
5	認知症施策担当者人数
6	希望大使事業担当者人数
II. 大使任命の進捗状況等について	
7	最初に大使を任命した年度
8	任命が完了している大使の人数
9	新たに任命を予定している人数
10	これまでに退任した大使の人数
11	大使の任命要件として重視していること
12	大使の候補者の把握方法
13	大使候補者の状況
14	任命前の候補者本人への説明
15	本人への就任意向確認
16	大使の活動内容
17	大使活動の依頼を受ける際の決め方

18	大使活動を進めていく上での対応
19	大使の活動窓口・調整等の担当
20	任命後の大使本人との関わり
21	大使の活動予定（スケジュール）把握状況
22	大使事業の運営状況
III. 事業評価	
23	大使事業の効果
24	大使事業に対する担当部署内の理解状況
25	大使事業に対する管内市町村の理解の状況
26	先入観を払拭する上での大使の効果
27	大使の適性に関する検討状況
28	大使適性として重要と思うこと
29	都道府県並びに管内市町村における認知症関連事業・施策の状況
30	大使任命や活動を通じた管内市町村への影響
31	大使任命や活動を通じた都道府県事業への波及効果
32	大使の活動の好事例
IV. 事業担当者の状況	
33	担当者が大使事業にかけているエフォート
34	都道府県担当者としての困難や課題
35	他都道府県担当者との情報連携
36	大使事業を担当したことによる自身の気づきや感想等
37	今後あればよいと思うこと
38	本人の声を施策に活かすために取り組んでいることや工夫等
39	管内市町村への説明
40	管内市町村担当者への日頃からの関わり
41	今後、大使事業等の担当者として、大使と一緒にチャレンジしたいこと

【地域版希望大使 未設置都府県】

I. 基本情報	
1	都道府県名
2	人口規模
3	高齢化率
4	認知症施策担当部署名
5	認知症施策担当者
6	希望大使事業担当者人数

II. 大使任命の進捗状況等について	
7	大使の任命を予定
8	今年度新たに任命を予定している人数
9	大使の任命要件として、重視したいこと
10	大使の候補者の把握方法
11	大使の活動内容（予定）
12	大使としての活動の窓口・調整等（予定）
13	大使事業に関する運営規定の整備状況
III. 大使事業及び認知症関連施策について	
14	現時点での大使事業への期待
15	大使事業に対する担当部署内の理解状況
16	現時点における大使の適性に関する検討
17	大使にはどのような人が適任だと思うか
18	都道府県並びに管内市町村における認知症関連事業・施策の状況
IV. 事業担当者の状況	
19	都道府県担当者としての困難や課題
20	他都道府県担当者との情報連携の状況
21	大使事業に関する説明や関連業務等を踏まえた担当者の意識
22	本人の声を施策に活かすために取り組んでいること・工夫
23	管内市町村への説明状況
24	管内市町村担当者への日頃からの関わり
V. 自由回答	
25	大使任命や活動を推進していく上で必要な支援・サポート
26	その他意見等

2.2.2. 市町村調査

① 調査対象

全国市町村（1,741市町村）の認知症施策担当部課

② 回収・回収率

1,054市町村（回収率 60.5%）

③ 調査方法

発送：都道府県認知症施策担当者経由で市町村認知症施策担当者宛てにメール送信

回収：調査票回収用アドレスに市町村より直接回収

④ 調査実施時期

令和5年11月～12月

⑤ 調査内容

I. 基本情報	
1	都道府県名
2	市町村コード
3	人口規模
4	高齢化率
5	認知症施策担当者
6	認知症施策推進基本計画（市町村計画）の策定状況
7	国が任命した認知症本人大使「希望大使」の認知度
II. 都道府県が設置する地域版希望大使について	
8	都道府県からの情報連携の状況
9	地域版希望大使の任命状況
10	地域版希望大使に協力依頼したこと
III. 市町村での認知症の本人自身による活動について	
11	市町村内の本人の活動状況
12	本人発信や活動による市町村事業への影響
13	担当者の認知症に関する意識を変えた出来事
IV. 認知症施策担当と地域包括支援センターとの連携について	
14	貴自治体の地域包括支援センターについて
15	市町村の行政担当者と地域包括支援センターとの日頃からの関わり
16	認知症施策全般について地域包括支援センターとの連携状況
17	大使事業について地域包括との情報の連携状況
18	本人発信の意義について地域包括支援センターの理解状況
19	本人視点での施策づくり
V. ご自身（ご担当者）についてお答えください	
20	本人の発信支援について
21	本人発信の意義について組織内の理解の状況
22	本人発信による「認知症や認知症の人への先入観」の払拭について
23	担当者の本人との関わり
24	本人との関わり場面
25	認知症の人との関わりや本人発信支援を通じた担当者の気づきや感想
26	本人発信支援に取り組むうえでの不安や悩み
27	本人発信支援に関する情報の連携状況
28	担当者の業務の状況

VI. 貴自治体の状況	
29	基本法を市町村計画に活かす動き
30	貴自治体における本人発信支援の取組み状況
31	認知症施策の担当者として抱えている不安や課題
32	認知症施策の担当者として今後取り組みたいこと

2.2.3. インタビュー調査

地域版希望大使の活動事例等に関する調査の一環として、地域版希望大使及びその支援者、並びに都道府県担当者等に対してインタビュー調査を実施した。なお、本事業におけるWebコンテンツの作成を踏まえてインタビュー実施時に動画撮影への協力を頂いた。

【実施一覧】

<p>徳島県 令和5年10月15日</p> <p>① とくしま希望大使：島田 豊彰氏（公益社団法人認知症の人と家族の会徳島県支部） 支援者：島田 和美氏（公益社団法人認知症の人と家族の会徳島県支部）</p> <p>② 徳島県保健福祉部長寿いきがい課：前川 智香氏（希望大使事業担当）</p>
<p>秋田県 令和6年1月24日～25日</p> <p>① あきたオレンジ大使：神原 繁行氏（横手興生病院作業療法室） 支援者：佐藤 昌子氏（横手興生病院作業療法室 主任）</p> <p>② 秋田県健康福祉部長寿社会課・調整・長寿社会推進チーム：副主幹 宇佐美正子氏（希望大使事業担当）、チームリーダー 小柳 和巳氏</p>
<p>青森県 令和6年1月26日</p> <p>① 青森県健康福祉部高齢福祉保健課 高齢者支援グループ：技師 音喜多祐未氏（希望大使事業担当）、マネージャー 築田陽子氏</p>
<p>大分県 令和6年2月25日</p> <p>① 大分県福祉保健部 高齢者福祉課 地域包括ケア推進班：大津 瑠璃氏（希望大使事業担当）、日田市役所長寿福祉課長寿福祉係 保健師 樋口祥子氏</p>
<p>山口県 令和6年2月26日</p> <p>① 山口県健康福祉部長寿社会課 地域包括ケア推進班：主任 白石 直美氏（希望大使事業担当）、主査 山本 大祐氏</p> <p>② やまぐち希望大使：阿部 俊昭氏（鴻南福音協会）、阿部孝子氏（家族支援者）</p>
<p>全国版希望大使及び支援者 合同インタビュー 令和6年2月29日</p> <p>会場：リファレンス国際ビル 会議室（有楽町）</p> <p>大 使：柿下秋男大使（東京都）、鈴木貴美江大使（京都府）、春原治子大使（長野県）、丹野智文大使（宮城県）、戸上守大使（大分県）藤田和子大使（鳥取県）</p> <p>支援者：柿下房代（東京都）、鈴木祐三子（京都府）、松本恵生（京都府）、櫻井記子（長野県）、吉川浩之（大分県）、金谷佳寿子（鳥取県）</p>

【インタビュー内容】

① 希望大使及び支援者

(都道府県別個別インタビュー)
診断前後の状況 / 就労等の継続について / 地域や支援者との関係 / 本人発信等の活動状況 / 希望大使の活動状況 / その他

(全国版希望大使・支援者合同インタビュー)
大使の活動：今後したいことやアイデア/どんな人に、大使の仲間になってほしいか/
パートナー（活動支援者）に求めたいこと/地域で、もうちょっと変わってほしいこと

② 県大使事業担当者

事業の意義や担当者としてのモチベーション/希望大使事業の進捗及び今後の見通し/
大使事業の推進に向けて必要なこと / その他

2.2.4. 大使活動を支える支援者・家族調査

令和5年11月に開催した「全国希望大使交流会議」における支援者同士のディスカッション内容や希望大使及び支援者へのインタビュー調査結果等を踏まえて、希望大使の活動を支えている支援者へのアンケート調査を実施した。

① 調査対象：地域版希望大使をサポートする支援者及び家族

② 回収数：46件

③ 調査方法：都道府県担当者を介してアンケート調査票を配布。

回答は、メール、FAXでの回収のほか、googleフォームからの回答を可能とした。

④ 調査実施時期：令和6年2月～3月上旬

⑤ 調査内容

大使と支援者の関係/支援者としてのやりがい/支援者としての負担感/支援者への謝金・交通費の支給状況/活動支援における支援者の思い/その他

2.3. 全国希望大使交流会議の開催

全国の地域版希望大使及びその活動支援者のネットワークづくりを目的とした「全国希望大使交流会議」を開催し、大使活動の充実、活性化に向けた意見交換を行った。また、交流会議開催のプロセスを含めて、認知症の本人が参加しやすい会議等のあり方や運営方法を検証し、本人の発信支援に繋げるノウハウを収集した。(第2章)

日時：令和5年11月7日(火) 14:00～16:00

会場：ビジョンセンター品川 204会議室(東京・品川駅前)

参加者：希望大使 18名、同行者・支援者 16名、都道府県担当者 27名

その他：厚労省担当課、検討委員、事業担当研究班・事務局 計70名

2.4. 希望大使任命・活動推進セミナーの開催

全国の地域版希望大使事業担当者を対象に「希望大使任命・活動推進セミナー」を開催し、希望大使事業に取り組む意義や任命・委嘱及び活動支援等に関する各地の取組について情報共有の機会を持った。また、担当者が一堂に会する機会を活かして、他自治体との関係構築を図り、担当者間の継続的な情報交換や相互支援・相談を可能とする関係構築を図った。

(第2章)

日時：令和5年11月8日(水)10:30～15:00

会場：ビジョンセンター品川 204会議室(東京・品川駅前)

参加者：各都道府県 認知症施策及び大使事業の担当者 29 都道府県 32 名

全国版希望大使1名、同行者・支援者1名

その他：厚労省担当課、検討委員、事業担当研究班・事務局 計41名

2.5. 希望大使活動事例集 及び任命と活躍推進に向けた手引きの作成

希望大使交流会議及び希望大使任命・活動推進セミナーの情報集約、アンケート調査結果、インタビュー調査結果等の情報に基づき、希望大使活動事例集及び希望大使任命と活動推進に向けた手引きを作成した。(第4章)

① わたしたちの暮らしと活動—地域版希望大使 2023 年度

② 地域版希望大使の任命と活躍推進の手引き—2023 年度

2.6. Web コンテンツの作成と公開

希望大使活動事例集及び希望大使任命・地域参画手引きを作成に向けて収集した各種情報やインタビュー記録(動画)並びに本事業で開催した希望大使交流会議や希望大使任命・活動推進セミナーでの記録(動画)を活用し、幅広い層に閲覧してもらうための Web コンテンツを作成し、日本認知症ワーキンググループのホームページに掲載した。(第4章)

2.7. 国内外への情報発信

(1) コンテンツ情報の収集

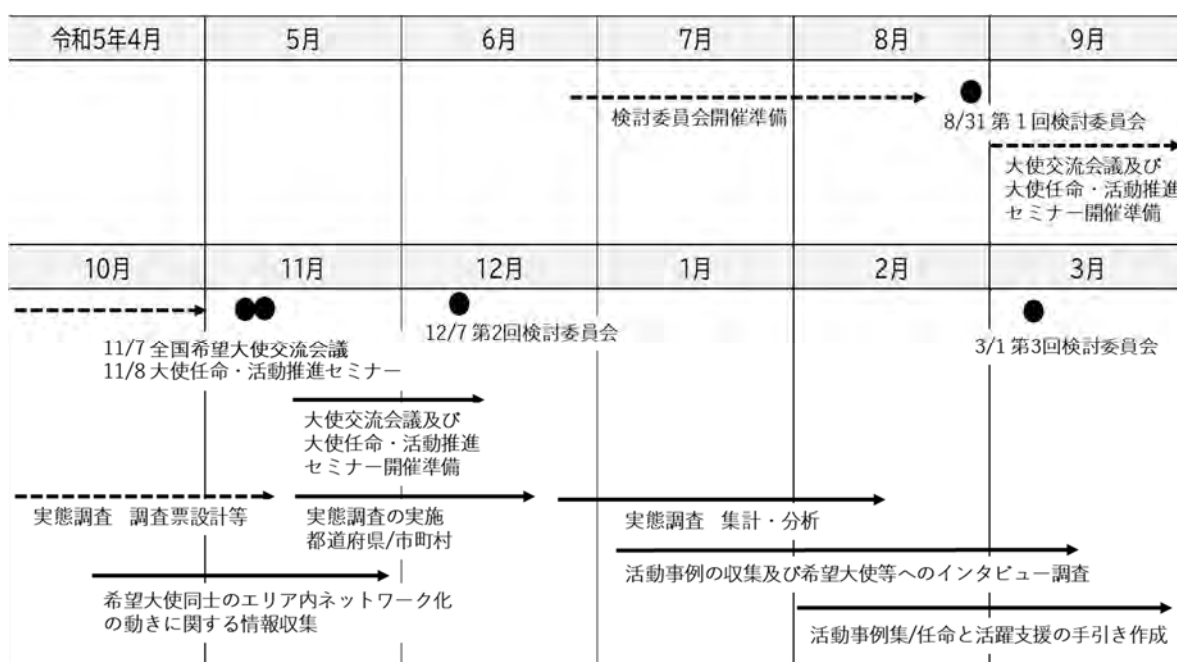
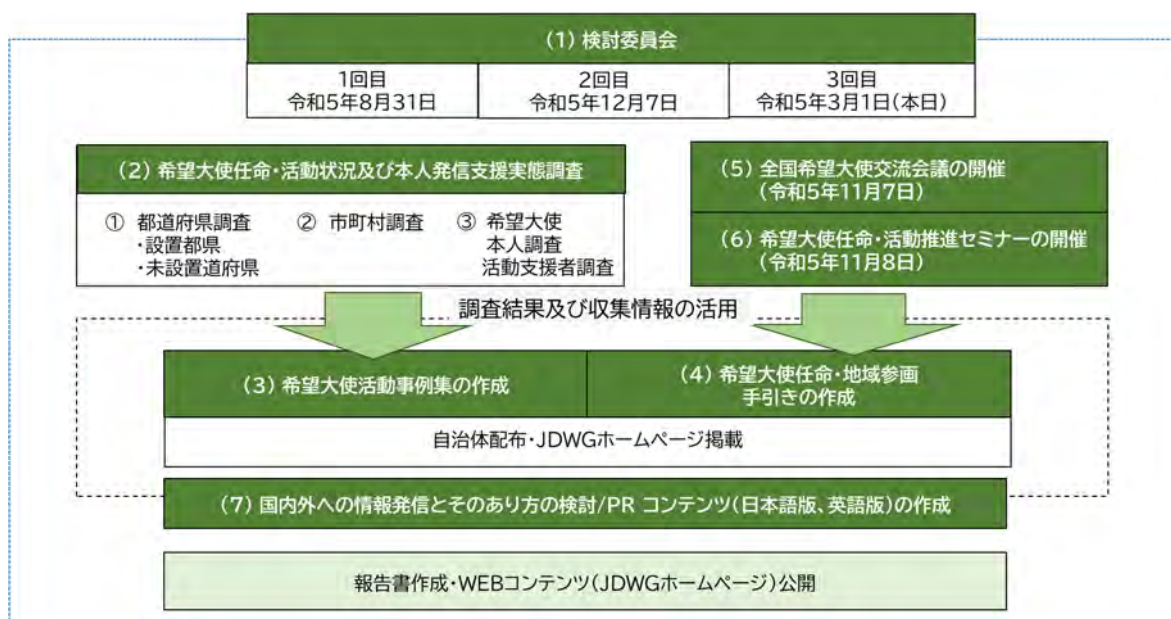
希望大使の活動について、より効果的かつ持続的に国内外へ情報発信するために適したコンテンツ情報等について検討し、「全国版希望大使ミーティング」(2月、東京)における希望大使、支援者による意見交換の場を映像も含めて記録し、コンテンツ情報とした。

また、事業期間中に国内の大使7名が参画した「希望のリレーフォーラム(10月5日)」及びその前日に開催された「打合せ会&拡大本人ミーティング(10月4日)」の様子も映像で記録し、コンテンツ情報として活かした。

(2) PR コンテンツの作成

収集した動画記録をもとに、様々な年代や地域の希望大使の生き生きした活動ぶりやメッセージをコンパクトに伝えるためのPRコンテンツを作成した。PRコンテンツは、日本認知症ワーキンググループのホームページに掲載した。(第4章)

3. 事業構成と経過



2章 希望大使事業のネットワークづくり

1. 認知症本人発：希望のリレーフォーラム及び拡大本人ミーティングの開催
2. 全国希望大使交流会議の開催
3. 希望大使任命・活動推進セミナーの開催
4. 希望大使のワーク化等に関する情報

1. 「認知症本人発：希望のリレーフォーラム」及び「拡大本人ミーティング」

「認知症本人発：希望のリレーフォーラム」は、認知症の本人発信・本人活動の世界的な先駆けであるクリスティーン・ブライデン氏と国内の本人たちが集い、希望と尊厳を持って生きる自らのチャレンジと社会への期待について語り合うため、社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東京センターの主催により開催された。日本認知症本人ワーキンググループは本調査研究事業の一環で参加協力し、クリスティーン・ブライデン氏と希望大使との交流やディスカッションの様子を映像に記録し、ホームページ上に公開した。（第4章）

また、このフォーラムの前日に開催された「打合せ会&拡大本人ミーティング」では、希望のリレーフォーラムに登壇する本人たちにより本番に向けた打合せが行われた後、ざっくばらんな意見交換「拡大版本人ミーティング」が行われた。

1.1. 打合せ会&拡大本人ミーティング

日時：2023年10月4日（水）13時30分～16：00

場所：有楽町朝日ホール・スクエア 会議室

[プログラム]

13：30～	開会・モーティングの進め方について
13：40～	自己紹介
14：00～	10/5 フォーラムの打合せ（ねらい、進め方、意見交換等）
14：20～	休憩・お茶とお菓子
14：40～	拡大本人ミーティング：ざっくばらんに ① 自分らしく暮らし続けるために大切にしていること ・そのために必要なことは… ② 活動する本人の仲間、次に続く人を増やしていくためのアイデアは…
15：40～	今日のまとめ ・ 明日の確認
15：50～	自由に交流タイム

1.2. 認知症本人発：希望のリレーフォーラム

日時：2023年10月5日（木）13時00分～16：00

場所：有楽町朝日ホール

[プログラム]

13：00～	主催者あいさつ 社会福祉法人浴風会 会長 江利川 毅氏 来賓あいさつ 厚生労働省老健局 間 隆一郎 老健局長
13：15～	第1部 クリステーションからのメッセージ ・動画上映 ・基調講演 希望のリレー:すべては認知症とともに生きる私たちから始まる
14：15～	(休憩)
14：30～	第2部 クリステーションからバトンを受けて ・バトンを受けた国内の本人 二人からのメッセージ 藤田和子 (JDWG 代表理事) / 丹野智文 (JDWG 副代表理事) ・クリステーションとの対話
15：00～	第3部 共生社会の実現に向けて～バトンをつなぐ～ ・動画上映-私が私として生きる日々～国内各地の本人の姿と声～ ・リレーメッセージ (希望大使・地域版希望大使) ・国内の本人たちのメッセージを聴いて クリステーションより ・共生社会の実現に向けた「本人メッセージ 2023」



クリスティン・ブライデン氏からのメッセージ

- ・ 私からのメッセージは、もしかしたらこの基本法こそが希望ではないかということです。世界のどこを見ても、政府がここまで正面から認知症に取り組み、認知症の人たちを巻き込んで作った法律は見たことがない。
- ・ 皆さんに絶対忘れていただきたいことは、日本は世界の先導者だということです。

(10/4 拡大本人ミーティングより)

- ・ みんなが不安なく自分の認知症を公表できないとしたら、この法律が謳っている共生社会は「まだ遠い」ということになります。
- ・ 目指すのは、誰もが何の心配もなく、自分に必要な支援が受けられる中で病気を公表できる社会です。
- ・ そうした社会になっているかをこの法律の KPI にすべきだと思います。
- ・ 政府はぜひその尺度を持って自分たちの法律が成功しているかどうかを測っていただきたいと思います。

(10/5 認知症本人発：希望のリレーフォーラムより)

共生社会実現に向けた「本人メッセージ2023」

—私たち本人と共生・共創の新時代を！

- 認知症は「見えない障害」です。
- 私たち本人は、「見えない努力と工夫」をしながら、日々を楽しく自分らしく生きていきます。
- 私たちは、認知症を隠したり、あきらめたりせずに、一人ひとり自分なりの思いを 伝え続けていきます。
- 私たちの声と力を活かして、誰もが暮らしやすい地域社会を、ともに創っていきましょうではありませんか。
- 全国どこで暮らしていても、自分らしい人生を笑顔で送れる人を増やそう！
- ★ あなたが希望のリレーを！

(10/5 認知症本人発：希望のリレーフォーラムより)

2. 全国希望大使交流会議の開催

各地域の希望大使同士の交流促進及び活動の継続や活性化に向けた意見交換を行うとともに、希望大使設置済み都府県同士の情報共有とネットワークづくりを目的とした交流会議を開催し、交流会議前後のプロセスを含めて交流・ネットワークのあり方を検討した。

日時： 令和5年11月7日（火）14：00～16：00

会場： ビジョンセンター品川 204会議室（東京・品川駅前）

対象者： 希望大使（複数任命している場合は1名）、希望大使の活動支援者（各1名）、任命している都府県担当者（各1名）

※当日は任命していない道府県の担当者もオブザーバーとして参加可能とした。

参加実績：希望大使 18名、同行者・支援者 16名、都道府県担当者 27名

厚生労働省3名、老健事業検討委員、老健事業担当研究班・事務局等合計71名

[プログラム]

14:00-14:05	オリエンテーション
14:05-14:25	大使自己紹介 進行：全国版希望大使 丹野智文さん
14:25-15:10	グループワーク 大使活動の体験（よかったこと等） これからのより良い活動の発展にむけて ・他の人に共有したいこと ・伝えていきたいこと
15:10-15:25	休憩・交流
15:25-15:55	全体共有：各グループから報告
15:55-16:00	アンケート記入：感想、言い足りなかったことなど
16:00-16:10	これからに向けて：厚生労働省梅本課長補佐、藤田代表

静岡県

静岡県希望大使（令和2年9月～）

委嘱者	三浦 繁雄 氏
任期	令和2年9月30日～令和7年3月31日

■委嘱



令和2年9月30日（水）
県庁東館5階知事室において
知事から委嘱状を交付した。

■活動



認知症への社会の理解を深める啓発
活動を実施

静岡県希望大使（令和2年9月～）

■主な活動（R4年度）

- ・ 本人ミーティングへの参加
- ・ 認知症サポーターステップアップ講座での講話
- ・ 認知症普及啓発活動への参加
- ・ 各市町の企画に対する助言（アルツハイマー月間等）



認知症フォーラムにて



静岡駅にて啓発活動

愛知県

認知症の正しい理解を広めるため、2021年7月27日に2名の認知症の方ご本人に愛知県認知症希望大使の委嘱を行い、認知症の方ご本人から「認知症とともに生きる」を発信し、広く認知症に対する理解を深める活動を行っています。

認知症本人ミーティングへの参加、広報誌での市長との対談を始め、「当事者に前向きになってほしい」という思いで啓発活動に取り組みれています。



いけだ なおやす
内田 豊成さん

こんどう ようこ
近藤 葉子さん



認知症カフェのボランティア活動、認知症サポーターを中心とする交流会への参加や、趣味の押し花の作成など、多方面で活躍されています。



【愛知県認知症希望大使紹介動画(YouTube)】
<https://youtu.be/pf2LwJngj8>



○認知症に関する講演会等での講演



○高校や専門学校での学生を対象とした出前講座の実施



○認知症サポーター養成講座やステップアップ研修会等での講演



○認知症カフェでの交流



京都府

京都府認知症応援大使について

府民への認知症への関心や正しい理解を深めるため、ともに普及啓発活動を行っていただける認知症のご本人を募集し、令和4年12月7日に大使として委嘱。

任期

委嘱日から2年(再任可)

活動内容

- 1) 府や市町村が行う認知症の普及啓発活動
例) イベントへの出席、広報誌のインタビュー
- 2) 府及び市町村が行う医療・介護人材の養成研修への協力
- 3) 認知症サポーター養成講座の講師であるキャラバン・メイトへの協力 等
※認知症のご本人が希望することや得意なことを活かして参加・協力が可能な活動を行っていただきます。

応募条件

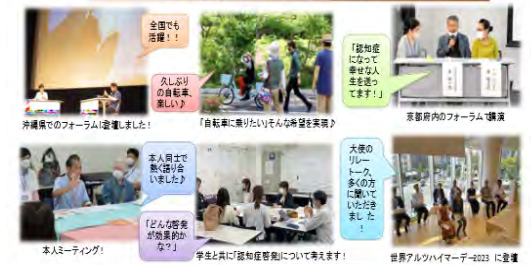
- 1) 府内在住であること
- 2) 認知症の診断を受けていること
- 3) 認知症の普及啓発活動に府と協力・連携ができること
- 4) 氏名・年齢・所在市町村名・病名・経過・顔写真を原則、公表できること
(公表できない理由がある場合はその限りではない)



「京都府認知症の未来座」の旗子



京都府認知症応援大使の活動 (R4.12月～R5.9月)



その数もたくさん活動しています！
「京都府認知症大使のプロフィールや活動内容などの詳細は、認知症ホームページをご覧ください。」
【認知症ホームページ】
<http://www.pref.kyoto.lg.jp/23187.html>

兵庫県

京都府認知症応援大使の活動 (R4.12月～R5.9月)



その数もたくさん活動しています！
「京都府認知症大使のプロフィールや活動内容などの詳細は、認知症ホームページをご覧ください。」
【認知症ホームページ】
<http://www.pref.kyoto.lg.jp/23187.html>

長崎県

認知症本人大使「ながさきけん希望大使」活動事例①



ながさきけん希望大使 田中 豊さん

- 【余念内訳】
- 1 会の名称 07保健大会 余念開催記念認知症シンポジウム
 - 2 主催 厚生労働省
 - 3 開催日時 令和5年9月4日(日) 9:30-10:30
 - 4 会場 国会議事堂第1会議場 (長崎県取次町1-1)
 - 5 参加者 認知症担当 政府関係者、研究者等
 - 6 当日プログラム
 - 開会あいさつ (厚生労働省)
 - 余念あいさつ (未定)
 - 余念スピーチ
 - 余念認知症本人ワーキンググループ：余念団体、認知症の人と家族の会、全国団連、長崎県認知症本人大使「ながさきけん希望大使」、オムニバスディスカッション

- 【スピーチ概要】
- 「子供の時々の事を考えたら落ち込んでばかりで仕事がない。今自分ができる事を数えていくしかない」と、何事も自分自身でやる事をするようになった。病状も悪化し、何も受け入れられない事があるようになり、認知症は昔の痴呆症というイメージが強いので、差別の目で見てもらいたくない。自分も出来るだけ出来るように、「知って貰って貰う方が楽い」と思っています。思いつく限りの事を、思いつく限りの人に行っています。思いつく限りの人に行っています。思いつく限りの人に行っています。
 - 今認知症を患ってしまっている方、これから認知症を患う可能性がある方としてこれからもしっかりと希望大使としての役割を果たしたい。

認知症本人大使「ながさきけん希望大使」活動事例②



交流会の様子

(ながさきけん希望大使 江渡 真由さん、活動支援者(母親) 江渡 カズ子さん、エーザイ社の方)

- 【余念内訳】
- 1 会の名称 ながさきけん希望大使とエーザイ社との交流会
 - 2 開催日時 令和5年9月5日(火) 10:00-11:00
 - 3 会場 エーザイ長崎コミュニケーションオフィス
 - 4 参加者 江渡真由さん(希望大使)、江渡カズ子さん(支援者、母)、エーザイ社の方約50名(web参加者含む)
 - 5 当日プログラム
 - ながさきけん希望大使の取組紹介(長崎県)
 - 希望大使講演(江渡真由さん)
 - 希望大使とエーザイ社の方とのディスカッション

- 【講演概要】
- 仕事で思い出せないこと、間違いが多くなり、上司から受話を勧められた。認知症の診断を受けたときは目の前が真っ暗になった。
 - 認知症でシニアライフを送る必要はない。上司の人たちもものすごく優しくしてくれておかげで、認知症のショックがだいぶ減ったことに感謝します。
 - 認知症の人や家族に接する際は、自分も何人かの役に立てることがある。
- 【参加者の主な声】
- 認知症、家族など周りの方々からのサポートが非常に厚く感じました。
 - 母の認知症についてという話も、僕も少しは変わりがいい。そのようなお話を聞くと、僕も少しは変わりがいいことに感謝を受けました。

熊本県



まつもと ちから
松本 力さん

- ◆ 年代：70代
- ◆ 住所地：熊本市
- ◆ 疾患名：アルツハイマー型認知症
- ◆ 診断時期：65歳頃



認知症への関心と理解を深めるための活動を行う認知症の本人大使「大分県希望大使」が活躍中！！

イベント等での楽器演奏や歌などのパフォーマンスやスポーツ参加



認知症時代に合った楽器演奏(ギター、ピアノ、ドラム、パーカッション)や音楽のセッション、中東の舞踊など、さまざまな活動に参加しています。

認知症の診断を受けて驚かない本人大使の交流会に参加しました。ポーター大会では、認知症の運動会や、認知症の年々トップのスコアという好成績！大会を盛り上げました。

認知症の診断を受けて驚かない本人大使の交流会に参加しました。ポーター大会では、認知症の運動会や、認知症の年々トップのスコアという好成績！大会を盛り上げました。

くまもとオレンジ大使の活動

◎みんなを笑顔にしたい！と活動されている松本力さんです。

認知症の診断を受けて驚かない本人大使の交流会に参加しました。ポーター大会では、認知症の運動会や、認知症の年々トップのスコアという好成績！大会を盛り上げました。

本人交流会に参加

研修会で体験のレクチャー

地域支援活動を行う「認知症の年々」のイベントで、認知症の年々トップのスコアという好成績！大会を盛り上げました。

認知症啓発イベントに出展

音楽会では、認知症の年々トップのスコアという好成績！大会を盛り上げました。

大分県

県民へ広く認知症への関心と理解を深めるための活動を行う認知症の本人大使「大分県希望大使」が活躍中！！

認知症本人大使「大分県希望大使」つち知っちゃん??

こんにちは！私「大分県希望大使」です◎

つち版 第9号 令和5年8月発行 大分県高齢者福祉課

日々の活動

- 各所で(庄田市、大分市、山口県下関市)講演活動
- 中学校にて認知症サポーター養成講座(※1)の講師として参加
- 静岡県富士宮市、長野県上田市で行われたNHKのロケに参加
- 地元の豊後大野市にて、トモロコシの収穫、オレンジカフェ(※2)、農家の田植え手伝い
- 月1回の本人ミーティング(※3)◎などでレディガーデンに参加
- 月1回の日本認知症本人ワーキンググループの会に参加
- 当事者視点で重要な使い心地を調査・助言
- 高校生、大学生との野球を通じての交流
- 若年層での若仕舞
- クリスマスプレイデン氏との交流

戸上さんからのメッセージ

より多くの人に自分のメッセージ・活動を知ってほしい。認知症大使をやっています。日々の生活は好きなことに集中する時間が必要だと思います。認知症になるまでに出発することが、出来るようになると思います。新しいことを覚えることもできます。私はパソコンを覚える程度です。認知症は「自分が好きなこと」は、自分らしく生きるチャンスでもあるのだと思います。

最近ハマっていること!!

ゴルフの練習で、月2回練習場に行き、友達3人がコースに連れて行ってくださいます。スコアはつけません。

【お見合い認知症情報サイトおれんじ】(<https://orange-otajai.jp/>) に掲載中！ぜひご覧ください。(*_*)

沖縄県

沖縄県認知症希望大使の活動紹介

沖縄県では、9月の世界アルツハイマー月間にあわせて令和5年9月4日に「沖縄県認知症県民フォーラム」を開催しました。フォーラムでは、「沖縄県認知症希望大使」を3名の方に初めて委嘱し、玉城知事から委嘱状を交付しました。このフォーラムの中で、これまでの経験を踏まえたメッセージを県民の皆さんに発信したり、認知症をテーマとしたトークセッションに参加するなど、希望大使としての活動の第一歩として重要な役割を果たしました。今後も、県民一人一人が認知症の理解を深めることができるよう活動していく予定です。

1 知事から3名の大使の方へ委嘱状の交付された様子。左から新玉城知事、長瀬真由美さん、大城健史さん。

1 委嘱状交付後知事との記念撮影。

メッセージを届ける大城健史さんからは、これまで認知症を患え、つらかったこともあったが、今は認知症を患ったことを後悔していません。認知症を患ったことを後悔していません。認知症を患ったことを後悔していません。

トークセッションの様子。希望大使の、認知症に関する大切なメッセージを県民の皆さんに届けることができました。

2.2. 交流会開催の工夫と配慮

全国希望大使交流会議の開催にあたり、本人が参加しやすい運営の在り方を模索し、会場の設営、参加者の配置、進行のわかりやすさ、グループワークの進め方等、様々な側面からの配慮と工夫を試みた。

○交流会議の目的の明確化

参加者の一人ひとりが交流会議の目的を理解し、自身の想いや意見を積極的に話してもらえるよう、話し合う際には常に目的やテーマが見えるように掲示しながら進めた。

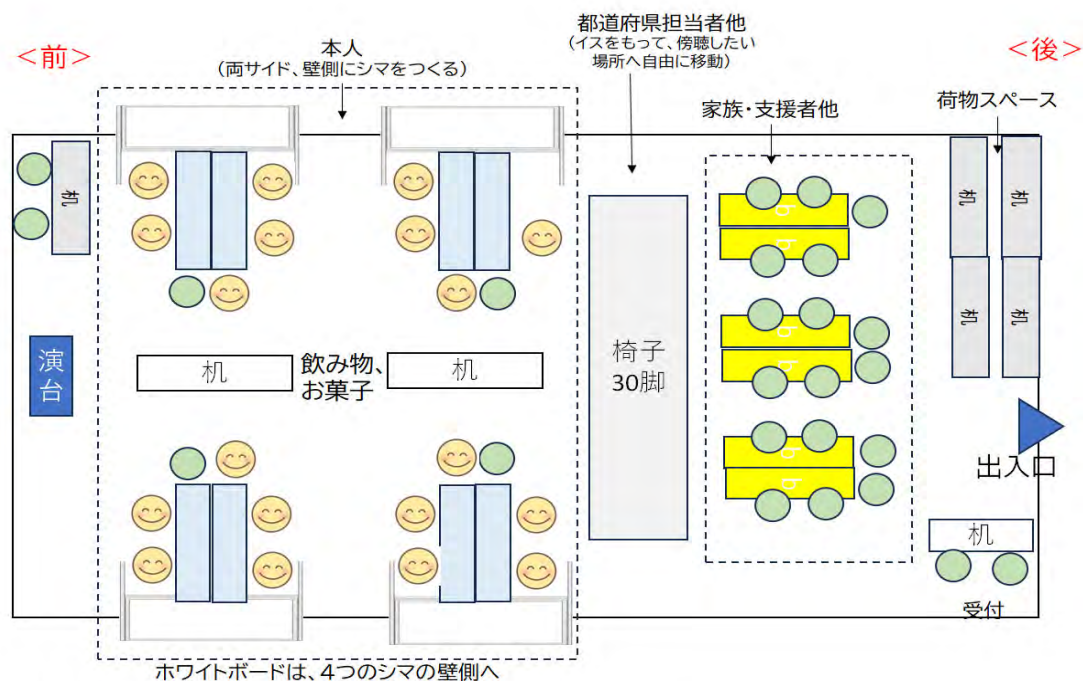
<会議の目的>

- 大使になって体験していることや自分の想い、気づきを語り合い、今後の活動やこれから大使になる人及びその関係者に役立ててもらおう。
- 他地域の大使との交流を通して元気や知恵を伝えあいながら、地元に戻ってからの暮らしや活動をより良いものにする。

○参加者が発言しやすくなるための工夫

地元の活動で本人ミーティング等には慣れている参加者も多かったが、今回の大使交流会ではほとんどが初対面であり、慣れない場所での交流となった。そのため、会場づくりや運営上の配慮・工夫は非常に重要であると考え次のよう試みを行った。

【会場の設営】



★縦に机が4台入るので、実際は真ん中に、空きスペース十分あり

- 大使と支援者のグループを分け、大使同士、支援者同士がそれぞれの立場で忌憚のなく意見交換できるようにした。
- 大使のグループは4人～5人とし、グループ内の発言がきちんと記録として残るよう、各グループに記録係を配置した。
- 各グループの壁側にホワイトボードを準備し、グループワークのテーマを常に確認しながら話し合えるようにした。
- テーブルには飲み物と菓子を準備し、ざっくばらんに話せる雰囲気づくりに配慮した。
- 都道府県担当者等オブザーバーの席は、大使グループと家族・支援者他グループの間に席を配置し、グループワーク中は自由に各グループの話聞いて回れるようにした。

【その他】

自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> • 冒頭、希望大使全員が一言ずつ自己紹介を行った。 • 最初に自己紹介をお願いした大使の大きな声と明るさにより、会場の雰囲気は一気に和み、続く大使たちもリラックスした様子で元気に自己紹介をしていた。
グループ分け	<ul style="list-style-type: none"> • 話題の共通性や話しやすさの組み合わせ等に考慮したグループ分けを実施。
グループワーク進行役	<ul style="list-style-type: none"> • 本人が同じ立場で話し合えるように、グループの進行役も本人が行うこととした。 • 進行役は、全国版希望大使や地元の本人ミーティングの経験が豊富な方に依頼し、各グループに配置した。

2.3. グループワークの様子と全体発表



今後のより良い活動に向けて、また、次に続く大使やその活動の充実に向けて、伝えたいことや共有したいことについて積極的な話し合いが行われた。

大勢のオブザーバーが取り巻く状況で実施した大使交流会は、各地域で実施する通常の本人ミーティング等と比べてかなり雰囲気が違っていた。都道府県担当者等のオブザーバーが熱心に大使たちの話を聞こうとすればするほど、グループを囲い込む形になり、本人が声を出し難くなる懸念もあった。



しかし、実際には本人の方から「もっと近くに寄って話を聞いて欲しい」と都道府県職員に声をかける場面もあり、大使が集まって話し合う貴重な機会を県の施策に役立てて欲しいとの思いが伝えられていた。



終了後の記念撮影の様子

希望大使・グループワークの記録（全体共有：各グループからの発表）

1グループ： 丹野智文大使、内田好司大使、のりこ大使、阿部俊昭大使

【これからのより良い展開に向けて】

- 伝えていきたいこと
 - ・ 認知症になって仕事を辞めさせられたり運転をさせてもらえなくなったりと、いろいろな悔しい思いをしてきたので、認知症になっても全てが出来なくなるわけではないということを伝えていきたい。
 - ・ 認知症になると周りにどう思われるか気になって、引きこもってしまう人も多いけれど、実際は助けてくれる人が大勢いるということを伝えたい。
- 仲間の存在は大きい
 - ・ 1人の人が元気になって、そこから多くの人たちが繋がって、世の中に人の輪を広げていけたら良い。

- ・ 今日には認知症の希望大使の話をしているが、認知症の人が住みやすい町は、子供にも、お年寄りにも、障害者にも住みやすい町になると思うので、これを広げたい。

2グループ： 藤田和子大使、近藤葉子大使島田豊彰大使、松本力大使

【活動を通じてよかったと思うこと】

- 大使の活動といっても、多分、これがピンポイントだという活動は無いと思う。今まで通りいろいろなことをやっている人もいるし、新たに発信を始めた方もいると思うが、そんなことを通して自分も学んでいけるし、元気を出せる。周りも、少しずつ認知症の人に対する理解が深まっていると感じられて良かった。
- あまり気負わず、ありのままの自分で、否定しないで、自然体で、その場の雰囲気が良くなるように心がけている。
- このような全国の大使に出会えたことで、大使になって本当に良かった。

【これからのより良い展開に向けて】

- 目指しているのは、希望を持って笑顔で生きられる人を増やしていくこと
 - ・ この活動を続けていきたい。仲間の輪を増やしていきたい。
 - ・ 私たち大使はパートナーと一緒に活動しているが、その目的は、認知症になってからも希望を持って生きられる人、笑顔で生きられる人を増やしていくこと。
 - ・ そこを目指して、それぞれの県の中で、県の担当の方も責任を持って啓発活動に取り組んでいく。
- 気負わずに自分が暮らしている様子を伝えるだけでいい
 - ・ 何かをしなければいけないわけじゃなく、普通に、元気に暮らしている自分の様子を伝えていく。
 - ・ 話せなくなっても、どこかに入所したとしても、大使という肩書きはずっと持っていて良いと思う。大使として最後まで人生を全うし、自分らしく生きている方であれば、本人が直接表に出さなくても、周りにいる任命者や大使と共にいる人たちが、その意思を表していけばいい。
- 認知症を隠すことなく、どうどうと生きるのが大使だ
 - ・ これから認知症になる人たちに、認知症になっても最後まできちんと生きていけるということを示していける存在として、多くの人たちが大使になれるといい。
 - ・ 認知症を隠すことなく、堂々と生きるというのが大使だと思うし、その活動を継続していくことが大事だと思う。

3 グループ： 岩田裕之大使、三浦繁雄大使、下坂厚大使、宮脇勝大使、大城勝史大使

【これからのより良い展開に向けて】

- 相談先（地域包括支援センター）のわかりやすさについて
 - ・ 今日もいろいろなところから集まってきているが、地域によって地域包括支援センターの名称が違うという話が出た。名称が違うと、引っ越した時などに相談先がわからなくなるので、全国的に名称を統一した方が良いと思う。
- 診断された方へのアプローチ：本人の集い場所に関する情報が欲しい
 - ・ ケアパスなどのパンフレットには、認知症カフェや介護施設の情報は載っているが、本人ミーティングや認知症になってちょっと当事者と話したいという場合の情報は載っていない。
 - ・ 診断後の不安や絶望を抱えずに済むように、本人ミーティング、カフェなどの情報が欲しい。当事者のメッセージを載せたりしながら、参加者の気持ちがかかるようにすれば、前向きに参加したいと思う本人もいると思う。
 - ・ 診断後に、誰かが繋いでくれることが重要だ。
- 希望大使交流会の機会を定期的に持ちたい
 - ・ 今回のような他地域の大使の方たちと定期的に話し合える機会があると良い。
 - ・ どんな活動をしていて、どんなメリットがあったのか、どんな改善をしてきたのかなどの意見交換をしたい。
- 認知症サポーター養成講座やステップアップ講座について
 - ・ 現在の養成講座はアルツハイマー型の認知症が対象になっているが、実際は、それに当てはまらない認知症の人がたくさんいる。
 - ・ 認知症といってもいろんな種類があるということを理解してもらうことや、たとえ同じ種類の認知症でも、生活環境や個別の状況で必要なサポートや介護は全く違うということを伝えたい。
 - ・ 認知症だから「やらせない」ではなく、本人の好きな事やできることを前向きに取り組めるようにして、困ったことはサポートしていく。そういうことが大事だと思う。
 - ・ 千代田区では、養成講座を受けたあとに現場に行き報告書を出すことで、ステップアップ講座の修了証を与えている。今後、養成の在り方も検討していくべきと思う。

4 グループ： 長田米作大使、伊藤敬子大使、戸上守大使、田中豊大使、柿下秋男大使

【活動を通じてよかったと思うこと】

- 当事者同士で繋がり、話をするのはとても大切
 - ・ 当事者同士で話ができるようになり、他の人がどのような考え方をしているのかを知ることで、自分の安心感につながった。
 - ・ 人と話をしたり、話を聞いたりすることはとても良いことだと思う。地域では、地域包括支援センターが中心になって当事者が集まれる場所をつくってくれている。そういう場づくりがとても大切だと思う。
 - ・ 自分が通っているデイサービスでは頻繁に本人ミーティングを開催している。いつも 20 人から 30 人くらい集まって、わいわいと楽しく過ごすことが出来ている。そうした場づくりをしてくれるデイサービスの関係者にはとても感謝している。その取組があったからこそ、最初は家に閉じこもっていた自分が元気になれた。
 - ・ ピアサポート活動にも積極的に取り組んでいる。診断を受けて減入っている人を 100 人くらいは救えたと思う。
- 働くことは楽しい
 - ・ 大学でコピー用紙を届けるような仕事をしている。有償ボランティアの活動は、やっていてとても楽しい。
 - ・ 診断直後、会社の幹部は自分がそのまま働き続けられるように配慮をしてくれて、とても有難かった。しかし、同僚の理解を得ることはなかなか難しく、辛いことも多かった。差別的な対応も多かった。
 - ・ 若年性認知症は経済的な課題も大きいので働けるようにしてもらいたい、社員への啓発も重要だ。
- 講演会で参加者からエールをもらえた
 - ・ 自分は引っ込み思案な性格だが、こういう病気になった自分だからこそ話せることがあると思い、講演活動をするようになった。
 - ・ 参加者のアンケートを見せてもらったら、「本人の前向きな姿にエールを送りたい」という言葉や、「本人の気持ちに向き合うことが大切だと思った」「好きな事を続けることが大切だとわかった」等々、多くの人認知症と言う病気を理解してくれて、認知症へのイメージが変わったと言ってくれたことが嬉しかった。

【これからのより良い展開に向けて】

- 認知症であることを伝えることで、そこから始まるものがたくさんある
 - ・ 自分は認知症であることを自治会の人みんな知っている。だから、地域の人認知症への偏見もないし、困ったことには手を貸してくれる。
 - ・ 自分が認知症だって、みんなが知っていてくれるから、たとえ迷子になっていても、すぐに見つけてくれる。

- 家にこもっている人を誘い出したい
 - ・ ピアサポート活動に力をいれたい。みんな一人で落ち込んでいるから、声をかえて連れ出したい。
 - ・ 特に男は家に閉じこもってしまう。周りが誘い出して、いろんな人と出会ってほしい。
- 当事者が当事者に出会えるようなきっかけづくり
 - ・ 元気を無くしている人に声をかけて、一人でも多くの人に元気になって欲しいと思うけれど、本人が本人に出会うのはけっこう難しい。自分では困っている人を探せない。だから、地域包括支援センターや行政と本人と一緒に活動することがすごく大切だと思う。
- 自分に出来ること、したいことを声に出すことが大事
 - ・ 認知症はすぐには進行しないし、感性はいつまでも保たれている。だからこそ、趣味とか、やりたいことを大事することが重要。
 - ・ そのことをケアマネがしっかりと理解してくれていればいいが、必ずしも認知症に強いケアマネばかりではないのが現実。わかってくれる専門職との出会いは大事。
 - ・ 認知症になっても遠慮せず、自分がどうしたいかを言って欲しい。言わなければケアマネだってわからない。
 - ・ 医者は「認知症です」って言うだけだが、自分はまだまだこれが出来るということ伝えていかなければいけないと思う。
- 子どもにも認知症のことを知ってもらいたい
 - ・ 講演会で話を聞きに来てくれた若年性の女性のことが気にかかる。小学生の子供は認知症のことを理解しておらず、物忘れが多くなった母親を責め立てて、母親は辛そうだった。小学校の教育の中で、きちんと伝えていく必要があると思う。
 - ・ 子どもだけでなく、他の保護者への理解を促すような働きかけも必要だと思うので、そういうところで活躍してみたい。

同行者・支援者・グループワークの記録（全体共有：各グループからの発表）

1 グループ：

宮前（東京都）、横塚（東京都）、阿部（山口県）、山崎（愛媛県）、廣瀬（長崎県）、柿下（東京都）

【活動を通じてよかったと思うこと】

- 大使たちは、当事者から見た認知症を伝える活動をやっている。そして、本人が何かをやりたい、始めたいとつぶやくことで、世界が広がっていく事を伝えようとしている。
- 大使のメッセージ（が大事）というよりは、大使であるその人がそこにいるだけで、「あの人に会いたい」「その活動に参加したい」と思ってもらえるような存在になっている。
- 家族が言った、「この大使活動が、新しい人生の一步を踏み出すきっかけになった」という言葉が印象的だった。介護は大変だと言われているが、その意識はあまりなくて、介護者はこうあるべきだという囚われた意識が変わってきている。

【これからのより良い展開に向けて】

- このような本人同士が会える機会はとても大事だが、それだけでなく、家族も、そこに関わる人も、地域のいろいろなどところで、そういう活動がたくさん出来ていくことが大切だと思う。

2 グループ：

吉川（大分県）、杉本（神奈川県）、伊藤（愛知県）、島田（徳島県）、松本（熊本県）

【活動を通じてよかったと思うこと】

- 外に出られなくなっていた方が大使になって講演をしたり、活動をしたりするようになった。どんどん自信を持って生き生きと発言している。自分のことや病気のことを伝える機会が持てて良かったと思う。
- 活動を通して、いかに周りの人たちがこの病気のことを知らず、知識もないという現実を知ることができた。そうしたことを踏まえて、これからの活動ではもっと多くの人に認知症の実際はこうだということを広めていきたい。

【これからのより良い展開に向けて】

- 家族の立場からは、自分たちが何らかの事情で動けなくなったり、一緒に活動できなくなったりしても、地域の方や周囲の方々に理解してもらい、寄り添いながら一緒に活動を続けられるようにしてほしい。
- 若年性認知症を発症された方に対して、仕事の継続のことや環境の変化、使える支援や制度など、その後の道標となる情報を提供できると良いと。
- 支援者としては、本人が伝えきれない部分を代弁し、出来ないところだけを支援するなど、本人の黒子に徹して活動を続けていきたい。
- 一人ひとりの個別性があるので、認知症という名前だけでひとくくりされたくない。個別性を理解してもらえるような活動をしていきたい。

- 自分自身も含めて、認知症はいつ発症するかわからない病気なので、幼稚園や小学生の頃から この病気に対する知識を日常生活の中で持てるような教育が必要だと思う。

3 グループ：

金谷（鳥取市）、増田（香川県）、田中（群馬県）、安次（沖縄県）、宮澤（東京都）

【活動を通じてよかったと思うこと】

- 認知症になって閉じこもってしまう方がたくさんいる。閉じこもる時期があるのは仕方ないかもしれないが、活動を通して、一緒により良い地域をつくっていくということを一生懸命やっている。
- 仲間に出会えたことで、私たちも自信がついたり学べたりすることがたくさんあった。本人たちがものすごく元気になっていく姿を間近で見ているので、こういう活動をもっと応援していきたいと思う。

【これからのより良い展開に向けて】

- 大使がもっと活動できるように、移動のことやスケジュールのことが充実してくると、私たちにとってもより良い社会に繋がっていくのではないかな。
- 今日ここに集まった皆さんは、この場所で元気になって地域に帰るが、地域に帰ったらやっぱりダメだったということでは困る。自分の地域で仲間を増やすことが大事だ。仲間を増やして、より良く暮らせる地域づくりが出来るように、時々こうしてみんなと会って元気を注入することが大事だと思う。

【メッセージ：厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 梅本課長補佐】

本日は全国希望大使交流会に参加させていただきありがとうございました。

大使の皆様の話をお聞きしたいと思い、全てのグループを回らせていただきました。私自身、希望大使について思うところもありますので、それを踏まえてお話させていただきます。

手前味噌にはなりますが、皆に希望を与えてくれる「希望大使」という名称について、とても良い名前を付けたと思っています。地域の中では既に、本人ミーティングや認知症カフェなど様々な取組が始まっていますが、希望大使の事業はそれらとは少し異なる側面があり、希望大使がそこにいるだけで、県内の本人さんたちの励みになる場所があるように思います。まだ任命していないところも、ぜひ希望大使を任命していただきたいと思っています。

都道府県が希望大使を任命するという事は、県の方が希望大使の方に会っていただく、その支援者やパートナーの方にも会っていただくこととなります。そして、そこから普及啓発活動や講演会活動を進めていくことで、広域的に認知症の方と出会い、認知症のことをあまり理解していないような一般の方とも出会うこととなります。この取組は、そういう多くの出会いの場が生まれる事業だと考えております。まずは、認知症の本人に会って

いただき、認知症に関する普及啓発や本人発信支援を県内に広げていくことを、明日の会議の中でもご検討いただきたいと思います。

また、今日、何よりも皆さんにお伝えしたかったことは、我々厚生労働省の職員も含めて、様々な方が一堂に会して話し合えるこのような会議が出来たということです。20年前に、認知症のご本人と交流するこのような会議に参加することを考えておられた方がいらっしやるのでしょうか。認知症のご本人の方、支援者するパートナーや同行者の方、そして都道府県担当者の方が集うこのような場を、是非、都道府県内にもたくさん作って、住民の方と共に認知症への理解を深めていただきたいと思います。

【主催者挨拶：JDWG 代表藤田和子】

本日は本当にいろいろなところから集まってくださりありがとうございました。希望大使の活動など、様々な情報交換を通して視点が変わったという本人やパートナーの方たちもいらっしやるのではないかと思います。

大使になったら、やはりその責任を感じて自分がどう伝えていきたいか、何をどこで発信すればよいか等をパートナーと一緒に考えようと思います。ですが、それは大使という肩書きをもらったからこそできることだと思います。そして、認知症の啓発とか理解というとき、「認知症になってからも希望を持って暮らすことができます」「自分らしく暮らしていくことは可能です」ということを啓発していくことが、私たち希望大使の役割だと思っています。

私たちも、いつまでも同じ状態で活動を続けられるとは限らないけれど、工夫をしながら、みんなの助けをもらいながら、声援をいただきながら、毎年毎年、1日1日、自分の本分を全うできるように頑張っています。そういう姿を見せていく。そして、次に続く人たちに繋いでいくという役割があると思っています。その流れを作り、「あきらめずに生きていくんだ」と思える人を増やしていくのが希望大使だと考えています。

既に行政の方たちも共に動き出してくださっていると思いますが、是非とも、そうした活動を継続させていくところでも力を注いでいただきたいと思います。私たちも頑張りたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

2.4. 参加者アンケートの結果

本人:アンケート回収数12件

1. 参加した感想

①とても有意義だったと思う	9件	75.0%
②意義があったと思う	3件	25.0%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- 新たな仲間ができた。
- いろいろな話を聞いて大変ためになったと思う。
- 認知症希望大使として共に集まり、心からの交流を持つ素晴らしい機会でした。
- 全国で活動している仲間と合える、たくさんの仲間と合える機会がもらえて良かった。
- 同じ経験をした同志で話げできた。
- 様々な希望大使の方と話をして、色々な意見や話げできて良かった。

【「意義があった」を選んだ理由】

- 当事者同士が出会い、話し合ふことが大切。
- 他の人の意見が聞けてよかった。
- 色々な人の話を聞けた。

2. 今後活動をよりよくしていくために、気づいたこと

- 1人でも多くの当事者が増える活動をしていきたい。支援者がやりすぎの対応も見受けられた。またこのような機会があれば参加したい
- 今後も変わることなく健康で暮らしたい。
- 事例発表する方がいてもよい。
- もっといろいろな発言を出来るようなやり方があるということを感じました。もう少し時間があつたらいいと思いました。
- 自分の地域でも本人交流会ができるようにこれから活動したいです。
- 今後、僕らが得たような活力を二人、三人と得られるように。来られなくなった仲間もいたので、サポートがあつたらよい。
- その人の言っていることを聞く。
- 前もって皆さんの話すことの事前聞き取りシートがあつたら良いと思う。

3. 今後の大使交流会の必要性について(複数回答)

- 1) 今後も今回のように全国の大使との交流会が必要。 9件 75.0%
- 2) 今後も今回のように集まって全国の大使同士が直接話し合ふ交流会が必要。9件 75.0%
- 3) 今後は、オンライン等での交流会も必要。 2件 16.7%
- 4) 交流会は、年1回程度でいい。 4件 33.3%
- 5) 交流会は、もう少し回数多く必要。 4件 33.3%
- 6) 交流会は、今回のように半日程度でいい。 4件 33.3%
- 7) 交流会は、1泊2日とか、もう少しじっくり話し合えるといい。 3件 25.0%
- 8) 全国の大使同士の交流会は、必要とは思わない。 0件 0.0%

希望大使支援者:アンケート回収数12件

1. 今回の全国希望大使交流会議の意義について

1) 大使にとって

①とても有意義だったと思う	9件	75.0%
②意義があったと思う	1件	8.3%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%
④ 無回答	2件	16.7%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- 全国にこれだけ多くの仲間がいることがわかったから。
- 元気をもらえたようです。来てよかった、たのしかったと話していました。
- 他県の当事者とつながる事ができた。
- 実際にお会いすると、やっぱりみなさん生き生きとしていて、素敵でした。本人の声は、とても多くの学びがあり、今後活かそうです。
- 以前から「他の地域の大使と会って話したい」「どんな活動をしているのか知りたい」「知ることが出来たら地域の仲間に伝えたい」と言っておられたので。
- 家族の思いが聞けた。本人同士の交流ができていた。
- いろいろな地方の方の意見聞けて、とても意義がありました。
- 参加することにも、とても意義を感じられていました。

2) パートナーに自身にとって

①とても有意義だったと思う	10件	83.3%
②意義があったと思う	2件	16.7%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- パートナーもこれだけいることが分かり、新たな出会いがあった。
- 同じように元気に活動されている方が何人もおられることに勇気づけられた。県の担当者が学んでくださるいい機会になったと思う。県の行政のこれからは活かして欲しいと思います。
- 活動をする上での課題の共有、解決策を知ることができた。
- たくさんの仲間に会えて、よい情報を得ることができ、また元気でがんばれると思った。
- 家族の思い、他地域の大使の思い、パートナーの方々の思いや工夫が聴けたから（自分の活動に取り入れられるもの多々あり）。
- それぞれにとって思いや考え方を聞けた。
- 日頃の気持ちを共有できたので良かった。
- 皆さんの思いを肌で感じ、コミュニケーションがとれることが有意義でした。「出会い」ですね。
- 全国のパートナーの方とのお話ができただこと。工夫を聞けたこと。

2. 今後のよりよい大使活動に関する気づき

- もっと露出できる場をつくっていききたい。
- うまく話せずとも、ありのままの姿で明るく活動していくのでいいんだと自信がつかしました。
- 大使がいるだけでも、その存在そのものが大切だということ。
- 活動（講演）だけが大使の活動ではなく、日々の生活も活動という藤田さんの言葉に気づかされた。
- 少しずつでも前に進んでいけば良いかと思います。
- 藤田さんがおっしゃってくださったように、「話せなくなっても、その人の人生をまっとうする」という考え方も、これから深く考えていきたいことだと思います。もちろん話すことも大切だと思いますが。
- 今回の交流会について、体力、集中力がそれぞれ違うので、展開に工夫が必要かも。
- 本人が本人らしく生活できること。口には出せなくてもつらいこともたくさんあるが、ありのままに生活できるように、みんなでできたらより共生社会に近づくと考えた。

3. 今後の大使活動をよりよくしていくための環境づくりやパートナーとして必要なこと

- 愛と勇気が必要。皆で楽しみたい！
- パートナーに対しての補助（パートナー2名体制等）
- 送迎のサービスをつけていただけたら助かります。支援をするために仕事を休むのがちょっとつらいです。
- 移動手段（車が運転できなくなると活動に支障をきたす）
- みなさんそれぞれ自分らしく活動されているので、もっと共有できたら良いと思いました。
- 認知症への誤った認識の払拭。これを地域で一緒に広げる。
- 活動の移動への支援。講演会（大きな所）ではなく、集会など地域の活動の場での啓発。
- ケース by ケースでひとつくりに出来ない問題と思う。
- 発信先として医療機関などにも注力していけば良いのではと思います。その繰り返しが必要だと思います。
- 支援者が大使をリスペクトしていること、大好きなことが伝わってきた。大使が元気で明るくて、圧倒されました。
- サポートする人が複数人いること。→一人が出来ないと活動が出来なくなるのは、大使の活躍の場を減らしてしまうので、数名いてもいいと思った。

4. 今後の大使交流会の必要性について（複数回答）

- 1) 今後も、今回のように全国の大使との交流会が必要。 10件 83.3%
- 2) 今後も集まって全国の大使同士が直接話し合う交流会が必要。 12件 100.0%
- 3) 今後は、オンライン等での交流会も必要。 2件 16.7%
- 4) 交流会は、年1回程度でいい。 1件 8.3%
- 5) 交流会は、もう少し回数多く必要。 4件 33.3%
- 6) 交流会は、今回のように半日程度でいい。 3件 25.0%
- 7) 交流会は、1泊2日とか、もう少しじっくり話し合えるといい。 5件 41.7%
- 8) 全国の大使同士の交流会は、必要とは思わない。 0件 0.0%

【その他、交流会についての意見・アイデア】

- 交流会最高。ご家族（妻）の夫への愛をたくさん感じた。
- 全国の大使交流会を一般の方にもアピールして欲しい。啓発に使って欲しい。
- 集中できるタイミングだけ参加する自由な形式だと、大使がふらっと寄りやすいと思いました。

都道府県担当者: アンケート回収数24件

1. 今回の全国希望大使交流会議の意義について

1) 大使にとって

①とても有意義だったと思う	17件	70.8%
②意義があったと思う	3件	12.5%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%
④無回答	4件	16.7%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- 普段の活動のふり返り、共有につながっていると感じたから。
- 他県の大使活動の話聞いて良かった。大使自身も色々な話を聞いて良いリフレッシュになったと思う。
- 地域は違っても共感できる部分が多くあると思う。その気持ちの共有の場があることが、これからの活動の励みになると思う。
- いろんな方のお話を聞いて良かったと思う。
- みんなに会いたかった、仲間がいることが励みになるとおっしゃっている方がいて、大変楽しそうに話されていたので。
- それぞれの当事者にしか分からない悩みなどを共有できた。
- すごく目が生き生きして話をしたり聞いたりしているように見え、楽しそうに参加していたから。
- 同級会のような盛り上がりでとても楽しそうでした。
- 多くの本人同士で様々なことがらを話せた。
- 大使同志の交流を通じて、大使としての役割の再確認につながったと感じたから。
- 他地域の仲間と意見・情報交換することで、自分の活動を振り返ったり元気をもらえたから。
- 普段は地域の中での出会いとなるが、このような機会があれば全国の同じ境遇の方と出会って話ができる。

2) パートナーにとって

①とても有意義だったと思う	16件	66.7%
②意義があったと思う	3件	12.5%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%
④無回答	5件	20.8%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- 家族、推進員、その他支援団体等、様々な立場の人が集まって情報交換されていた。
- グループ分けを立場別にして、立場ごとのお題にした方がより話しやすかった。
- 同じ思いを共感されたことはパートナーの方にとってとても良かったと思う。
- それぞれの当事者にしか分からない悩みなどを共有できた。
- 他の都道府県の人と関わる機会はなかなかないと思うから。
- 多くのパートナーが一堂に会して会議が出来た。
- パートナー同士の共有から、今後どう支えていく必要があるかを館得るきっかけになったと感じたから
- 他地域の情報交換の場となる。
- 気持ちを気にしていないのでわかりません。
- 他の支え方を（伴走）聴いて、これからを考えられたと思います。

3) 傍聴されたご担当者にとって

①とても有意義だったと思う	22件	91.7%
②意義があったと思う	2件	8.3%
③意義があると思わなかった	0件	0.0%

【「とても有意義だった」を選んだ理由】

- ご本人達の活動に対する考えが聞けてよかった。他自治体の人たちとの意見交換は良いと思う。
- 全国の大使の生の声を拝聴する機会は貴重で、今後の政策に反映すべき内容を述べられていた。
- 全国大使のお話を聞くことができて良かった。
- 大使からは普段聞くことができないような話が聞けたため。
- 他県の大使の様子や活動の様子が分かりました。本人ミーティング推進のヒントになりました。地方から都内まででてくるのは予算面で負担が大きい（次年度の確保は難しいかも）
- 本人達の意見を聞くことが出来る重要な機会だったため。
- 様々な方のお話を聞ける貴重な機会でした。
- 大使やパートナーの方から、リアルな意見をたくさん聞くことが出来たため。
- 本人のやりたいこと、支援者・パートナーののぞむこと。以上を施策に反映する立場であるため、今後の展開に活かせる内容を聞くことができた。
- 大使、パートナーの方々のいろいろなお話が聞けてとても良かった。
- 色々なご本人の思いを聞くことができる機会はなかなかないので、やってみたい活動も伺えたので、今後の施策の参考にしたい。
- それぞれの当事者にしか分からない悩みなどを共有できた。
- 他の地域の大使の方がすごく自分の意見をもち発信していて、私の県でも大使の発信の仕方（お話の仕方など）をもっと工夫したいと勉強になった。
- 当県には大使はいないので、他県の活動がとても参考になりました。
- 希望大使の方々がとても明るく、いろんな思いを語る姿が印象的でした。本人には本人が救えることが多いのだろうと思いました。また、希望大使を通じて県においてどのような活動をしていくとよいか、イメージを持ってました。

- 他地域の大使の生の声を直接聞くことができたため。
- 日本各地の意見が聞けた。
- 大使の方やそれを支援される方が、どのような思いをもって活動をされているのか、普及活動の場面では聞けないことが聞けたから。
- 当事者同士でお話されている中に出る大使の方のご意見は貴重でした。
- 他の担当と交流でき、事業の実施方法等の意見交換ができたから。直接会って話をすることができ、今後につながったから。
- 全国の大使の方の状況を知ることができるいい機会となった。
- こういう機会は、県内では全くないので、直接みんなの想いを施策、企画に影響させたいと思います。

2. 交流会を通じて、今後のよりよい大使活動の中身について気づいたこと

- 大使がやりたいことの支援を考えたい。
- 大使自信がカフェを経営していることは大変そうだが、ご本人はとても充実されているようだった。
- 今後の希望大使の任命に参考にさせていただきます。
- 情報共有、フィードバック。たくさんの方ではなく、わかりやすくコンパクトにまとめる。
- ピアサポート活動、まだまだ地域には認知症になると閉じこもりがちになる人が多いと学んだので、身近に相談できる機会が必要と思いました。
- 本人のやりたいこと、地域ののぞむことのマッチングを丁寧にしていきたい。
- 本人の伝えたいこともひろめていく機会をもっともうけていきたいと思った。
- 仲間がいることが嬉しいとおっしゃっていた方が、たくさんいらっしゃったので、地域ごとでもいいので、本人が集う場をもっと増やせたらと思う。
- 県にとらわれず、全国規模での協力や集いが大事。
- まず、ご本人の“やりたいこと”をお聞きして、それに寄り添っていきたい。
- 交流会を引き続き行っていくことが大事かと思った。
- 社会各場面での周知（特に若い世代）
- 普段の生活を包み隠さず発信することに加えて、大使として各市町村の職員と話して、政策に関わることも大事と感じた。
- できるだけ大使のしたい活動を尊重していくことが大事だと思いました。
- 本人の気持ちを直に話せる機会をつくる必要があると思った。
- 大使から直接の発信である本人ミーティング、うまくいく時、ダメな時、色々だろうけど、それもまた今後を考えられると思いました。

3. 今後大使活動をよりよくしていくための環境づくりやパートナーとして必要なこと

- 任命するだけでなく、本人と共に発信していきたいと感じた。
- 定期的に今回のように集まって話ができる機会があると良いと思いました。
- 移動の問題はとても大きいと思う。
- 移動やスケジュールの課題を持っている方が多いと思うので、いろんな都道府県の状況を聞いてみたい。
- 今後も大使や支援者の交流の機会があると良い。全国大使のみなさんに各都道府県の活動をバックアップしてもらえると心強い。

- 自治体の周知
- 大使の活動については、県が主導するイベントの場合はすぐに参加の調整ができるが、他の団体や地域等もしくは本人からの場合は、予算や日程の調整がまだ難しいと感じている。パートナーも毎回同行が必要なので、パートナーへの配慮も必要。
- これから考えたいと思います。
- 本人発信（本人の言葉）をする場を確保したいと思います。人は簡単には変わらないと思いますが、本人の言葉を聞いて感じるものはあると思います。

4. 今後の大使交流会の必要性（複数回答）

- 1) 今後も今回のように全国の大使との交流会が必要。 21件 87.5%
- 2) 今後も集まって全国の大使同士が直接話し合う交流会が必要。 16件 66.7%
- 3) 今後は、オンライン等での交流会も必要。 9件 37.5%
- 4) 交流会は、年1回程度でいい。 7件 29.2%
- 5) 交流会は、もう少し回数多く必要。 6件 25.0%
- 6) 交流会は、今回のように半日程度でいい。 11件 45.8%
- 7) 交流会は、1泊2日とか、もう少しじっくり話し合えるといい 2件 8.3%
- 8) 全国の大使同士の交流会は、必要とは思わない 0件 0.0%

【その他、交流会についての意見、アイデア】

- 当事者の移動が大変なので、ブロックごとの開催など検討してください。
- 今回、各県から1人のみの参加だったため、今後はもっと多くの方が参加できるようになるといいと思った。
- 対面とオンラインを組み合わせ、年に何回かあってもいいかなと思いました。
- 多くの方に参加いただいたため、少し声が混ざっている時がありました。もう少し広い部屋であれば、さらに聞き取りやすくなるかと思います。

3. 希望大使任命・活動推進セミナーの開催

全国の地域版希望大使事業担当者を対象に「希望大使任命・活動推進セミナー」を開催し、希望大使事業に取り組む意義や任命・委嘱及び活動支援等に関する各地の取組について情報共有を行った。また、担当者が一堂に会する機会を活かして、他自治体との関係構築を図り、担当者間の継続的な情報交換や相互支援・相談を可能とする関係構築に繋げた。

日時： 令和5年11月8日（水）10：30～15：00

会場： ビジョンセンター品川 204会議室（東京・品川駅前）

対象者： 各都道府県 認知症施策担当者

3.1. プログラム

時間	内容
10:30—11:00	オリエンテーション,全国希望大使交流会議（11/7）報告
11:00—11:30	地域版希望大使設置の意義と各地の実践・成果・課題
11:30—11:50	各グループにて自己紹介
11:50—12:50	（昼休憩）
12:50—14:00	グループワーク1：情報交換
14:00—14:30	グループワーク2：これからの取組について
14:30—15:00	全体共有

3.2. 希望大使交流会議のふり返し

冒頭のオリエンテーションでは、事務局より前日に開催された希望大使交流会議の様子を「速報」として報告し、本人主体の会議を開催するにあたっての工夫や準備、そしてグループワークで挙げられた希望大使の意見等を共有した（「2章 1.3. 交流会開催の工夫と配慮）及び「1.4 グループワークの様子と全体発表」参照）。

また、日本認知症本人ワーキンググループ藤田代表より、希望大使交流会議のふり返しを通して本人たちが語り合っていた希望大使事業の意義や大使たちの想いについてのメッセージが伝えられた。

○大使としての活動を通して、大使自身も多くの気づきや学びを得ている

参加した多くの希望大使は、既に地元地域で様々な活動をされている方であり、大使に任命されてからも同じように活動を続け、その肩書きを使命と感じながらさらに活躍しようとしている方が多い。それまでは個人として活動してきた人も、大使という役割を得たことで様々な人と繋がり、県との関わりも増えてくる。そして、「どうしたらもっとより良くて

きるのか」「もっとここを変えた方が良いのではないか」という様々な気づきを持つようになる。

○大使の存在そのものが認知症の人やこれから認知症になる人の希望になる

希望大使任命の目的の1つに認知症の啓発が挙げられる。交流会に参加した大使の話からは、大使の存在そのものが認知症になっても「希望を持って生きていける」「自分らしく生きていける」「諦めなくても大丈夫」ということを伝えられるはずだという思いが伝わってきた。

○大使同士が交流できる貴重な機会を今後も続けてほしい

大使同士の交流を通して、大使は改めて自分の役割を認識するということもある。各県で任命されている人数は限られている。大使同士が交流する機会がほとんどない中、希望大使交流会議は非常に貴重な機会であり、今後も継続して開催して欲しいという声が多かった。

○大使を任命するにあたっての本人と都道府県との意思疎通と見極め

大使の役割として任命者が何を求めているか、どのようなことを一緒にやりたいと思っているかなど、事前に本人と話し、それを一緒にやっていける人物なのかを見極めて欲しい。そして、説明をする相手は、家族でもなく、支援者でもなく、大使となる本人であるべきだと思う。

○本人が発信したいと思うなら人生を全うするまで希望大使として存在すればいい

時間の経過とともに、大使となった人の状態や環境が様々に変化してくることもあり得る話だ。その時、本人がどうしても無理だと思うなら退任という選択もあり得るだろう。ただし、施設入所や講演会活動が困難なことを理由に周りから任命を解くという考えは持たなくても良いように思う。どのような状態になっても、その人がその場所で自分らしく生きていることを発信しようとするなら、人生を全うするまで希望大使として存在してもいいのではないかと考える。

3.3. 各地の実践・成果・課題

令和4年度老人保健事業推進費等補助金「地域版認知症希望大使の普及促進と活動支援に関する調査研究事業」で実施した希望大使任命・活動状況実態調査結果より、各地の実践・成果・課題等に関する情報提供を行った。

< 配布資料目次 >

- 令和4年度調査内容
- 大使設置に取り組む意義
- 任命・委嘱に関する課題
- 大使の活動と支援について
- 現在の課題と今後の方針
- 未設置道府県の状況

「地域版認知症希望大使の普及促進と活動支援に関する調査研究」から見た取組む意義と各地の実践・成果・課題

希望大使設置・未設置都道府県調査
設置都道府県管内市町村調査
調査期間:令和4年8/26～9/12

	設置		未設置
	都府県	市町村	道府県
回答数	14	372/520	33
回収率	100.0%	71.5%	100.0%



調査のご協力、ありがとうございました。

調査内容

設置		未設置
都府県	市町村	道府県
<ul style="list-style-type: none"> ●認知症希望大使事業概要 ●事業プロセス ●希望大使の活動 ●希望大使活動の支援者・協力者に関すること ●希望大使の事業効果と今後の展開・計画等 	<ul style="list-style-type: none"> ●希望大使による市区町村事業への参加・協働の状況 ●活動の効果・課題 ●今後大使に関わってもらいたい事業等 ●事業や取組に大使が参加・協働するうえでの課題や活動促進に繋がるアイデア ●本人発信に繋がる活動等の把握状況 ●現在、本人とともに取組んでいる事業等 ●本人発信の推進における課題 ●本人発信に関する今後の取組計画等 	<ul style="list-style-type: none"> ●本人発信支援を目的に、自治体として直接実施している事業 ●本人発信支援を目的とした管内市町村・団体への支援策等 ●地域で活動している認知症の本人に関する情報やその人の活動に関する情報把握の状況 ●地域版希望大使任命に関する計画、課題等 ●任命の計画を進めるにあたり知りたいたい情報等

大使設置に取組む意義



大使設置に取組む意義

ガイドp.33

任命してよかった点 (自由記述より)

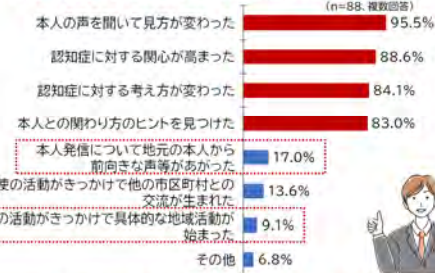
- 理解が深まった**
- 本人から思いを聞くことで認知症に対する理解が深まり、ネガティブなイメージや偏見の払拭につながっている。
 - 認知症に対する見方や、捉え方が良い方向に変わっていくと思われる。
- 地域の活動が活性化された**
- 「本人の希望を叶える支援」を地元の生活支援関係者と考える機会に繋がりがつた。
 - 大使の出演がきっかけで交流が生まれ、地域の活動が活性化された
 - 「〇〇さん(大使)に会いたい」と本人ミーティング等社会参加のきっかけになっている。
 - 市町村等の関係機関が大使派遣により「本人発信」の機会が増えた。
- 施策推進の牽引力になっている**
- 自治体の担当者等、施策の関係者の理解を促進し、認知症施策全体を推進する牽引力となっている。
 - 本人が元気に活動されていることが広く周知されるようになった。
 - 全国で本人発信の取組が展開されていることが住民等に伝わりやすい。

大使設置に取組む意義 (市町村)

ガイドp.33

設置都道府県の市町村調査

地元の本人が参加したことによる参加者や関係者の反応



認知症に対する理解・関心が高まった

大使設置に取組む意義 (市町村)

ガイドp.33

設置都道府県の市町村調査

地元の本人からの本人発信についての前向きな声

17.0%

- 自分の経験を伝えることが今できる役目だと思うし、病気を知ってもらうことで広がりができるともっとよい等の意見があった。
- 本人交流会参加者から、自分も大使の方のように活動したい、と希望があった。
- 講演会の質疑応答で、軽度認知症と診断された方がサロンの仲間に診断されたことを話している、という発言をされた。
- 「自分の住んでいる地区で認知症講座を開きたい」と声があった。
- 大使の話聞いて、認知症への考えが変わりました。たとえ認知症になっても幸せな生活が送れると思うと希望が持てます。
- ご本人が日頃の思い等を発言し、今後の自身の積極的な活動につながった。
- 本人ミーティングの要望があった。
- 当事者会へ参加する当事者が増えた。
- フォーラムで話をしてくださって以来、市内で声を伝えてくれる方が増えた。
- 認知症当事者の方で、ご自身が体験したことを発信した方が良いのではないかとと思うようになった方がいる。
- 希望大使との出会いや、本人同士の交流から、自分の思いを多様な形で発信する本人が増えてきている。
- 本人同士が会ってつながり、「生きる力を湧き立たせて元気に暮らしていきます」との発言があった。

本人自身が前向きになれた

大使設置に取組む意義 (市町村)

ガイドp.33

設置都道府県の市町村調査

大使の活動がきっかけで始まった地域活動

9.1%

- 若年性認知症の方対象のオレンジカフェの開催。
- チームオレンジのチーム員が本人ミーティングを企画する等、意欲的な地域活動のきっかけとなった。
- 定期的な本人ミーティングができた。
- オレンジ大使以外の当事者も、研修やイベントなどで発信する機会が増えてきた。
- 大使の講演をする機会が増えた。
- 本人と認知症地域支援推進員との定期的な集まりを実施できた。今後は住民や医療介護職にも参加の呼びかける予定。
- NPOや民生委員が認知症カフェを実施しようと考え始めている。
- 関わりが困難な認知症で孤立している高齢者のいる団地で、民生委員や自治会長さん社協・包括が協働し地域づくりを考えるきっかけとなっている。

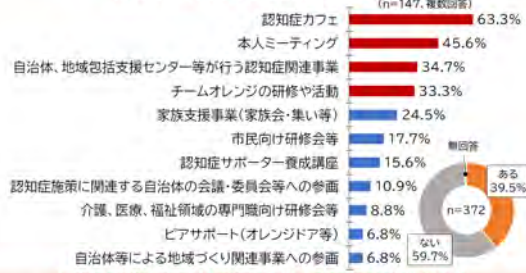
地域の活動が活性化された

大使設置に取組む意義 (市町村)

ガイドp.37

設置都道府県の市町村調査

自地域の本人とともに取組んでいる事業等



大使設置管内市町村の4割は本人と取組む事業があり、認知症カフェ、本人ミーティングが高い

任命・委嘱に関する課題



任命・委嘱に関する課題

区分	設置都府県の課題	未設置道府県の課題
事業に関する関係者の共通理解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大使活動の今後やあり方について、本人家族含め関係者間で共有できていない ○ 自地域らしい大使のあり方の検討が必要 ○ 様々な関係者との情報共有が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人・家族・関係者間で公表範囲や活動範囲について十分検討する
事業運営関連	<ul style="list-style-type: none"> ○ 協力を依頼する事業内容の整理 ○ 活動にかかる費用の支給方法 ○ 候補者が少ない ○ 本人が情報発信できる状況にない 	<ul style="list-style-type: none"> ● 県担当者は状況把握が難しく任命に関する管理が困難 ● 任期の定め方 ● 候補者が見つからない ● 他県の大使活動が候補者の心理的障壁になっている ● 人前に出ることに抵抗がある ● 選任方法のプロセスがわからない
候補者の選定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域・年齢・性別等バランスの考慮が必要 ○ 募集から選定までの方法が分からなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ● 大使活動に家族の理解が得られない
家族の同意	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族の同意をどう得るか 	

(自由回答を分類)

参考 任命・委嘱に関する課題への解決アクション

事業に関する関係者の共通理解

課題	解決のために行ったアクション
○ 自地域らしい大使のあり方の検討が必要	● 自地域らしい大使のあり方について、当事者たちから意見をもらった
○ 大使活動の今後やあり方について、本人家族含め関係者間で共有できていない	● 趣旨や本人の意向を地元の関係者と情報共有した
○ 様々な関係者との情報共有が必要	● 大使のスケジュールを生活支援関係者と共有した

(自由回答を分類)

参考 任命・委嘱に関する課題への解決アクション

事業運営関連

課題	解決のために行ったアクション
○ 協力を依頼する事業内容の整理	● 協力を依頼する事業について、過去の事業やヒアリングで把握した
○ 活動にかかる費用の支給方法	● 大使活動にかかる費用について他県の状況を参考にした



(自由回答を分類)

参考 任命・委嘱に関する課題への解決アクション

候補者の選定

課題	解決のために行ったアクション
○ 候補者が少ない	● 若年性認知症コーディネーターとの連携で本人につながった
○ 本人が情報発信できる状況にない	● 関係機関に聞き取り、候補者を把握した
○ 地域・年齢・性別等バランスの考慮が必要	● 地域・年齢・性別などのバランスを推薦者に配慮してもらった
○ 募集から選定までの方法が分からなかった	● 大使の募集から選定について、経験のある他県担当者にヒアリングを行った

(自由回答を分類)

参考 任命・委嘱に関する課題への解決アクション

家族の同意

課題	解決のために行ったアクション
○ 家族の同意をどう得るか	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族の同意を必須としなかった ● 趣旨説明と信頼関係構築を丁寧に行った ● 本人・家族へ丁寧に趣旨説明をした



(自由回答を分類)

参考 任命・委嘱に関する課題への解決アクション

家族の同意

課題	解決のために行ったアクション
○ 家族の同意をどう得るか	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族の同意を必須としなかった ● 趣旨説明と信頼関係構築を丁寧に行った ● 本人・家族へ丁寧に趣旨説明をした



(自由回答を分類)

地域版希望大使を設置する目的 ガイドp.33

「認知症になっても希望をもって日常生活を過ごせる」ことの理解と普及啓発を図る

- 認知症の人が生き生きと活動している本人の姿や声を通じて、認知症に関する社会の見方を前向きに変えていく。
- 同時に、多くの認知症の人がよりよく暮らしていく希望をもたらししていく。

「共生社会の実現」を本人とともに進めていく姿勢やあり方を示していく

- 認知症施策が目指す「共生社会の実現」は、本人抜きに進まない。
- 希望を持って前向きに暮らしている本人とともに、「共生社会の実現」を進めていく姿勢やあり方を、都道府県が大使任命とその活躍の支援を通じて、住民や関係者に実際に示していく。

大使の人物像 ガイドp.34

認知症になってからも、地域の中で自分らしい暮らしを続けながら、前を向いて暮らしている人

<p>「特別な人」ではなく「ふつうの人」</p>  <p>愛犬の散歩</p>	<p>あきらめずに挑戦する人</p>  <p>家族6人分の洗濯</p>	<p>年齢や状態像に限定されない</p>  <p>誰かの役に立つことが元気の源</p>
 <p>愛犬の散歩</p>	 <p>家族6人分の洗濯</p>	 <p>誰かの役に立つことが元気の源</p>

大使の役割 ガイドp.35

◎ **自分なりの言葉や姿を通じて、地域の中で自分らしく前向きに暮らしている実際や思いを伝えていく。**

発信できる人がいない!!

発信のあり方は多様!

- 本人の思いや元気に暮らす姿を他の人に共有することも発信。
- 最初は話せなかった人も、話す機会が増えれば上手になる。ふだんの暮らしの中で、本人に聴く機会や話せる機会を増やすことが大事。
- どんな状態の人にも表情や振る舞いなど、言葉以外の発信がある。聞く側の「聴く力」受けとめる力も重要。

◎ **そのことを通じて、他の認知症の人や地域の人たちが、認知症について希望を見出し、不安を持った人がひとりでも前を向いてともに暮らしていける人を広げていく。**

任命について本人が課題だと感じていること ガイドp.36

大使をつくるのが目的になっていないか?
(令和5年度 本事業の第1回検討委員会の意見)

<p>課題と感じること</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 家族や支援者の思いが引かれ、本人は大使の意義を理解しないまま引き受けている。 ● 大使としての責任感や主体性が低いなど、希望に足り得る人材が任命されていない。 ● 大使の中には、「有名になりたい」「講演料で収入を得たい」といった不適切な動機で引き受けている人がいる。 ● 県担当者の中には「その人(認知症の人)が元気になる」という理由で選任しており、大使設置の目的が理解されていない。 ● 事業本来の目的に関する共通認識が図られていない。 	<p>検討してほしい点</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 任命責任者として、大使の適性がある人を選んでほしい。 □ 任命にあたり、最低限の任命基準を検討してほしい。 □ 都道府県・市町村関係者は、大使事業の意義を積極的に理解してほしい。 □ 県職員も、認知症施策担当にならないとわからないことが多い。県担当者をサポートしてもらえらる仕組みが必要だと思う(必要とするサポートも状況により異なる)。
--	---

◎「希望」を伝える人であるべき。
◎自分が伝えたいことを明確に持っている人。
◎大使の発信により当事者が傷つくようなことがあってはならない

任命要件・選任方法 ガイドp.37

任命要件	選任方法
<ul style="list-style-type: none"> ● 前提要件 →居住地の要件/認知症の診断 ● 都府県との協働 →協力・連携に関すること/都府県事業への参加・協力に関すること ● 同意 →本人の同意/家族の同意 ● 公表 →氏名/年代/居住市町名/病名/経過/顔写真等 ● 本人の適性 →普及啓発活動への意欲/希望大使としての人格/認知症になっても自分らしく暮らしている人 	<ul style="list-style-type: none"> ● 公募(自薦、他薦を問わず)による書類審査 ● 市町村や医療機関、家族の会等の関係機関からの情報提供により、課内で検討 ● 関係機関から推薦された候補者から書類審査等により選定 ● 関係団体からの推薦 ● 応募要件に該当する方全員を対象に選考委員会を開催し面接の上決定 ● 知事が適任と認められるものから若干名 ● 課内で書類審査等 <p>※特に規定を設けていない都府県もあり、半数以上無回答。</p> <p style="text-align: right; font-size: small;">(自由回答を分類)</p>

任命要件(令和5年2月現在) ガイドp.37

職務別	任命要件	選任方法	任命要件
県職員	<ul style="list-style-type: none"> ● 認知症の普及啓発活動に積極的に関与している人 ● 認知症の普及啓発活動に専任している人 	公募	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内居住であること ● 認知症の診断を受けていること ● 認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない)
市職員	<ul style="list-style-type: none"> ● 在住者であること ● 認知症の診断を受けていること ● 認知症の普及啓発活動に専任しており、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、顔写真を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない) 	公募	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内に居住していること ● 認知症の診断を受けていること ● 県民の同意を得ていること ● 県と協力・連携ができること ● 本人の同意を得ていること
関係機関	<ul style="list-style-type: none"> ● 在住者であること ● 認知症の普及啓発活動に専任しており、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、顔写真を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない) 	公募	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内に居住していること ● 認知症の診断を受けていること ● 認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、顔写真を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない)
関係者	<ul style="list-style-type: none"> ● 希望大使として人柄、意欲等から選任と認めらる者 ● 本人、家族等から選任と認めらる者 	公募	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内に居住であること ● 認知症の診断を受けていること ● 認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、顔写真を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない)
関係者	<ul style="list-style-type: none"> ● 希望大使として人柄、意欲等から選任と認めらる者 ● 本人、家族等から選任と認めらる者 	公募	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内に居住であること ● 認知症の診断を受けていること ● 認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること ● 県民・年代・所在地(市町名・郡名・町名)を原則、顔写真を原則、公表できること(公表できない理由がある場合はその限りではない)

任命までのプロセス ガイドp.36

内容	ポイント
<p>① 設置目的・要件の確認と共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大使の在り方検討 ● 内部調整 ● 大使を設置することを表明 ● 候補者の把握 ● 関係団体や市町村に照会 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 大使についての議論が都道府県としての認知症施策の推進につながる。 ➢ 内部で本人関係者の理解の説明に困ったら、関係機関等に相談。 ➢ 候補者の把握は安易な聞き取りではなく、本人関係者のつながり重視を軸に情報収集や当事者を把握している方への等問。 ➢ 大使任命を目的化しない。 ➢ 情報収集をする際は、直接説明するなど説明目的を有する。 ➢ 「本人ミーティング」(チームアレンジ)などの活動をきっかけとして、本人の社会参加の文化醸成を推進するようしていく。 ➢ 市町村に寄せた声(地域で本人が語る、活動する)や活動が基礎になり、「大使」につながる。
<p>② 候補者選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 公募準備 ● HP作成及び掲載 ● 管内市町村・関係機関へ周知 ● 大使募集開始 ● 関係機関等へ推薦依頼 ● 候補者の課内書類審査 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 候補者及び家族等との面談 ➢ 事業・活動内容等説明 ➢ 本人の意思確認 ➢ 活動への家族等の理解 ➢ 承諾書の受領 ➢ 内部調整 ➢ 公募準備 ➢ プレスリリース準備 ➢ 委嘱式案内通知
<p>③ 本人・家族等の意向確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 承諾書の受領 ● 内部調整 ● 公募準備 ● プレスリリース準備 ● 委嘱式案内通知 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 候補者及び家族等との面談 ➢ 事業・活動内容等説明 ➢ 本人の意思確認 ➢ 活動への家族等の理解 ➢ 承諾書の受領 ➢ 内部調整 ➢ 公募準備 ➢ プレスリリース準備 ➢ 委嘱式案内通知
<p>④ 任命・委嘱</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 協力・支援者との連携 ● 任命式開催及び委嘱状交付 ● ホームページ掲載 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 任命のタイミングで再度意向を確認するが、途中の再任命も避けられないことを継続で確認。 ➢ 若年性認知症支援センターや県職員による家庭訪問等、身近な支援者にも同席など協力いただく。 <p style="text-align: right; font-size: small;">(アンケート調査とヒアリング調査の情報をもとに整理)</p>

候補者を推薦してくれる協力者 ガイドp.38

- 地域の関係者
 - ・市町村担当者
 - ・地域包括支援センター
 - ・認知症地域支援推進員
 - ・介護サービス事業者
 - ・若年性認知症支援コーディネーター
 - ・オレンジチューター等
- 公益社団法人認知症の人と家族の会など支援団体等
- 認知症施策推進会議委員
- 医療機関(認知症患者医療センター、若年性認知症支援センター、認知症サポート医)等
- 本人交流会を実施している機関等

(自由回答を分類)

本人発信支援の理解に活かそう! ガイドp.38

● 認知症の人が生き生きと活動している姿は、認知症に関する社会の見方を変えるきっかけになり、多くの認知症の人に希望を与える。

● 認知症になっても希望を持って前を向いて暮らすことができる姿を積極的に発信している。

● サポーター養成講座への協力も期待されている。

厚生労働省ホームページ
https://www.mhlw.go.jp/stf/news/0000180000_0000180000_0000180000_0000180000_0000180000.html
※14人の本人の発信がアップされています。



参考 本人発信支援の理解に活かそう!

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ 主催
認知症の方やその家族・介護者も安心して暮らせる社会の実現。よりよい暮らしの実現を目指して活動しています。

「希望大使活動推進サイト」
全国で認知症希望大使が活躍しています。希望大使や、ともに活動を支える方たち、自治体担当者みなさんの動画やメッセージをご覧ください。
<http://www.jdwg.org/kibo-taishi-site/>



大使の活動と支援について

設置に関して都道府県として必要なこと ガイドp.33

市町村における本人発信の推進と都道府県の大使設置の関連を明確にする

市町村で本人発信が始まっているので地域版希望大使は必要ない?

- 管内市町村の温度差を解消し、どの市町村でも本人発信があたりまえになることを推進していくために重要。
- 本人発信のあり方や内容を拡充していく上で都道府県を超えて大使同士がつながる機会も必要。

管内全体に大使設置目的の浸透を図る

- 大使の存在意義が誤解されたり狭小化された役割(講演の講師など)ばかりが求められると、本来の目的が達成されず大使が消耗し長続きしない。
- 管内の浸透を図ることは認知症施策の推進を形骸化させず、着実な推進していくために重要。

管内市町村・団体等への大使活動の周知方法

- 市町村担当者と直接会う際の説明
- 事務連絡
- ホームページ上での紹介ページ作成や動画配信
- イベント出演
- メールによる情報提供
- 研修会等での紹介
- 市町、認知症疾患医療センター、関係機関を対象とした県主催の研修や会議
- 各団体の会議や講演会
- 企業を対象とした認知症講座
- 医師会主催の医師向け研修等
- 県民情報番組(テレビ出演)
- 市町村担当者と直接会う際の説明

大使活動の役割の決め方 ガイドp.40

「希望ある暮らしを続けている姿を発信する」ことで、その発信方法は行政と本人とが一緒に考えていく

都道府県が画一的に決めて、それに合わせて「大使を利用する」のではなく、本人それぞれの状況や意向に応じて、話しあいながらその人にあった具体的役割を一緒に検討していく

- 本人がやってみようという意欲が話合い、そのためにはどうすればよいかを一緒に考えながら作り上げていく。
- 活動の中で、目の前の一人でも元気になる体験が次の活動につながる。
- ケアパスやさまざまな冊子づくりも、出来上がったものをみてもうではなく、作成段階から一緒につくりあげていくことも望まれる。

(自由回答を分類)

大使活動のフォローと調整 ガイドp.41

都道府県のサポート	大使の報酬	協力者・支援者
<ul style="list-style-type: none"> 自治体担当者が同行等のサポートを実施 活動依頼者や大使、支援者等との連絡調整 打合せや活動の場への同席 派遣調整、旅程等の作成 大使の活動ニーズの聞き取りや活動支援(大使や関係機関等との企画調整、日程管理、大使の同行支援等) 体調を考慮し、活動頻度を月1回程度まで制限 	<ul style="list-style-type: none"> 報酬・交通費あり 活動を依頼した市町及び団体等 自治体等の主催は規定に基づいた報償費(予算が確保されていない自治体もある) 	<ul style="list-style-type: none"> 報酬・交通費 大使と同等、無としている自治体もあり 地域により対応が異なり、善悪に頼っている側面も否めない
<ul style="list-style-type: none"> 活動中の身体的・精神的サポートが行える専門職団体に自治体から委託 他自治体の大使、各地域の当事者の方との交流の機会を企画 公費による移動支援 ケアマネジャーや市町担当者への情報共有 ピアサポート活動等への経費負担(予定) 推薦団体にサポートを依頼 	<ul style="list-style-type: none"> 大使と同等、無としている自治体もあり 打合せや活動の場への同席 活動や打ち合わせの日程調整 大使との連絡窓口 講演会時の資料作成等準備 イベント時の付添い等 活動時の移動支援 講演会や研修会時の登壇によるサポート 	<ul style="list-style-type: none"> 買戻のサポート 大使の発言を引き出す役 等 講話時のインタビュー役 精神面・身体面のサポート オンライン環境の整備

現在の課題と今後の方針

現在の課題 (R4年8月～9月の調査時点)

区分	課題
大使の状況の変化への対応	<ul style="list-style-type: none"> 大使の状況が変化しても長く続けられるサポートを考える必要がある 大使の病状等の変化に伴い制限がかかってしまった 大使の生活状況が変化し依頼できなくなった 活動の際の本人のサポート方法の検討
本人発信のあり方の再考	<ul style="list-style-type: none"> 普及啓発の方針が定まらず大使任命後の協力が繋がっていない 希望大使事業以外で活躍している本人に光があたりにくくなった
大使の人数の不足	<ul style="list-style-type: none"> 本人に出会えないという市町村からの声 本人と支援者への負担が偏っている 依頼が増えて大使の負担が増している 新しい大使候補が見つからない 大使の人数を増やしたい・大使が足りない 市町村からの依頼に比して需要と供給のバランスが取れていない
本人発信の機会の拡大	<ul style="list-style-type: none"> 大使の活動地域の段階的な拡大 本人の思いをより広く発信する 市町村でも事業を広げることが期待されている 本人の活動の場の広げ方の検討 活動機会の拡大 大使活動について市町村や関係機関への周知が足りず依頼が少ない
都道府県担当者の活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> 各地域の担当者は大使の活動をもっと発展させてほしい 商品やサービス開発に本人の意見を反映させる 担当者が大使の派遣スケジュール調整役にとまっている <p><small>(自由回答を分類)</small></p>

今後の方針

- 希望大使について広く認知してもらえるよう、周知活動に力を入れていく。
- 大使の人数を増やすことを目的にせず、当事者の発信や社会参加を促進するための土壌づくりに注力し、市町等関係機から情報を得て本人の意向をつかみ、新たな大使の委嘱につながるよう取り組んでいく。
- 本人ミーティングのあり方の検討、各地域の当事者の発信力の底上げ、各市町の取組との連携、認知症疾患医療センターにおけるピアサポートの促進、行政・医療・介護関係者だけでなく広く普及啓発など社会の認知観の転換を図る取組の推進。
- 大使を取り巻く関係機関の支援者との意見交換も通じて、大使活動のあり方の模索をしていきたい。
- 本人発信の機会を増やすとともに、大使自身や大使制度自体の認知度を上げていく。
- ピアサポート活動等により、当事者同士の輪を広げていく。
- 大使の希望する活動のサポート。
- 自治体が主催する普及啓発活動への協力 等

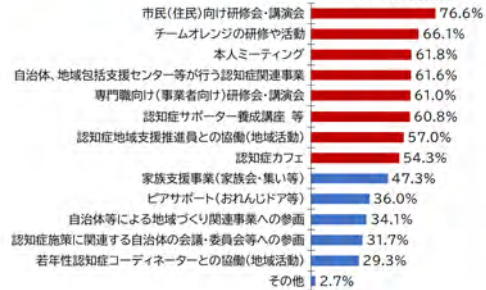


大使に関わってほしい事業(市町村)

設置道府県の市町村調査

自治体として「希望大使」に関わってほしい事業

(n=372, 複数回答)



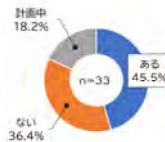
未設置道府県の状況



本人発信支援の状況(未設置)

事業の企画・実施に関する課題認識

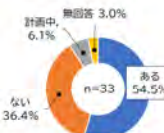
- 進行性の疾患であり状態が変化する可能性
- 本人の体調に応じた配慮が必要
- 急遽体調不良等になれば代役がない
- 県が本人や家族と直接かかわる機会が少ない
- 県内で活動されている本人の把握方法
- 初期の方は病気を受け入れられていない状態の人が多く、不特定多数の人への発信に抵抗がある
- 候補はいても、家族の同意が得られない
- 認知症に対して負のイメージが強く活動への理解を得にくい
- 本人の情報発信に協力するパートナーの人材確保が難しい
- 氏名等非公表にする場合のマスコミ対応
- 予算やマンパワーが足りない
- 管内市町との役割分担
- 事業の継続性 等



本人の活動に関する情報収集(未設置)

情報の把握方法

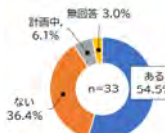
- 関係機関への照会及び情報収集(市町村担当者、家族会、若年性認知症コーディネーター、認知症疾患医療センター等)
- ピアサポート事業の実施を通じた情報の把握
- 県の事業を通じた情報の把握(認知症カフェサミット、本人ミーティング等)
- 国のホームページや講演会・研修会等の案内で把握
- 各市町へのアンケート調査を実施して把握
- 市町村の認知症施策担当者との情報交換
- 委託先との情報共有(認知症高齢者等介護家族支援事業、若年性認知症施策総合推進事業、ピアサポート活動支援事業等)



認知症関連事業への本人の参画状況(未設置)

参画している内容

- 認知症本人ミーティング実行委員会への参加
- 若年認知症ネットワーク会議への参加
- 認知症施策推進会議の委員委嘱
- 県主催の「本人視点に立った施策等を学ぶセミナー」における本人発信
- ピアサポート活動の実施
- 「若年性認知症の人の就労・社会参加のための検討会」に委員として参画
- 家族会を介した本人の意見の把握と施策への反映
- 委託事業を通じてピアサポーター(当事者)の意見・考えを把握 等



<本人の参画に関する課題意識>

- 認知症の本人が自ら発信したり事業に参画するには、本人が信頼する人がいたり安心して声を出せる環境が必要で、その環境は地域の普段の活動から作られていくと感じる。
- 他: 直接アプローチする手段がない/本人の移動手段/発信できる当事者がいない/認知症は進行性であり、継続的に参加したくことが困難/報酬の予算請求/広域的に活動できる人の把握 等

3.4. 参加者アンケートの結果

対象：セミナーに参加した 28 都道府県担当者
 実施方法：セミナー終了後、メールにてアンケートを送付・回収
 回収数：22 都道府県

3.4.1. 推進セミナーの開催について

①とても有意義だったと思う	20 件	90.9%
②意義があったと思う	2 件	9.1%
③意義があると思わなかった	0 件	0.0%
計	22 件	100.0%

【自由回答：「とても有意義だったと思う」を選んだ理由】

- 他の都道府県担当者との交流や情報交換ができた点で有意義とのコメントが多い。
- 情報交換により「具体的な課題の共有や解決のヒントに繋がった」との意見が多い。
- 大使との交流や本人の思いを直接聞く機会を得られた点で意義を感じたとのコメントも複数ある。

○都道府県担当者同士の交流や情報交換に関するコメント

1	グループに、希望大使設置済み未設置の都県の方がバランスよくいたので、色々なお話が聞くことができ良かったです。希望大使設置済みの都県からは、任期終了後の更新についてのお話も聞くことができ、これから設置要綱を作成する際の参考になりました。
2	他県の担当者と情報交換することで、得るものも多かったですが、一番は仲間ができた気がしてとても有意義な時間でした。
3	複数の都道府県の方と情報交換ができ、新たな知見を得られたため。
4	いつも関東甲信越圏域の方とは、意見交換の場があるが、こうして全国の担当者の方と、直接顔を見て情報共有、意見交換ができ、とても有意義な時間であった。
5	2日目の活動推進セミナーでは、グループ分けに配慮いただいたので、既に希望大使を設置して取組を進めておられる都道府県と未設置都道府県両方の状況を知ることができて有意義でした。
6	対面で話げできたことで、聞きにくいことも話せたのが良かったです。希望大使を設置している県、設置していない県のどちらからも参考になる話が聞けました。
7	各都道府県担当者との、事業実施にあたり課題や施策、等身大での悩みを話し合う機会を持つことが出来た。Zoom等オンライン会議ではできない交流（名刺交換直接での会話）が出来た。

8	本人大使任命の実施、未実施に自治体のそれぞれの考えや、活動任命実務課題等について、伺うことができた。
9	全国の大使や都道府県担当者と対面で意見交換できた点が非常に良かったです。大使自身も他の大使と交流することで今後の活動により前向きになっていただけたと思います。各都道府県大使1名ではなく、前大使が交流できる場があればよりいいと感じました。管内の大使の交流会は実施していなかったため、今回のセミナーを参考に今後検討していきたいと思います。
10	集合型研修への参加は数年ぶりです。他県の担当者の方と出会う機会もこれまでなかったため、直接お会いしながら意見交換できたことが大変有り難かったです。8日だけの参加になったが、7日の様子を超速報版として共有していただけたことで、前日の流れを受けついで意見交換ができたと思う。
11	他の都道府県職員との意見交換を通じて、希望大使設置に向けて考慮しなければならない部分を把握することができた。
12	他県の現状や悩みを聞き、本県に足りていないところや、課題の共有ができたため。同様の課題を抱えている都道府県があり、意見共有できたのはよかったと思う。
13	大使を任命している他県担当者と課題共有や解決のヒントを出し合えたと思います。また、これから任命する県担当者へ本県が有している課題や経験を伝えられ、全国の認知症普及啓発に繋がっていくと感じました。経験者が未経験者に伝えていくこと、未経験者が経験者の気づかない視点で大使を期待していることを学べて今後の大使活動にも活用できる考え方が学べました。
14	他の都道府県の方と直接お話しする機会が初めてで、どのような認知症施策に取り組んでいるのかが実際に聞いて大変参考になった。
15	他都道府県の事務担当者と直接情報交換できる場がなかったため。
16	行政担当者との対面でディスカッションを行ったことにより、認知症施策を進める上で悩んでいること等を共有でき、今後の業務の参考となったから。
17	希望大使を任命する意義を再確認するとともに、設置都道府県の方に取組状況を伺うこと貴重な機会となったため。
18	まだ大使として委嘱して間もないところで、今後の活動を進める際に他県の状況や考え方など聞いてみたいと思っていただくことを情報共有することができたので、とても参考になりました。

○「本人の思い」に関するコメント

1	大使の方たちの「思い」をお伺いし、行政としてできることは何だろうと考えさせられる時間でした。熱い思いを受けて、私も頑張らなければととてもいい刺激をいただきました。
2	ほかの都道府県の大使、支援者、担当者と直に会って話をする中で、多様で生き生きとした大使や大使の活動、課題を実感することができたから。
3	日頃の業務の中で、認知症の人ご本人の声を聞く機会がなかったので、希望大使のみなさんがどんな気持ちで活動されているのか、生の声を聞くことができたのが良かったです。
4	当事者の方が、当初は悔しい思いをされてきたこと、そこから仲間の存在出会いによって希望を見出し、一人でも多くの当事者の方を救いたい当事者同士がつながってほしいおもいから大使になられていること、遠慮せずに自分がしたいことをはっきりと周囲に伝えていきたいというまっすぐな気持ちがあることに、セミナーを通じて気づかされたから。
5	全国の認知症本人の方の意見が伺えるとともに各都道府県の状況も把握ができたため。

○事業の意義の理解に関するコメント

1	希望大使を任命する意義を再確認するとともに、設置都道府県の方に取組状況を伺うこと貴重な機会となったため。
2	都道府県の立場で設置する意義や認知症の本人との関係性の構築など参考になった。

3.4.2. 大使を任命する上での工夫や配慮に関する気づき

【工夫・配慮：キーワード】

多様な発信方法 / 本人の意向の確認の大切さ / 目的の明確化と共有 / 大使事業は手段であること / 担当として直接本人に接することの大切さ 等

※ 未設置自治体からは、設置後に課題となる移動手段、活動中の怪我、病状等進行後の考え方、地域格差などについて、参考になる情報を得られたとの意見があった。

1	本県は認知症ピアサポーターを務めている方が2名いるため、その方に希望大使のお話をするなど、段階を踏んでトライしてみようと思いました。 <u>本人の意向、本来の目的を考えて進めていきたい</u> です。 希望大使の本来の目的とは違う目的で希望大使になっている方もいると聞き、これまで想定していないものだったので、注意していきたいですし、こちらもしっかり <u>目的を整理し説明する必要がある</u> と思いました。
---	---

	<p>講演等、言葉で伝えることだけが発信ではなく、絵などで表現したものを展示したり、生き生きと暮らしている様子を写真や動画にしたりして公開することも発信の方法であるという気付きがありました。</p> <p>グループワーク時に、希望大使と、今後症状が進んだ場合の意向について、事前に話し合っておくと良いという意見があり、これから任命するにあたって参考になりました。</p>
2	<p>グループワーク時に、「本人や家族と希望大使の活動についてお話をした際に、良い面だけを見せるのは違うのではないかというご意見があり、良い面も悪い面も含めありのままを発信するという<u>ことで希望大使の『希望』という部分を取り、別の名前を付けた</u>」というお話を伺い、とても参考になりました。（管内の関係先に希望大使の説明をした際、表に出て活動できる人はごくわずかで、活動できるような状態ではない方がほとんどだということを分かってほしいという意見もあったため。）</p>
3	<p>希望大使の移動手段や、活動中の怪我等への備え、病状進行後の活動の考え方、地域格差など、任命後の課題となる事項を聞くことができ、任命後の活動のイメージをつかむことができた。</p>
4	<p>前回、大使の公募を行った際、募集があった方には内定の前に一度お会いしていたが、そこで、「大使になったら伝えたいこと」をしっかりと確認していなかったため、次回の募集の際には、本人に確認をしようと思った。</p>
5	<p>ご本人から活動継続を辞退したいとのお話があったときに、ご本人やご家族、支援者の方にどういったことを確認し、どのような場合は活動継続の方法を一緒に探してみるべきか、具体的に整理しておく必要があると感じた。</p>
6	<p>ともに活動する存在（大使、支援者、受託者）が多く身近にいることは貴重だと改めて感じました。</p> <p>大使の活動を進めるうえで、その目的を常に明確にする必要があると感じました。多様な大使の活動を長く展開するためには、地域に入ってご本人と接する機会を多く持たなければいけないと感じました。</p>
7	<p>ご家族ではなく、御本人の意思を確認した上で任命することが大切だと感じました。講演活動を行うことだけが大使の役割ではなく、その人らしく生きている姿を発信していくことが大切という言葉がとても印象に残りました。</p>
8	<p>大使の任命は目的ではなく、あくまで手段であるということ。</p> <p>本人の意思を尊重すること。（本人ができるかつやってみたい活動を考える、氏名の非公開など）</p> <p>特別に大使を任命しなくても各地で自然とそのような活動ができているのが理想。</p>
9	<p>関係機関へ依頼することだけではなく、カフェなどの集いなどに県担当者も足を運ぶこと。</p>

10	<p>本人大使任命が目的にならない様、活動方針を自治体としてもしっかり持って当事者へも周知する必要がある。</p> <p>任命後の課題について、本人大使としてふさわしい方、望まれる言動について示されていたが、本人の発信の意向を尊重しながら、自治体の本人発信の狙いに沿う様に人選は慎重に行う必要があると感じるとともに、<u>自治体の狙いを本人に求めすぎること</u>で発信の押し付けにならない様気を付けなければならないと感じた。</p>
11	<p>他県で県独自の大使の交流会を年に1度実施されていましてので参考にして、今後検討していきたいです。また、<u>大使交流会と合わせて市町村担当者</u>と大使の交流会も行えば、より管内全域での活動に広がっていくきっかけづくりになるのではないかと考えます。</p>
12	<p>症状が進行される中で、大使の本来の役割とは何かを考える機会が多く、グループ内でも、<u>同じ課題を感じている方がいたため、捉え方や考え方が参考になった。</u></p>
13	<p>本人さんとの関係性構築の第一歩的な事業であるピアサポート事業が現状維持にとどまっている（同じピアサポーターが相談などしている）ため、この事業で認知症の方と知り合い、<u>発信する想いを醸成してから任命がよいのではないかと</u>思った。</p>
14	<p>認知症の本人から<u>認知症希望大使という肩書があることで、事業や人とのつながりが拡大する</u>と伺い、認知症本人の意見を反映した施策を実施し、共生社会を実現へつなげたい。</p>
15	<p>多くの地域が、大使の任命について「<u>公募型</u>」を採用していることに気が付いた。また、委嘱任命式の知事出席の部分で、メリットとデメリットに気づいた。</p>
16	<p>他県から、ピアサポーターとして活動していただいた後、大使を任命しているという情報提供があり、<u>任命プロセスを大事にされている点</u>が大変勉強になった。</p>
17	<p>認知症が進行し、言葉を話すことができなくなったらどうするかと他県の方にお聞きしたく、それは任命の経験あるなしにかかわらず全担当者が考えて避けては通れない部分だと思いました。期待したとおりで各県の担当者からはそれぞれ自身の考えとして、何かいままで撮り貯めた映像写真であるとか、大使が過去に発言された言葉の冊子づくりであるなどこれまで生きて活動してきた証などを工夫して発信すべきという前向きな発言を聴くことができ、そのような工夫をしていきたいと考えています。</p>
18	<p>他県の希望大使の方は自分の思いをはっきりと発信できている方がたくさんいらっしゃる<u>本人発信のあり方について改めて考えさせられた</u>。本県の大使は1人で自分の意見を発信するのは難しいが、<u>周りの人に希望や元気を与えられる方であることは間違いのないと思うので、その人にあった活動の仕方を考えていきたい</u>と感じた。</p>
19	<p>任命のやり方について、本県は関係団体から推薦された方から任命するようなスタイルだが、<u>他都道府県では一般公募のようなスタイルをとっているところもあり、来年度以降の参考</u>にしたい。</p>

20	大使の発信の仕方は様々であり、言葉だけでなく、どこにいても、そのひとのありのままの前向きに生きる姿をお伝えすることも発信のひとつであることを学んだ。現在当県では4名の大使を任命しているが、1名入院をされている。セミナー翌日に早速支援者と連絡をとり、今できる発信の方法について話し合った。大使が得意なことや頑張っていることを深く掘り下げ、認知症の方へ希望を与えるような発信ができるような工夫が必要だと思った。
21	大使の活動としては、講演活動が目立ちますが、講演活動以外にも地域での本人ミーティングやGH開催のイベントでの作品展示など、活動の幅があることに気づきました。また、大使の募集方法や連絡調整の方法、依頼の仕方など、参考にしたいと思います。
22	大使として任命する前に、ピアサポーターとして事前に活動をしながらか常に状況を把握し、大使としての心構えや気持ちを醸成させて、大使になったときに活動がしやすい状況にしている大分県さんのやり方は大変参考になりました。

3.4.3. 希望大使の活動を推進するために取組みたいこと・強化したいこと

【取組みたいこと・強化したいこと：キーワード】

多様な発信方法の検討 / 本人の声を聴く / 個別の人の強みを知る / 地域での本人活動の把握 / 行政と本人との連携 / 活動の拡大 / 圏域ごとの大使の配置 / 市町村との連携 / 意義の周知

1	本人と十分に話し合いを行い、認識を共有することが大切だと実感しましたので、任命前はもちろん、任命後も委託方式での実施だとしても、 <u>行政の担当者が本人と話し合いを行っていききたい。</u>
2	希望大使を任命することの <u>意義を関係機関、県民に周知していく必要があると感じています。</u> 希望大使を任命することをゴールとせず、その <u>先を見越した準備</u> （大使の任命を通して、県として伝えたいことは何か。）を進めていききたいと思います。
3	講演など人前で話すことにこだわらず、大使がやってみたい活動を重視していききたいと感じた。
4	今後は、 <u>県内全域に大使の存在を知ってもらい、活動範囲を広げていききたい。</u>
5	大使お一人お一人に合った情報発信の仕方の検討
6	<u>多様な大使の活動の発信</u> 各地域で実施されている本人ミーティングや認知症カフェとの連携
7	まずは、 <u>県内市町村の本人発信の取組状況を把握すること、県内で行われている本人発信の機会に参加することから始めたいと感じました。</u>

	<p>ピアサポート事業の見直し</p> <p>他県は登録制度をとっているところも多く、きちんと活動の趣旨を理解して協力してくれる方がいること、その方々はすでに大使に近い活動もしていることを知り、<u>まずはピアサポートの充実を図り本人発信のきっかけになればと思った。</u></p>
8	<p>個人の強み（得意）を見つけること</p> <p>講演活動だけが大使の仕事ではないことは理解していたつもりだが、他県の活動の多様な活動例（予定含む）を聞き、<u>当県の本人さんも何かできないかという気持ちになった。本人や若年性認知症コーディネーターや家族の会等の関係者の意見も聞きながら検討したい。</u></p>
9	<p>当県の各圏域に希望大使の配置。</p>
10	<p>本人発信を希望する人の発信を通じて、潜在的におられる当事者の方々が元気をもらい、自身も声を上げるきっかけになるケースもあるため、ピアサポートの機運が身近な地域で広がっていくように当事者と一緒に働きかけることも一つの方法だと思いました。</p>
11	<p>本人発信を市町とともに進めていくこと。県主催の本人ミーティングを開催した際に、もっと集まる場をつくって回数を増やしてほしいと意見をいただいた。本人ミーティングを実施している市町は少ないが、<u>市町と連携しながら、各市町に意見交換ができる場ができるとういのではないかと感じた。</u></p>
12	<p>上記事業に職員も参加していきたい。</p>
13	<p>認知症希望大使を生かし各施策へ向けた活動（企業連携等）をより活発にしたい。</p>
14	<p>情報共有させていただいた府県を参考に、<u>「公募型」で希望大使の候補者を探していきたい。</u></p>
15	<p><u>「ご本人だけでなく、行政パートナーが一緒になって活動を考えていく」ということを大事にしたい。</u></p>
16	<p>大使の過去の発言をとりまとめた冊子を作成したいと考えています。</p>
17	<p>現在は、大使の住んでいる市町で主に活動をしていただいているので、<u>大使の声や本人発信が全県に波及していけるようにしていきたい。</u></p>
18	<p>特に、<u>症状が進行してお話が難しくなっている大使の方の活躍について、情報交換で得られた他都道府県の手法などを参考にしながら検討していきたい。</u></p>
19	<p>当県においては、現時点で希望大使未設置のため、今回のセミナーを希望大使設置の参考としたいと思います。</p>
20	<p><u>大使本人の意思を尊重し、活動したいことを理解して形にできるように取り組みたいと考えています。</u></p>
21	<p>（前略）今後も引き続きピアサポーター養成活動促進に力をいれたい。</p>

	<p>ピアサポーター養成については、現在6市23名のピアサポーターが在籍しているが、今後は県内18市町村で展開をしていきたい。（セミナー終了後に早速展開計画をピアサポート事業委託事業所と立案）ピアサポーターの活動促進については、講演活動にとどまらず、家庭病院施設訪問等の個別支援の充実化と当事者開発オレンジイノベーションの取組を加速させたい。（経済産業省事業を活用し、当事者の困りごとで「あったらいいな」を入り口とした商品体験実証実験に参加している）ピアサポーター同士の交流を県内市町村間レベル、近隣県レベル等に拡大し、ピアサポーターの活動事例をより幅広い範囲で共有したい。大使ご本人の話だけでなく、介護者側（家族）の話もあわせて発信できると良い。</p>
--	--

3.4.4. 任命や活動推進を進める上で知りたいこと・必要と思うこと

【知りたいこと：キーワード】

外部委託の活用状況 / 大使の活動事例 / 事務的な取り決め / トラブル対応 / 任命基準 / 今後の事業展開 / 大使の支援者への説明 / 発信内容（ネガティブ情報の考え方）

【必要と思うこと：キーワード】

都道府県単位でセミナーの実施 / 本人の意向を中心とした活動 / 継続的な学び / 認知症関連事業との連動 等

1	<p>支援者がどういった関係性の方で、どこまで支援しているかという事を知りたいです。また、すでに大使設置済みの都府県は、委嘱状の交付をどの役職の方が行っていたか知りたいです。</p> <p>大使になりたい方がいても支援者がいない場合は、どのように支援者を探しているか知りたいです。推進員包括行政の職員や若年性認知症支援コーディネーターの方等が支援者になっている場合、他の業務も忙しいかと思いますが、どのような工夫をして支援を行っているのか知りたいです。</p>
2	<p>今回のセミナーのようなものを都道府県単位でできればと思いました。（私たちの責務でもあると感じています。）</p>
3	<p>外部委託をどの程度活用しているか。</p>
4	<p>多様な大使の活動事例</p>
5	<p>活動推進セミナーの中でも話題にあがっていましたが、事務的な取り決め（活動の謝礼金額や活動依頼方法、移動手段、任命式の出席者等）について全国の状況がまとまった資料があると参考になると感じました。</p>
6	<p>希望大使の任命の際にあったトラブル（本人家族の意思確認や顔出し等）</p>
7	<p>希望大使の具体的な任命基準</p>
8	<p>認知症施策推進大綱の目標値となっていますが、令和7年度以降も本人大使任命は目標値として継続されるのでしょうか。</p>

9	希望大使の活動内容、大使本人や支援者のインタビュー（大使になって本人支援者はどう思っているか、周囲の反応や変化等）
10	活動の具体的な方向性を認知症の本人の意見を中心に考えること。また、別の施策にも生かすこと。
11	希望大使を設置するうえで、大使の支援者に対してどのように説明したのか、理解を得られたのかを知りたい。
12	対象者や活動内容にもよると思うが、認知症のポジティブな面以外も発信しているのか。
13	希望大使の任命活動促進には、認知症事業の中での歯車を動かす必要があり、さらには地域ケア会議―介護予防―生活支援―医療介護連携等すべての歯車がかみ合っただけである。2日目の県担当者の研修で事業運営部分に焦点が当たってしまったことのひとつの要因として、前述のイメージ化が図れていないことがあるように感じたため、事業間連動について学びを深めたい。
14	今後も継続してこのようなセミナーを開催していただきたいです。
15	都道府県でそれぞれの大使の活動の場をどのように設定しているかを知りたいです。また、大使の活動管理や活動依頼があったときの留意事項等、事務的な内容を知りたいと思いました。

4. 希望大使のネットワーク化等に関する情報

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の成立を機に、全国版・地域版希望大使が集い、市民や関係者と共に共生社会のあり方を考える動きが活発化している。

以下では、徳島県、大分県で実施された希望大使（全国版・地域版）の交流やエリアネットワーク化の動きを紹介する。

4.1. 四国エリアの動き：徳島県「世界アルツハイマー記念講演」

[実施日] 令和5年10月15日（14：00～16：00）

[場 所] 徳島グランヴィリオホテル

[実施概要]

第一部：講演 日本認知症本人ワーキンググループ 代表理事 藤田和子氏

第二部：認知症希望大使座談会 一足先に認知症になった私たちからみなさんへ

～希望のリレーをつなげていこう～

世界アルツハイマーデー記念講演会として徳島県及び認知症の人と家族の会徳島県支部が主催。藤田和子氏（全国版希望大使）、島田豊彰氏（とくしま希望大使）が登壇し、かがわ認知症希望大使、えひめ認知症希望大使、高知家希望大使がオンラインにて参加し意見交換を行う企画となっていた。四国地方の希望大使が一堂に会した座談会として初の試みで

あったが、当日は、かがわ認知症希望大使、えひめ認知症希望大使が体調不良のため欠席、高知家希望大使は所在地のネット環境が不安定のため挨拶のみとなった。企画通りの進行とはならなかったものの、今後の地域間交流や大使活動の充実に繋がる貴重な取組となっていた。

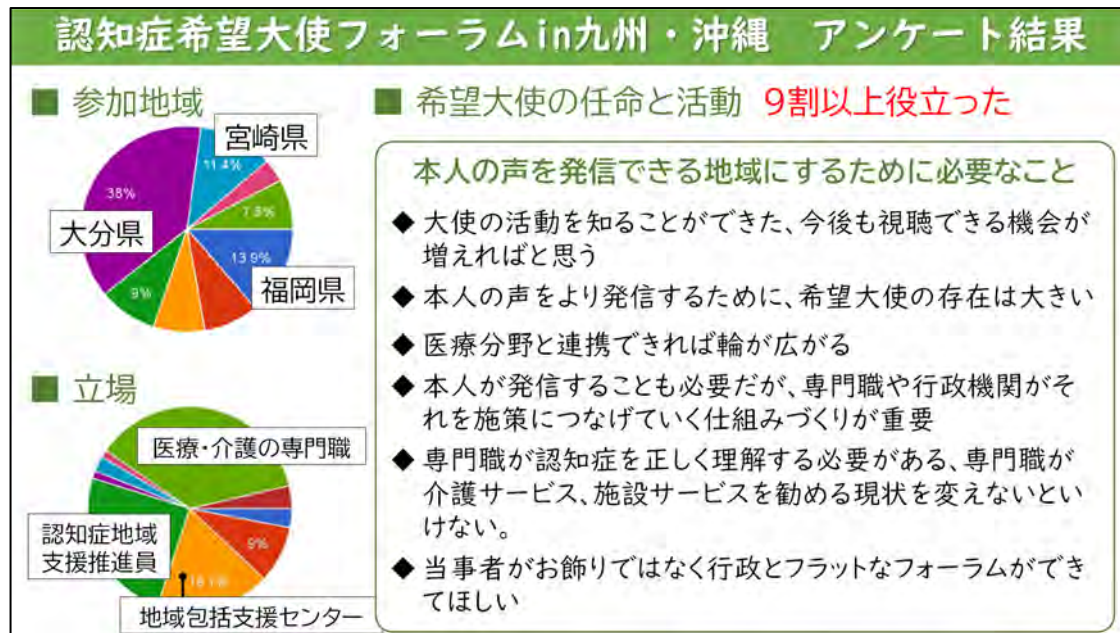
4.2. 九州エリアの動き：大分県『共生社会を実現するための認知症基本法』の今後の展開に向けて」

[実施日] 令和5年11月30日(14:00~16:00)

[方法] ZOOM オンライン開催

[対象] 行政職員(県市町村)、地域包括支援センター、認知症地域支援推進員、医療・介護従事者、認知症ご本人等

[実施概要] 九州・沖縄の希望大使同士のネットワーク化を目的として、認知症希望大使フォーラム in 九州・沖縄県実行委員会が結成され、オンラインでの開催を実現した。戸上守氏(大分県希望大使)が実行委員長を担い、九州全県及び沖縄県の希望大使参加による情報発信等が行われた。



(資料提供) 認知症希望大使フォーラム in 九州・沖縄県実行委員会

3章 実態調査結果

※都道府県調査結果及び市町村調査結果においては、次のような用語を用いている。

- 地域版希望大使：「希望大使」または「大使」
- 地域版希望大使を設置している都道府県：「設置都道府県」または「設置済み」
※表及びグラフ中の表記は「設置」
- 地域版希望大使を設置していない道府県（調査実施時点）：「未設置道府県」または「未設置」 ※表及びグラフ中の表記は「未設置」

1. 都道府県調査

1.1. 基本情報

(1) 人口規模

全体では、「100万人以上200万人未満」が4割強となっている。設置都道府県では、「100万人以上200万人未満」と「200万人以上」がともに4割、未設置道府県では、「100万人以上200万人未満」が約5割を占めている。

Q2_設置：Q2_未設置 人口規模

区分	全体 (N=47)		設置 (N=20)		未設置(N=27)	
	件数	%	件数	%	件数	%
50万人以上100万人未満	10	21.3	4	20.0	6	22.2
100万人以上200万人未満	21	44.7	8	40.0	13	48.1
200万人以上	16	34.0	8	40.0	8	29.6
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

(2) 高齢化率

全都道府県の高齢化率の平均は31.2%となっている。

設置都道府県では「30%未満」が4割を占め、未設置道府県では「32%以上34%未満」が4割弱を占めている。設置都道府県に比べて未設置道府県の高齢化率平均が若干高い。

Q3_設置：Q3_未設置 高齢化率

区分	全体 (N=47)		設置 (N=20)		未設置(N=27)	
	件数	%	件数	%	件数	%
30%未満	14	29.8	8	40.0	6	22.2
30%以上32%未満	9	19.1	3	15.0	6	22.2
32%以上34%未満	13	27.7	3	15.0	10	37.0
34%以上	11	23.4	6	30.0	5	18.5
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0
平均	31.2%		30.2%		32.0%	

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

(3) 認知症施策担当者数

認知症施策担当者数の全国平均は 3.4 人となっている。区分別に割合見ると、全体では「2 人」が 29.8% で最も高く、「5 人以上」も 2 割以上となっている。設置都府県の平均は 4.1 人で、未設置道府県の平均 2.9 人に比べて 1.2 人多い。

Q5_設置: Q5_未設置 認知症施策担当者数

区 分	全体 (N=47)		設置 (N=20)		未設置(N=27)	
	件数	%	件数	%	件数	%
1人	7	14.9	3	15.0	4	14.8
2人	14	29.8	4	20.0	10	37.0
3人	9	19.1	2	10.0	7	25.9
4人	7	14.9	5	25.0	2	7.4
5人以上	10	21.3	6	30.0	4	14.8
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0
平 均	3.4人		4.1人		2.9人	

Q2×Q5 人口規模別の認知症施策担当者人数

人口規模	全体	担当者 1人	担当者 2人	担当者 3~4人	担当者 5人以上
50~100万人未満	10	2	3	4	1
100~200万人未満	21	4	10	5	2
200万人以上	16	1	1	7	7
合 計	47	7	14	16	10

認知症施策担当者のうち大使事業の担当者人数を確認したところ、全体の平均は 0.9 人となっている。設置都府県の平均は 1.2 人、配置人数「1 名」は 17 件 (85.0%)、「2 人」は 3 件 (15.0%) となっている。一方、未設置都府県では「1 人」が 13 件 (48.1%) で約 5 割、「0 人」が 10 件 (37.0%) となっている。

Q6_設置: Q6_未設置 うち希望大使事業担当者人数

区 分	全体 (N=47)		設置 (N=20)		未設置(N=27)	
	件数	%	件数	%	件数	%
0人	10	21.3	0	0.0	10	37.0
1人	30	63.8	17	85.0	13	48.1
2人	7	14.9	3	15.0	4	14.8
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0
平 均	0.9人		1.2人		0.8人	

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

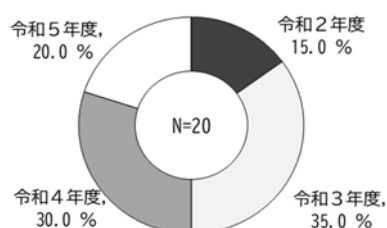
1.2. 大使任命の進捗状況

(1) 大使任命時期

設置都府県において最初に大使を任命した時期は、令和 3 年度が 7 件で最も多く、次いで令和 4 年度 (6 件)、令和 5 年度 (4 件)、令和 2 年度 (3 件) の順になっている。

Q7_設置 最初に大使を任命した年度

区 分	件数	割合
令和 2 年度	3	15.0
令和 3 年度	7	35.0
令和 4 年度	6	30.0
令和 5 年度	4	20.0
合 計	20	100.0

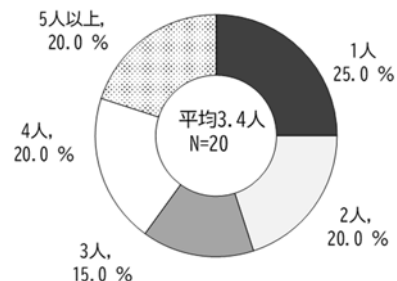


(2) 大使の人数

設置都府県における任命済みの大使人数は、平均で3.4人となっている。人数別に見ると、「1人」が5件で最も多く、「2人」から「5人以上」まではいずれも3件~4件となっている。

Q8_設置 任命が完了した大使人数

区分	件数	割合
1人	5	25.0
2人	4	20.0
3人	3	15.0
4人	4	20.0
5人以上	4	20.0
合計	20	100.0
平均	3.4人	

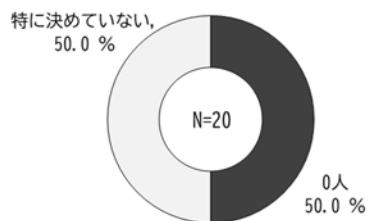


(3) 今年度の任命予定

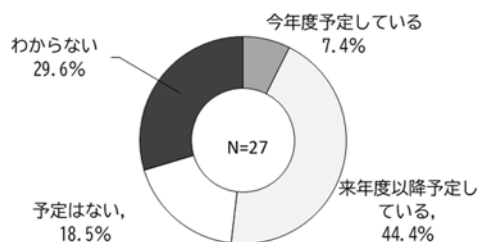
設置都府県に対して令和5年度中に新たに任命を予定している大使の人数を聞いたところ、「0人」と「特に決めていない」が5割ずつになっている。

一方、未設置道府県における今後の設置予定は、「来年度以降予定している」が44.4%で最も高く、次いで「わからない」(29.6%)、「予定はない」(18.5%)、「今年度予定している」(7.4%)の順になっている。

【設置】



【未設置】



(4) 大使の退任状況

設置都府県においてこれまでに退任した大使人数は平均で0.7人になっている。人数別に見ると、「0人」が15件(75%)で最も多く、「1人」が3件、「2人」が1件と続き、「5人以上」との回答も1件ある。

Q10_設置 これまでに退任した大使の人数

区分	件数	割合
0人	15	75.0
1人	3	15.0
2人	1	5.0
5人以上	1	5.0
合計	20	100.0
平均	0.7人	



退任理由の主な理由は、症状や体調の悪化、本人の意向、本人の死亡などとなっている。

【設置済み：退任理由】

NO.	自由記述 (Q10)
1	体調の悪化及びご本人の辞退のご意向
2	症状の進行が進み、活動が難しくなったこと等の理由による、本人からの申出
3	任期満了に伴う退任
4	死亡に伴うもの
5	体調不良によるもの
6	任期満了時にご本人が更新を希望されなかったため

(5) 大使の任命要件として重視したいこと

大使の任命要件として重視したいことについて、「設置」「未設置」とともに、「本人の意志や活動への意欲に関すること」、「県との連携や協働が出来ること」を挙げている自由回答が多い。

【設置済み：任命要件として重視していること】

NO.	自由記述(Q11)
1	大使の健康状態やご本人のご意向など、総合的に判断しています。
2	担当者としては、関係組織や区市町村にご意見をいただきながら、下記の事項の確認に留意した。 <u>・ご本人の意思で、大使の活動に意欲を持っていただいていること。</u> ・「地域版希望大使の任命と活躍の手引き」p39の「適正で注意したいこと」に該当しないこと。
3	「認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること」を重視しています。なお、大使の人数は定めず、なるべく公募（自薦、他薦を問わない）により、応募された方全員にご本人の希望や体調に合わせ、参加・協力が可能な活動を行っていただくことにしています。
4	ご自身の思いを話したいという意欲がある方。
5	・自身の思いや姿を発信すること等を通じて、ともに地域づくりに参画する意欲があり、 <u>県と協力できること。</u> ・原則、氏名・年代・所在市町名・疾患名・経過・略歴・顔写真を公表できること。
6	ご本人が自らやってみたいという意思
7	認知症ピアサポート活動への協力/認知症ピアサポーターとして自らの体験を話したり相談に応じる等、 <u>認知症の本人や家族に寄り添う。</u> また、 <u>認知症カフェなど本人や家族が集う場への参加、自治体の認知症施策会議への参加等</u> を行う。
8	認知症本人の方で <u>自分の経験を伝えたい、認知症の方と交流したい</u> など大使の趣旨に沿った <u>活動意欲</u> があるかを重視している。基本的にはこれまで支援者等として関わってきた方からの推薦で受け付けることとしており、要件を満たしている方かどうかは推薦者や支援者からの情報提供や本人・家族との面談等により確認している。
9	認知症の普及啓発活動に意欲があり、 <u>県と協力・連携ができること。</u>
10	希望大使の設置趣旨に賛同し、 <u>認知症に関する普及啓発活動に意欲がある方</u>
11	・ <u>認知症希望大使の趣旨（簡単な概要）を理解し、自身の意思を持って活動できる方</u>
12	本人が希望することや得意なことを活かして参加・協力が可能な方。
13	地域で普通に暮らしている人であり、 <u>認知症になってからも、周囲や地域の理解と応援を通じて、前を向いて自分らしく地域で暮らし続けており、認知症について受け止め周囲へ正しい情報として発信できる方。</u>
14	大使自身の <u>人格や、活動に対する意欲等。</u>
15	認知症の普及啓発活動に意欲があり、 <u>県と協力・連携ができること。</u>

16	本人の要件としては、大使の活動に意欲があり、連携が図れることが重要。また、事業担当者は変わってしまうことが予想されるため、本人との信頼関係を築くのに時間を要する。本人の気持ちを汲み取ってくださる支援者の存在は重要。
17	認知症を受け止め、前向きに生活している人/本人の家族の理解が得られること
18	・認知症と診断された後も、希望をもって生活している様子や自分の思いを発信できること・県と連携・協力ができること

【未設置：任命要件として重視したいこと】

NO.	自由記述(Q9)
1	認知症になっても自分らしく前向きに希望を持って暮らしている姿を発信できるということを任命要件として重視したいと考えている。
2	本人が認知症の普及啓発に意欲を持っていること。
3	・活動への意欲があるか ・大使の趣旨目的を理解していただいているか
4	認知症の普及啓発活動に意欲があり、県と協力・連携ができること。認知症になっても地域で自分らしく暮らしている人。
5	市町村や関係機関から地域における様々な活動状況をよく聞いて適任者を検討したい。
6	・ピアサポート活動の実績 ・講演等以上に、当事者やその家族に直接お会いできる人 ・当事者やその家族に勇気を与えることに喜びを感じられるかどうか
7	希望大使として意欲があり、県と協力・連携ができること。
8	認知症の人が可能な限り積極的な活動が可能なこと

(6) 大使候補者の把握について

大使候補者の把握方法を聞いたところ、「管内市町村等に推薦を依頼」が最も多く、全体で20件(42.6%)となっている。次いで「家族の会等、関係団体に推薦を依頼」が19件(40.4%)、「以前から都道府県や市町村の活動に関係しているなど実績がある本人」と「本人の関係組織等に推薦を依頼」が共に17件(36.2%)となっている。

Q12_設置：Q10_未設置 大使の候補者の把握方法（複数回答）

	全 体		設 置		未 設 置	
	件数	%	件数	%	件数	%
①以前から都道府県や市町村の活動に関係しているなど、実績がある本人	17	36.2	11	55.0	6	42.9
②管内市町村等の関係機関に推薦を依頼	20	42.6	16	80.0	4	28.6
③ふだんから管内市町村と本人の活動について情報収集	12	25.5	7	35.0	5	35.7
④認知症本人の関係組織等に推薦を依頼	17	36.2	13	65.0	4	28.6
⑤家族の会等、関係団体に推薦を依頼	19	40.4	14	70.0	5	35.7
⑥公募している	7	14.9	7	35.0	0	0.0
⑦その他	4	8.5	1	5.0	3	21.4
	母数 34		母数 20		母数 14	

※未設置の母数=Q2_7で大使任命予定「あり」の14件

一方、「設置」と「未設置」を比較すると両者には差異があり、設置都府県では「管内市町村等の関係機関に推薦を依頼」（80.0%）、「家族の会等関係団体に推薦を依頼」（70.0%）、「認知症本人の関係組織等に推薦を依頼」（65.0%）、「以前から都道府県や市町村の活動に関係しているなど、実績がある本人」（55.0%）の項目が5割以上となっているものの、未設置道府県ではいずれの項目も割合が低く、アプローチそのものがあまり行われていない様子が見てとれる。



(7) 候補者の状況

設置都府県における大使候補者の把握状況を確認したところ、「増えてはいないがいる」が13件(65.0%)で最も多く、「候補者がいなくて困っている」は4件で2割に該当する。また、「候補者が増えている」との回答は僅かに1件となった。

Q13_設置 大使候補者の状況

区分	件数	割合
候補者が増えている	1	5.0
増えてはいないがいる	13	65.0
候補者がいなくて困って	4	20.0
その他	2	10.0
合計	20	100.0

(8) 候補者への説明と意向確認

設置都府県における大使候補者への説明及び意向確認の状況を確認した。

任命前の候補者本人への説明状況について、「十分にしている」との回答は全体の85.0%で、「だいたいしている」は15.0%となっている。また、就任する前の担当者による本人への意向確認は、「必ず確認している」が全体の9割で、「だいたい確認している」が1割となっている。

Q14_設置 任命前の候補者本人への説明

区 分	件数	割合
十分にしている	17	85.0
だいたいしている	3	15.0
あまりしていない	0	0.0
していない	0	0.0
その他	0	0.0
合 計	20	100.0

Q15_設置 担当者による本人への意向確認

区 分	件数	割合
必ず確認している	18	90.0
だいたい確認している	2	10.0
あまり確認していない	0	0.0
確認していない	0	0.0
合 計	20	100.0

1.3. 大使事業の実施状況

(1) 活動内容

設置都府県における大使の具体的な活動内容を確認したところ、「認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力」が18件（90.0%）で最も多く、次いで「ホームページやマスコミへの取材協力など広報活動への協力」17件（85.0%）、「キャラバン・メイト活動への参加協力」15件（75.0%）、「認知症ピアサポート活動への参加・協力」13件（65.0%）の順になっている。

また、未設置道府県には今後予定している活動内容を確認した。未設置道府県においても同様の項目の割合が高く、「認知症福雄啓発フォーラム、講演会等への参加・協力」が11件（78.6%）、「認知症ピアサポート活動への参加・協力」が10件（71.4%）、「キャラバン・メイト活動への参加協力」と「認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任」が共に8件（57.1%）等となっている。

Q16_設置：Q11_未設置 大使の活動内容大使の活動内容（未設置は今後予定）（複数回答）

全 体		設 置		未 設 置	
件数	%	件数	%	件数	%
①認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力					
29	85.3	18	90.0	11	78.6
②キャラバン・メイト活動への参加協力					
23	67.6	15	75.0	8	57.1
③認知症ピアサポート活動への参加・協力					
23	67.6	13	65.0	10	71.4
④管内の認知症本人同士のネットワーク（づくり）への参加・協力					
16	47.1	9	45.0	7	50.0
⑤認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任					
19	55.9	11	55.0	8	57.1
⑥認知症関連事業・企画等へ意見やアイデアだし・ディスカッションなど					
18	52.9	10	50.0	8	57.1
⑦官民共同への参加協力（商品開発に関する意見だしなど）					
5	14.7	4	20.0	1	7.1
⑧ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力					
24	70.6	17	85.0	7	50.0
⑨設置済：活動はこれから/未設置：まだわからない					
3	8.8	1	5.0	2	14.3
母数 34		母数 20		母数 14	

※未設置の母数=Q2_7で大使任命予定「あり」の14件

選択肢以外の活動に関する自由回答は以下の通りである。

【その他具体例】

NO.	自由記述 (Q16)
1	区役所の懸垂幕への揮毫
2	大使による音楽の演奏や、大使が制作した美術作品や写真の展示などといった文化芸術活動を通じた認知症の理解促進、普及啓発
3	チームオレンジとしての活動として運営団体の SNS 等で活動状況を発信している。
4	市町村からの依頼を受け、認知症カフェや家族介護予防教室で、自身の思いを語る。
5	例) 県内には地域の共同温泉を利用する住民が多い。ケア会議にて、認知症の方が住み慣れた地域の共同温泉の利用が難しくなり保清が保てない事例が増加。この状況を受けて、大使が共同温泉を実際に利用し、当事者目線での使い心地を意見し、市の施策に関与した。
6	動画を作成し、公表した。その他の活動についてはこれから検討していく。
7	アルツハイマーデーに実施した駅前の街頭啓発
8	県認知症対策推進協議会への出席
9	メッセージ動画への出演、全国大使交流会への参加、県外の認知症イベントへの参加

(2) 活動依頼の応諾について

設置都府県において、市町村や関係機関等から大使活動の依頼を受ける際の決め方について確認したところ、「必ず本人が決めている」との回答が 11 件 (55.0%) で、全体の 5 割を占める。その他では「把握していない」が 3 件 (15.0%)、「だいたい本人が決めている」が 2 件 (10.0%)、「大使によって違いがあるが」2 件 (15.0%) となっている。

Q17_設置 大使活動の依頼を受ける際の決め方

区分	件数	割合
必ず本人が決めている	11	55.0
だいたい本人が決めている	2	10.0
本人より周囲が決めること	1	5.0
だいたい周囲が決めている	0	0.0
大使によって違いがある	2	10.0
把握していない	3	15.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0

(3) 大使事業の予算化の状況

設置都府県において大使事業の予算化の有無を確認したところ、「はい」は 15 件 (75.0%) で全体の 4 分の 3 が予算化している。

Q18_1 設置 今年度の大使事業について予算化

区分	件数	割合
はい	15	75.0
いいえ	5	25.0
合計	20	100.0

(4) 活動における保険加入の状況

設置都府県において大使活動における保険加入の有無を確認したところ、「はい」は1件(5.0%)、「いいえ」は16件(80.0%)、「検討中」は3件(15.0%)で、保険加入はあまり進んでいない。

Q18_2設置 大使の活動における保険の加入

区分	件数	割合
はい	1	5.0
いいえ	16	80.0
検討中	3	15.0
合計	20	100.0

(5) 大使の報酬及び交通費

大使活動における本人への報酬の支払い状況を確認したところ、「支払っている」は13件(65.0%)で最も多く、「ケースによって異なる」が5件(25.0%)となっている。

同様に大使活動における本人への旅費の支払い状況を確認したところ、「支払っている」は12件(60.0%)、「ケースによって異なる」は6件(30.0%)となっている。

Q18_3設置 大使活動における本人への報酬

区分	件数	割合
支払っている	13	65.0
支払っていない	0	0.0
ケースによって異なる	5	25.0
把握していない	0	0.0
その他	1	5.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0

Q18_4設置 大使活動における本人への旅費

区分	件数	割合
支払っている	12	60.0
支払っていない	0	0.0
ケースによって異なる	6	30.0
把握していない	0	0.0
その他	1	5.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0

(6) 支援者の報酬及び交通費

大使活動における支援者への報酬の支払い状況を確認したところ、「支払っている」は8件(40.0%)で、「ケースによって異なる」は7件(35.0%)となっている。

同様に大使活動における支援者への旅費の支払い状況を確認したところ、「支払っている」は8件(40.0%)、「ケースによって異なる」は7件(35.0%)となっている。いずれも支援者に「支払っている」とする割合は、本人よりも低い。

Q18_5設置 支援者への報酬

区分	件数	割合
支払っている	8	40.0
支払っていない	2	10.0
ケースによって異なる	7	35.0
把握していない	0	0.0
その他	2	10.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0

Q18_6設置 支援者への旅費

区分	件数	割合
支払っている	8	40.0
支払っていない	2	10.0
ケースによって異なる	7	35.0
把握していない	0	0.0
その他	2	10.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0

(7) 活動の窓口・調整役

設置都府県において大使活動の窓口・調整役の状況を確認したところ、担い手が「都道府県の担当者」との回答は12件(60.0%)で最も多く、「事業委託している組織」が5件(25.0%)となっている。

一方、大使任命予定が「ある」と回答した未設置道府県に大使活動の窓口・調整役の見通しを確認したところ、「都道府県担当者」との回答は10件(71.4%)、「わからない/まだきめていない」は3件(28.6%)となっている。

【設置済み】

Q19_設置 活動窓口・調整役

区 分	設置	
	件数	%
都道府県の担当者	12	60.0
事業委託している組織	5	25.0
委託以外の任せている組織・人	3	15.0
その他	0	0.0
合 計	20	100.0

【未設置】

Q12_未設置 活動窓口・調整役の見通し

区 分	未設置	
	件数	%
都道府県の担当者	10	71.4
事業委託する組織	1	7.1
その他	0	0.0
わからない/まだきめていない	3	21.4
合 計	14	100.0

※未設置の母数=Q2_7で大使任命予定「あり」の14件

大使の活動窓口・調整役を都道府県が担っていると回答した設置都府県に対して、その具体的な調整内容を聞いたところ、市区町村や関係機関からの依頼内容の調整、日程調整等となっていた。また、依頼を受ける際には、事前に活動依頼票などの様式を活用しているケースが多い。

【設置済み：調整内容】

NO.	自由記述 (Q2_19_2)
1	区市町村から事前相談票を提出していただき、支援者に連絡。大使から出演の内諾を得たら支援者の連絡先を区市町村へ伝える。(ただし、既に大使とやり取りがある場合は直接相談してよいこととしている)
2	市町と大使の間での日程調整及び活動内容の確認
3	活動依頼書を受け付けてから、大使自身または支援者・家族に連絡をとり、依頼内容をお伝えし、承諾された場合のみ依頼元にお繋ぎしている。依頼元に繋いだ後は、直接やり取りをさせていただいている。また、活動終了後は、実施報告書を依頼元から提出いただいている。
4	日程、参加できる大使の調整。
5	市町及び関係機関が、大使活動依頼を希望するときは、「希望大使活動連絡票」を県に提出してもらう。県は内容に応じて大使本人と調整を行い、活動を希望する大使を紹介。
6	日程及び依頼内容をまずは支援者に確認し、支援者から若しくは直接本人へ参加意向を確認している。
7	依頼元から活動内容や日程などを活動依頼書様式に記載のうえ県に提出してもらって、支援者を通して本人に意向を確認していただき、イベントへの参加を決定している。
8	事業実施者から連絡があれば大使支援者と連絡をとり調整を実施する予定であるが、現時点では依頼がない。
9	市町村や関係団体からの依頼受付・本人及び家族との連絡調整
10	依頼先との連絡調整 ・大使の移動に同行 ・当日の活動視察
11	県に直接依頼があった場合は、依頼内容を聞き取り、活動パートナーに伝える。依頼を受けるかどうかは、活動パートナーが本人に確認し、県担当者から依頼者に可否を返事する。
12	活動依頼にかかる事務手続き、依頼元とのやり取り、望大使との日程調整等

大使の活動窓口・調整役を事業委託していると回答した設置都府県に、業務を委託している理由を聞いたところ、委託先の実績や経験や自治体との信頼性を評価している記述となっている。

【設置済み：委託理由】

NO.	自由記述 (Q2_19_3)
1	企画提案を募り、長年、認知症当事者の方をサポートしている団体であり、 <u>本人の特性を見極めて引き出し、最大限に活用する経験と実績があった事業者を選定した。</u>
2	大使の活動ニーズをくみ取るとともに、 <u>活動中の身体的・精神的なサポートが行える団体に委託している。</u>
3	「希望大使等派遣事業」を認知症の人と家族の会県支部に委託。派遣事業を利用する場合は家族会、それ以外の派遣依頼は県担当者が窓口となり対応。事業の委託理由は、 <u>活動に係る連絡・調整・同行などの業務をよりきめ細やかに実施するため。</u>
4	事業委託をしている事業所は、若年性認知症の方を多く受け入れている事業所であるため、 <u>大使本人や支援者への対応に信頼をおいているから。</u>

(8) 任命後の大使との関わり

任命後の大使と都道府県担当者との関わりを確認したところ、「積極的に関わっている」と「必要なときに関わっている」が共に 10 件 (50.0%) となっており、「あまり関わっていない」「関わっていない」の回答は無かった。

Q20_設置 任命後の大使本人との関わり

区 分	設置	
	件数	%
積極的に関わっている	10	50.0
必要なときに関わっている	10	50.0
あまり関わっていない	0	0.0
関わっていない	0	0.0
合 計	20	100.0

(9) 任命後の大使活動の予定の把握状況

担当者として大使のスケジュールをどの程度把握しているかについて聞いたところ、「だいたい把握している」が 10 件 (50.0%)、「ほぼすべて把握している」が 9 件 (45.0%) となっている。「あまり把握していない」は 1 件あったものの、「把握していない」は無かった。

Q21_設置 活動予定の把握状況

区 分	設置	
	件数	%
ほぼ全て把握している	9	45.0
だいたい把握している	10	50.0
あまり把握していない	1	5.0
把握していない	0	0.0
合 計	20	100.0

(10) 運営規定の整備状況

大使事業の運営規定の整備状況を確認したところ、設置都府県と未設置道府県では大きく状況が異なっている。まず、設置都府県では「十分に整えた」6件と「だいたい整えた」9件を合わせて8割弱で整えられている。一方、未設置道府県では「まだできていない」が11件（78.6%）で、約8割が整っていない。

Q22_設置：Q13_未設置 運営規定の整備状況

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
十分に整えた	6	17.6	6	30.0	0	0.0
だいたい整えた	11	32.4	9	45.0	2	14.3
まだ不十分なところがある	6	17.6	5	25.0	1	7.1
まだできていない	11	32.4	0	0.0	11	78.6
合 計	34	100.0	20	100.0	14	100.0

※未設置の母数=Q2_7で大使任命予定「あり」の14件

(11) 大使の心身状態の変化に対する対応

設置都府県において、将来的な大使の心身状態の変化に備えて都道府県としての対応方針を確認したところ、対応を「検討した」と「検討中」が共に9件（45.0%）で、「検討したことはない」は2件（10.0%）となっている。

Q22_設置 大使の心身状態の変化に伴う対応

区 分	設置	
	件数	%
検討した	9	45.0
検討中	9	45.0
検討したことはない	2	10.0
合 計	20	100.0

「検討した」または「検討中」と回答した都府県において、その具体的な対応方針を確認したところ、多くは、本人の意志・意向を尊重する旨の方針が挙げられている。

【設置済み：大使の心身状態が進行した場合の対応について】

NO.	自由記述 (Q22_3)
1	大使の心身の状態に応じて、ご本人の希望する、できる範囲の活動をさせていただく。
2	急激に進行した際は本人や家族、委託先との話し合いの上対応方針を決定する。
3	活動にあたっては、本人も意向や体調等にあわせて相談しながら、一人ひとり、その時々にあった活動を柔軟に行うこととしている。
4	大使の心身の状態が悪化した場合は、その都度、課内で対応方法を協議している。大使の活動についてはスケジュールが過密にならないよう留意し、基礎疾患を含めて体調管理に十分な配慮が必要。
5	進行状況に応じて本人、御家族の意向を重視して判断する。
6	就役継続に関する本人及び支援者の意向を踏まえ、出来る範囲での活動に協力いただくよう調整していく。
7	症状の進行により、本人の希望で途中退任ができるよう設置要項に定めている。
8	本人や支援者の意向を十分に確認し決定する。
9	本県の大使は、体調や生活環境が変化する中でも、認知症と診断された方のために発信していきたいという思いは変わっておらず、「自分らしく生きる」ということのイメージを具体化して下さっている存在である。大使の本来の役割について再度共有し、発信の仕方も工夫しながら、本人らしい発信を本人の意思で継続し

	ていただきたいという県の方針を共有している。
10	進行した場合でも、ご本人がやってみたいことを一緒に共有し、できる範囲で活動していければと思う。
11	認知症の症状が進行した場合には、活動については本人の意向を確認しながら無理はさせないようにすることとしている。任期途中での辞退や任期の更新も本人の意思を確認して決定することとしている。
12	依頼内容によって本人が出来る範囲での活動を行う。本人や家族に判断により、任期途中の退任及び任期満了後の再任は妨げない。

1.4. 事業評価

(1) 大使事業の効果及び期待について

大使事業の効果について担当者の考えを聞いたところ、設置都府県では「十分に感じる」が13件(65.0%)、「まあ感じる」が6件(30.0%)で合わせて95.0%の担当者が効果を感じていると回答している。一方、未設置道府県では「十分あると思う」が14件51.9%、「まああると思う」が9件(33.3%)で、合わせて85.2%の担当者が効果を感じていると回答している。「設置」に比べて「未設置」の肯定感が若干低い。

【設置済み】

【未設置】

Q23_設置 大使事業の効果

区分	件数	割合
十分に感じる	13	65.0
まあ感じる	6	30.0
あまり感じない	1	5.0
全く感じない	0	0.0
わからない	0	0.0
合計	20	100.0

Q14_未設置 大使事業への期待

区分	件数	割合
十分あると思う	14	51.9
まああると思う	9	33.3
あまりないと思う	2	7.4
ないと思う	0	0.0
わからない	2	7.4
合計	27	100.0

設置都府県において「十分に感じる」と回答した理由は以下の通り。

【設置済み：十分に感じると回答した理由】

NO.	自由記述 (Q3_23)
1	講演会などでご本人の話すことは非常に勉強となるため。
2	認知症施策推進会議や認知症シンポジウム等のイベントにおいて、 <u>認知症の当事者のお声を聞く機会を得やすくなった。</u> また、支援者の方より「大使のイベント出演がきっかけで交流が生まれ、地域の活動が活性化された」とのお話もいただいた。
3	アンケートによると、7割以上が「認知症本人の講演等を聴講するのがはじめて」と回答し、「無意識のうちに先入観にとらわれていたことに気付いた」「本人の気持ちの確認が大切だと、改めて認識できた」「本で読んだりして知っていたつもりだが、より実感した」「出来る限り続けて、メッセージを発信して下さい」等のコメントをいただくため。
4	認知症の当事者の思いや意見を実際に聞くことができて良かったといった意見や <u>認知症に対する見方が変わった</u> という意見を事業後にいただくことが多いため。
5	事業実施時に参加者にアンケートへの御協力をいただいております、 <u>前向きな意見を多くいただくため。</u>
6	大使の活動や活躍を見て、 <u>認知症に対するイメージが変わった(ポジティブな方に)</u> と言われることが増えた。また、大使と交流することにより、 <u>他の当事者や地域との新たな出会い・繋がりが広がってきている。</u>

7	大使からの発信を通して、認知症に関する県民やメディアの関心が高まっており、各地域で「認知症を自分事として考える」きっかけとなったり、古い認知症観の払拭や正しい理解が広がっている。
8	大使が認知症は進行するものであり、その時々々のステージに応じて周囲がとるべき態度などを指南してくれています。目の前の大使に対してどう接するかを大使と対峙した人は嫌でも考え、学びになっていると考えています。
9	講演会の参加者からは、「認知症に対するイメージが変わった」などの反響がある。大使の派遣により、市町村などの関係機関における本人の発信の機会が増えたと感じる。
10	大使のメディア発信をみて、ピアサポーターとなった方や認知症対応事業所へ問い合わせをされた方がいたり、市町村施策に認知症当事者の率直なおもいが組み込まれるケースが増え、まちづくりに活かされている状況があるから。
11	講演会などで、大使の方にお話ししてもらった際、それを聞いた方から「はじめて若年性認知症の方のお話を聞いた」「一人で暮らしていることに驚いた」「大使の方のお話に勇気をもらった」などの感想をいただき、本人の生の声を届けることで、「こういう方もいるんだ」という気づきを多くの人に感じてもらえていると思うため。
12	大使に会いたいと県主催事業に参加して下さるご本人もあり、徐々に本人・家族とのつながりが広がりつつある。県が本人発信・本人の社会参加を重要視している姿勢を示す効果もあり、具体的な取組を行っている市町はまだ少ないものの、本人の声を施策につなげていきたいという気運の高まりを感じる。
13	講演会や研修会等での受講者から、認知症本人の視点にたつことができたとの反響が大きい。
14	認知症ご本人の経験や想い、当事者から見た視点等々当事者でなければ気付かない、当事者でなければ周囲の方に伝わらないことがたくさんあると思うため。
15	認知症の人に、本人自身に生きがいや社会とのつながりを感じていただけるとともに、県民の方々が認知症に対する正しい理解や知識を得るきっかけになると思われるため。
16	大使の話聞いた人から「すごく前向きな人だと感心した」「後ろ向きに捉えるだけではないお話に感銘を受けた」という感想があり、大使の言葉を受けて、認知症に関心を持つ人が少しずつ増えているのではないかと思う。
17	認知症当事者の声を聞くということが大使を任命する前より県内に広まっていて感じるから。
18	大使委嘱時のイベントにおいて、ニュース番組や新聞記事で取り上げられた。また、市町村から認知症関連イベントへの大使参加に関していくつか問い合わせがあった。

(2) 担当部署の理解の状況

大使事業に対する担当部署内の理解の状況について、回答者の印象を聞いたところ、設置都府県では「多くが理解している」が15件（75.0%）、「一部が理解している」が5件（25.0%）となっている。一方、未設置道府県では「多くが理解している」が11件（40.7%）、「一部が理解している」が14件（51.9%）で、未設置道府県に比べると設置都府県で部署内の理解が進んでいる様子が窺える。

Q24_設置:Q15_未設置 大使事業に対する担当部署内の理解状況

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
多くが理解している	26	55.3	15	75.0	11	40.7
一部が理解している	19	40.4	5	25.0	14	51.9
理解している人は少ない・い	2	4.3	0	0.0	2	7.4
わからない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

(3) 市町村の理解の状況

設置都府県において大使事業に対する管内市町村の理解の状況について、回答者の印象を聞いたところ、「多くが理解している」が11件(55.5%)、「一部が理解している」が7件(35.0%)で、「理解している人は少ない・いない」と「わからない」は共に1件(5.0%)となっている。

Q25_設置 大使事業に対する管内市町村の理解状況

区 分	件数	割合
多くが理解している	11	55.0
一部が理解している	7	35.0
理解している人は少ない・ わからない	1	5.0
合 計	20	100.0

(4) 地域啓発の効果

設置都府県において認知症や認知症の人への先入観を払拭する大使の効果について、回答者の印象を聞いたところ、「大いにある」が14件(70.0%)、「まあある」が5件(25.0%)で、全体の95.0%で効果があると回答している。

Q26_設置 地域住民の先入観を払拭する効果

区 分	件数	割合
大いにある	14	70.0
まあある	5	25.0
あまりない	0	0.0
まだこれから	1	5.0
わからない	0	0.0
合 計	20	100.0

(5) 大使の適性に関する検討状況

設置都府県において大使の適性についての検討状況を確認したところ、「組織として検討したことがある」が10件(50.0%)、「担当職及び関係者で検討した」が5件(25.5%)、「検討したことはない」が3件(15.0%)となっている。一方、未設置道府県では「担当職及び関係者で検討した」と「検討したことはない」が共に11件(40.7%)となっており、設置都府県では、大使の適性についての検討も進められている様子が見てとれる。

Q27_設置:Q16_未設置 大使の適性に関する検討状況

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
組織として検討したことがある	12	25.5	10	50.0	2	7.4
担当職及び関係者で検討した	16	34.0	5	25.0	11	40.7
担当職として考え方を整理した	5	10.6	2	10.0	3	11.1
検討したことはない	14	29.8	3	15.0	11	40.7
上記以外	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

(6) 大使の適性

大使の適任者として担当者が重要と思う項目を聞いたところ、全体では「希望大使事業の目的や意義を理解し共感している」が44件で最も多く93.6%となっている。次いで「認知症を受け入れ自分らしく前を向いて暮らしている人」が42件(89.4%)、「生活上の工夫や楽しく暮らすコツを話せる人」が22件(46.8%)の順になっている。また、重視している項目は、「設置」「未設置」ともほぼ同じ傾向となっている。

Q28_設置：Q17_未設置 大使に適任と思う人（複数回答）

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
希望大使事業の目的や意義を理解し共感している	44	93.6	19	95.0	25	92.6
認知症を受け入れ、自分らしく前を向いて暮らしている人	42	89.4	19	95.0	23	85.2
生活上の工夫や楽しく暮らすコツを話せる人	22	46.8	9	45.0	13	48.1
移動などのサポートがしやすい人	7	14.9	4	20.0	3	11.1
生活上の困難や辛い気持ちを説明できる人	7	14.9	2	10.0	5	18.5
本人の活動などについて、実績がある人	6	12.8	3	15.0	3	11.1
大勢の人の前でも上手に話ができる人	3	6.4	0	0.0	3	11.1
母 数	47		20		27	

大使の適性や人物像に関する自由記述は以下の通りである。

【設置済み：大使の適性や人物像について】

NO.	自由記述 (Q3_28)
1	大使の適性や人物像について、予め基準を作るなどして決めておくことが難しく感じている。ただ、前向きに生活されている人が適正と考えている。
2	本人活動の経験がない場合は、すぐに大使の活動を開始できず、ある程度の実績がある方が活動をイメージしやすい。
3	認知症を受け入れ、それを乗り越えてきた人。暮らしやすい地域をつくるために前向きな発信をしようとする人。
4	認知症の人の立場で、つらかった周囲からの対応なども直接的な言葉で話をして、認知症への認識を正してくれる方。また、自分は認知症になりたくない頑なに願っている方たちに、話しているうちに安堵を与えてくれる経験のある方。
5	発信したいことややりたい活動があれば、本人大使として活動いただきたいと考えている。
6	自らの意思で発信をしていきたいとの思いを持つ方に県が繋がることができていません。認知症ということをオープンにしていただけるだけでも、よいと考えます。
7	認知症になっても、信念をもって自分らしく堂々と生きる姿を多くの人に知ってもらうことの意義に共感し、よるこびを感じるができること。

【未設置：大使の適性や人物像について】

NO.	自由記述 (Q3_17)
1	活動内容を募集の段階で限定しなければ、人前で話ができるかどうかは関係なく、その方に適した活動内容を一緒に考えていけば良いので、希望大使事業の目的や意義を理解し共感している方で、認知症を受け入れ、自分らしく前を向いて暮らしていて、認知症であることをオープンにできる方であれば適任だと思います。
2	選択肢1に該当してさえいれば、その他が当てはまらずとも適任のように思います。
3	認知症になっても自分らしく前向きに希望を持って暮らしている姿を発信できる人。
4	どのような病期であってもその時なりに本人らしく暮らされているありのままの姿を示してくださる方。

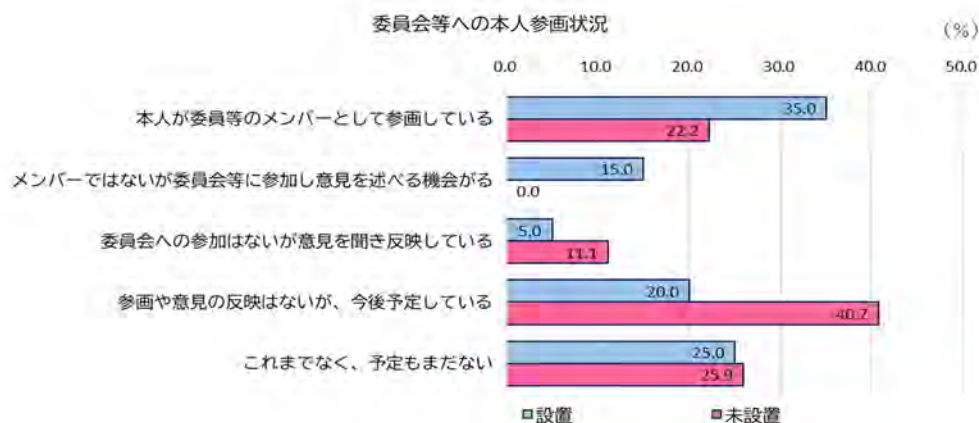
(7) 施策・政策等への本人の参画状況

設置都府県では、「本人が委員等のメンバーとして参画している」が7件(35.0%)で最も多く、「メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある」が3件(15.0%)で、合わせて5割になる。一方、未設置道府県の「本人が委員等のメンバーとして参画している」は6件(22.2%)、「メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある」は0件(0.0%)に留まり、設置と未設置の対応の差が大きい。

Q29_設置:Q18_未設置 認知症施策を検討する委員会等への本人参画状況

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
本人が委員等のメンバーとして参画している	13	27.7	7	35.0	6	22.2
メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある	3	6.4	3	15.0	0	0.0
委員会等には参加していないが意見を聞き委員会等に反映している	4	8.5	1	5.0	3	11.1
これまで本人の参画や参加、委員の反映はまだないが、今後予定している	15	31.9	4	20.0	11	40.7
これまでなく、予定もまだない	12	25.5	5	25.0	7	25.9
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。



(8) 基本法を活かした計画づくり

全体では「具体的に反映を始めている」が20件(42.6%)、「反映の検討を始めている」が17件(36.2%)で、合わせて8割弱の都道府県で基本法を活かした計画づくりが進められている。

設置都府県では、「具体的に反映を始めている」が9件(45.0%)、「反映の検討を始めている」が6件(30.0%)となっている。未設置道府県では、「具体的に反映を始めている」、「反映の検討を始めている」いずれも11件(40.7%)と同じ割合になっている。

Q29_2設置:Q18_2未設置 認知症基本法を都道府県計画に活かす動き

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
具体的に反映を始めている	20	42.6	9	45.0	11	40.7
反映の検討を始めている	17	36.2	6	30.0	11	40.7
反映や検討の動きはない	4	8.5	3	15.0	1	3.7
その他	5	10.6	1	5.0	4	14.8
無回答	1	2.1	1	5.0	0	0.0
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

(9) 管内市町村との協力関係

認知症施策に関する都道府県と管内市町村との協力関係を確認したところ、全体では「ほとんどの市町村と出来ている」が25件（53.2%）、次いで「一部の市町村と出来ている」が10件（21.3%）となっている。「設置」と「未設置」を比較すると、設置都道府県では「ほとんどの市町村と出来ている」とする割合が65%で、未設置道府県よりも高い割合になっている。

Q29_3設置：Q18_3未設置 認知症施策に関する都道府県と管内市町村との協力状況

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村と出来ている	25	53.2	13	65.0	12	44.4
半数程度の市町村と出来ている	4	8.5	2	10.0	2	7.4
一部の市町村と出来ている	10	21.3	2	10.0	8	29.6
あまり出来ていない	6	12.8	2	10.0	4	14.8
無回答	2	4.3	1	5.0	1	3.7
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない場合がある。

(10) 認知症施策の進捗

認知症施策の進捗状況について項目ごとに確認したところ、ピアサポートの実施について、全体では「一部の市町村で実施」が68.1%となっている。「設置」と「未設置」を比較しても傾向の違いは確認できない。

Q29_4a設置：Q18_4a未設置 ピアサポートの実施

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村で実施	3	6.4	1	5.0	2	7.4
半数程度の市町村で実施	0	0.0	0	0.0	0	0.0
一部の市町村で実施	32	68.1	14	70.0	18	66.7
把握していない	9	19.1	4	20.0	5	18.5
無回答	3	6.4	1	5.0	2	7.4
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

本人ミーティング等の実施について、全体では「一部の市町村で実施」が85.1%となっている。「設置」と「未設置」を比較しても傾向の違いは確認できない。

Q29_4b設置：Q18_4b未設置 本人ミーティング等の実施

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村で実施	1	2.1	1	5.0	0	0.0
半数程度の市町村で実施	2	4.3	2	10.0	0	0.0
一部の市町村で実施	40	85.1	15	75.0	25	92.6
把握していない	4	8.5	2	10.0	2	7.4
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

見守りネットワーク・SOS体制の構築について、全体では「ほとんどの市町村で実施」が76.6%となっている。「設置」と「未設置」を比較しても傾向の違いは確認できない。

Q29_4c設置：Q18_4c未設置 見守りネットワーク・SOS体制の構築

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村で実施	36	76.6	15	75.0	21	77.8
半数程度の市町村で実施	7	14.9	2	10.0	5	18.5
一部の市町村で実施	1	2.1	1	5.0	0	0.0
把握していない	3	6.4	2	10.0	1	3.7
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

チームオレンジの取組について、全体では「一部の市町村で実施」が80.9%となっている。「設置」と「未設置」を比較すると、設置都府県では「半数程度の市町村で実施」との回答が35.0%で、未設置道府県よりも活発な様子が確認できる。

Q29_4d設置：Q18_4d未設置 チームオレンジの取組み

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村で実施	1	2.1	0	0.0	1	3.7
半数程度の市町村で実施	7	14.9	7	35.0	0	0.0
一部の市町村で実施	38	80.9	12	60.0	26	96.3
把握していない	1	2.1	1	5.0	0	0.0
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

認知症カフェ等の展開について、全体では「ほとんどの市町村で実施」が91.5%となっている。「設置」と「未設置」を比較しても傾向の違いは確認できない。

Q29_4e設置：Q18_4e未設置 認知症カフェ等の展開

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ほとんどの市町村で実施	43	91.5	19	95.0	24	88.9
半数程度の市町村で実施	3	6.4	1	5.0	2	7.4
一部の市町村で実施	1	2.1	0	0.0	1	3.7
把握していない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

(11) 任命及び活動による管内市町村への影響

設置都府県に対して大使活動を通じた管内市町村の手ごたえを聞いたところ、「まあ感じる」が13件(65.0%)、「十分に感じる」が3件(15.0%)となっている。合わせて8割が何らかの手ごたえを感じていると回答している。

Q30_設置 大使活動を通じた管内市町村の手ごたえ

区 分	件数	割合
十分に感じる	3	15.0
まあ感じる	13	65.0
あまり感じない	2	10.0
全く感じない	0	0.0
わからない	2	10.0
合 計	20	100.0

手ごたえを「感じる」との回答した具体的な理由は以下の通りである。

【設置済み：活動を通じた管内市町村の手ごたえ】

NO.	自由記述 (Q30)
1	大使の講演会が良かったという話を聞くため。
2	活動後アンケートの回答に前向きな意見を多くいただくところ。
3	大使配置以降、本人発信・本人の社会参加に対する県の姿勢を示してきたことで、 <u>市町も各地域の本人とのつながりを重視した考え方が広まってきている</u> 。大使頼みではなく、まずは <u>地元の認知症の方とのつながりに目を向けていこう</u> という担当者のアンテナの高まりを感じる。
4	多くの区市町村から大使への協力依頼を受けており、住民の認知症に対する考え方に良い影響があったとの報告もある。
5	地域に偏りはみられるが、集会や研修での講演依頼が増えてきているところ。
6	認知症希望大使の活動依頼があったとき。
7	講演等の場で住民向けのフォーラムを開催することにより、参加された方に認知症に対する正しい理解が広がりつつあるところ。また、市町村担当者の意識にも少しずつ変化を感じられる。
8	大使を設置後、市町や関係機関から講演・研修・ピアサポート活動等の派遣依頼が増え、本人発信の機会が拡大しており、 <u>本人視点の地域づくりの取組が広がっている</u> 。イベント参加者や大使から「元気をもらった」等の感想があり、相互のモチベーション向上につながっている。
9	希望大使への活動依頼が任命初年度より増えているところ。
10	市町村からも大使への活動依頼があり、本人からの発信への関心は高いと思う。
11	希望大使の活動を市町村施策の中に活かしていこうとする動きがでてきている点。
12	大使委嘱時のイベントで本人からのメッセージ発信等を実施したところ、非常に良かったとの反響があり、市町村からもイベント等への参加を依頼したいとお話をいただいている。
13	活動を行った市町村において、行政担当者の方から、「大使の方に来ていただいて良かった」「本人の声を届ける機会をこれからも作って行きたい」との感想をもらい、大使の活動が行政担当者の意識を高めていると感じるため。
14	任命したことで、大使は「市町に向いて本人の思いを発信してもらえるのか」という問い合わせを受けた。そのため、市町担当者も、本人の思いを伝えていきたいと考えていると感じた。
15	市町村の普及啓発の場面で希望大使が活用されている。

(12) 任命及び活動による都道府県事業への影響

大使任命や活動を通じた都道府県事業への波及効果について、担当者の印象を聞いたところ、「様々な認知症関連の事業に効果が広がっている」と「一部の認知症関連の事業に効果が広がっている」が共に 8 件 (40.0%)、「ほとんど効果はみられない」が 4 件 (20.0%) となっている。

Q31_設置 都道府県事業への影響

区 分	件数	割合
様々な認知症関連の事業に効果が広がっている	8	40.0
一部の認知症関連の事業に効果が広がっている	8	40.0
ほとんど効果はみられない	4	20.0
合 計	20	100.0

Q31 の設問で、「様々な認知症関連の事業に効果が広がっている」または「一部の認知症関連の事業に効果が広がっている」を選択した理由について、自由記述は以下の通りである。

【設置済み：都道府県事業への影響】

NO.	自由記述 (Q31)
1	講演会や認知症普及啓発イベントなどで、認知症当事者のメッセージや活動を発信できるようになった。認知症当事者の方と接する機会が増えたことから、 <u>高齢者保健福祉計画を始め、認知症施策に当事者の意見を反映しやすくなった。</u>
2	認知症に関する各種研修会等で大使に登壇いただき講演をいただいている。
3	まだ活動が始まったばかりであるが、 <u>認知症関連の計画にも検討メンバーとして参加していただいているので、具体的な取組についても検討しながら進めることで、事業に効果がでてくると期待している。</u>
4	自治体の担当者・担当課、施策の関係者の理解を促進し、 <u>認知症施策全体の推進につながっている。</u>
5	県が主催する研修会（チームオレンジ研修・オレンジチューター研修など）の講師として希望大使に講演いただくことで、 <u>参加者の認知症への理解が深まり充実した研修内容となっているから。</u>
6	大使事業を通じての学びを活かし、本人の社会参加や地域共生社会をテーマにした研修を開催したところ、参加者の感想からニーズと合致していることがわかった。そのため「 <u>本人の声を起点とした地域づくり</u> 」「 <u>本人の社会参加・本人発信</u> 」というテーマを県事業の共通項として重視していく県の方針を共有した。また、 <u>本方針は医療体制や予防等全ての施策の本質と捉えている。</u>
7	普及啓発の施策において、 <u>希望大使による本人発信は柱の一つである。</u> 希望大使をはじめとする <u>認知症ご本人の声を県の認知症施策の計画に反映。</u>
8	普及啓発事業の一環として行ったシンポジウムへご出演いただき、参加者から「 <u>認知症の方ご本人の思いを聞けて胸に響いた</u> 」、 <u>などの感想をいただいている。</u>
9	認知症理解促進、キャラバン・メイト養成講座の講師やポスターのモデルとなっただき、 <u>多くの認知症普及啓発に良い影響力となっている。</u>
10	講演会やフォーラム等の啓発イベントにおいては、 <u>大使への依頼が増えており本人からの発信への関心は高まっていると思う。</u>

1.5. 事業担当者の状況

(1) 大使事業にかかるエフォート

設置都府県の担当者について、業務全体における大使事業のエフォートを確認したところ、平均は 24.2% となった。区分別に見ると「11%以上 30%以下」が 12 件 (60.0%)、「10%以下」が 4 件 (20.0%)、「31%以上 60%以下」が 3 件 (5.0%) となっている。

Q33_設置 業務全体における大使事業のエフォート

区分	件数	割合
10%以下	4	20.0
11%以上30%以下	12	60.0
31%以上60%以下	3	15.0
無回答	1	5.0
合計	20	100.0
平均		24.2%

(2) 困難や課題

大使事業を進める上での担当者が抱えている困難や課題について、全体では「まあある」は28件(59.6%)、「大いにある」は10件(21.3%)で、合わせて8割が何らかの困難や課題を抱えている。

Q34_1設置：Q19_1未設置 自身が抱えている困難や課題

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
大いにある	10	21.3	2	10.0	8	29.6
まあある	28	59.6	14	70.0	14	51.9
あまりない	8	17.0	4	20.0	4	14.8
全くない	1	2.1	0	0.0	1	3.7
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

上記の設問で困難や課題が「大いにある」「まあある」とした具体的な内容を確認したところ、全体では「①大使の活動の継続や今後の展開のあり方について検討が必要」が28件(59.6%)と最も多く、「設置」「未設置」ともに同様の傾向となっている。ただし、未設置道府県では、「④事業の進め方がよくわからない」(50.0%)、「候補者の見つけ方がわからない」(45.5%)、「③大使の適任者がみつからない」(45.5%)が設置道府県よりも高い割合になっており、新たな事業の具体的な進め方で悩んでいる様子が見て取れる。

Q34_設置：Q19_未設置 自身が抱えている困難や課題_具体的な内容(複数回答)

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
①大使の活動今後の展開のあり方について検討が必要	28	59.6	11	68.8	17	77.3
②候補者の見つけ方がわからない	14	29.8	4	25.0	10	45.5
③大使の適任者がみつからない	14	29.8	4	25.0	10	45.5
④事業の進め方がよくわからない	12	25.5	1	6.3	11	50.0
⑤やるが多すぎて大使事業に手が回らない	11	23.4	5	31.3	6	27.3
⑥認知症の人とのかわり方がよくわからない	4	8.5	1	6.3	3	13.6
⑦管内市町村の関心が低い	4	8.5	3	18.8	1	4.5
⑧事業の必要性をあまり感じない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
⑨上司や関係各部の関心が低い	0	0.0	0	0.0	0	0.0
母 数	38		16		22	

※未設置の母数=Q4_19_1で困難や課題「あり」の22件

※設置済の母数=Q4_34_1で困難や課題「あり」の16件

大使事業担当者としての困難・課題に関する具体的な内容は、以下の通りである。

【設置済み：担当者としての困難・課題】

NO.	自由記述 (Q4_34_2_10)
1	大使がいる地域といない地域がある「地域格差」/当事者との出会い方/大使の目的の共有
2	講演が可能な大使数は少ないが、市町等からは講演依頼が多く、一部の大使に負担が集中している。今後は「大使の活動＝講演」ではないことを関係機関に周知すると共に、ピアサポート活動等、活動の幅を広げていけるとよい。 大使事業に係る調整に多くの時間を要しており、業務全体のマンパワー不足を感じる。
3	毎年募集をする予定だが、募集方法をどうするか。
4	市町は住民の前で話ができる大使を求めていることがわかるため、認知症が進行し、話をすることが難しくなった大使にはあまり出演依頼はない。
5	正解がない事業だと思うので、どのように事業を進めれば効果的なのか迷うことがある。
6	大使のイベント出演の際に同行している支援者に対しても謝礼金等を支給するべきと考えているが、支給根拠等が整理できておらずまだ支給できていない。大使の活動には支援者の同行支援が不可欠なので、支給に向けて検討している。 大使の活動管理について、支援者を通して活動依頼を行っており、日程調整等に時間を要する場合がある。

【未設置：担当者としての困難・課題】

NO.	自由記述 (Q4_19_2)
1	任命式の開催方法が課題です。(知事の参加有無等) 支援者が包括の職員の場合、本業があるので、できる支援に限られ、その分、自治体担当者の負担が大きくなりすぎないか懸念しています 大使を選定する際に、認知症であるかの確認をどのように行うかが課題です。(医師の診断書の提出を求めるか等)
2	当県の都合ではあるが、認知症事業をほぼ職員一人で担当している上に、今後は都道府県の基本計画の策定などさらに業務が増えると見込まれる。大使を任命する以上、都道府県においても大使や支援者と連携しながら活動を随時フォローできる体制の整備が必要だと思うが、当県の現在の状況では難しい。
3	県としては大使を置いていないが、県内で同様の活動があるという現状の中では、市町や関係団体等とも意見交換しながら、県としての考えをまとめてく必要があると考えている。
4	病状の進行やそのときの病状の不安定さもあり、現在大使になり得そうな方は任命に至っていない現状。認知症疾患医療センターや家族の会、市町村等に声をかけてはいるが、なかなか大使となりうる方がいないのが現状。本人は良くても周りの家族や親族が反対することもある。
5	本人の希望があれば当事者発信はしてもらってもよいと思うが、大使任命まで必要なか疑問に感じている。
6	家族の理解や大使自身がやりがいを持てる事業展開ができるかどうか。任命したは良いが実のある事業展開ができなければ任命した大使とのトラブルに発展しかねない。

(3) 他の都道府県担当者との情報連携

大使事業に関して他の都道府県担当者との情報連携や相談をした経験について、全体では「ある」が35件(74.5%)で、「ない」が12件(25.5%)となっている。「設置」「未設置」で比較すると、設置都府県の「ある」とする割合は未設置道府県よりも10ポイント程度高い。

Q35_設置 : Q20_未設置 他の都道府県担当者との情報連携や相談

区 分	全 体		設 置		未 設 置	
	件数	%	件数	%	件数	%
ある	35	74.5	16	80.0	19	70.4
ない	12	25.5	4	20.0	8	29.6
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

情報連携の具体的な内容は以下の通りである。

【設置済み：情報連携の内容】

NO.	自由記述 (Q35)
1	任命プロセスについて/大使の心身の状態が進行した場合の対応について/活動方針等についての大使との意見交換の頻度・方法について
2	認知症希望大使の具体的な任命基準
3	大使の任命方法や活動内容、委託の有無等について聞き取りを行った。
4	任命を検討する際に、先に任命をされていた神奈川県や愛知県等に任命手続きのヒアリングを行った。任命後は、活動内容や事務的な内容(報償費や旅費等)について相談をした。
5	委嘱までのプロセス、設置要綱・様式、委嘱状交付式の内容、派遣体制等
6	候補者の選定、事務手続き
7	希望大使を初めて任命される県の担当者から、大使任命セレモニーを実施するので、本県大使とともに参加して欲しいか等。
8	認知症フォーラムでブロック内大使の座談会を行いたいと相談を受けた。
9	希望大使の任命方法や活動内容など。
10	九州・沖縄の大使任命県がパネリストとなるフォーラムを開催した。
11	大使の活動管理・日程調整方法や大使・支援者への謝礼金支給について等。
12	照会に関する回答や要綱な/の情報提供を受けた。
13	募集の方法について/動内容について
14	設置要綱・運営の仕方(大使制度創設前)、実際の活動状況の問い合わせ(大使配置後)。市町、疾患医療センターを対象にしたピアサポート研修会の開催に際し、実際に認知症疾患医療センター内でピア活動をされている、他県の大使に講演を依頼。
15	候補者をどのようにして選んでいるか、任命証について、活動内容について等
16	希望大使の委嘱までの事務手続きや運用方法、謝金の金額設定等について。

(4) 管内市町村への説明と連携内容

大使事業に関する都道府県の対応や情報について、管内市町村への連携状況を聞いたところ、全体では「はい」が31件（66.0%）、「いいえ」が15件（31.9%）となっている。

「設置」「未設置」別に見ると、設置都府県では連携している割合が未設置道府県よりも高く、「はい」は19件（94.7%）で、「未設置」よりも50ポイント以上高くなっている。

Q39_設置：Q23_未設置 管内市町村への説明・通知等の状況

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
はい	31	66.0	19	94.7	12	44.4
いいえ	15	31.9	1	5.3	14	51.9
わからない	1	2.1	0	0.0	1	3.7
合計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

管内市町村との具体的な連携内容について、全体では「国の通知等を共有している」が26件（83.9%）、「大使の活動内容について説明している」が17件（54.8%）、「国や他都道府県の任命状況について紹介している」が16件（51.6%）と続く。「設置」「未設置」別で見ると、未設置道府県では「国の通知等を共有している」が11件（91.7%）で9割以上に該当するものの、その他の項目は設置都府県の割合が著しく高い。

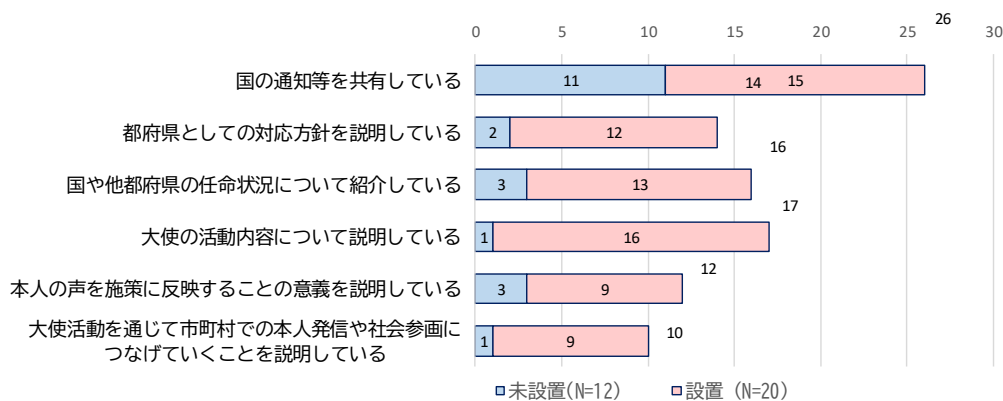
Q39_設置：Q23_未設置 管内市町村への説明・通知等の内容（複数回答）

区分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
国の通知等を共有している	26	83.9	15	78.9	11	91.7
都府県としての対応方針を説明している	14	45.2	12	63.2	2	16.7
国や他都道府県の任命状況について紹介している	16	51.6	13	68.4	3	25.0
大使の活動内容について説明している	17	54.8	16	84.2	1	8.3
本人の声を施策に反映することの意義を説明している	12	38.7	9	47.4	3	25.0
大使活動を通じて市町村での本人発信や社会参画につなげていくことを説明している	10	32.3	9	47.4	1	8.3
母数	31		19		12	

※設置済の母数=Q4_34_1で「はい」と回答の19件

※未設置の母数=Q5_23_1で「はい」と回答の12件

管内市町村への説明・通知等の内容



(5) 管内市町村担当者との関わり

管内市町村担当者との日頃からの関わり状況を聞いたところ、全体では「必要に応じて関わっている」が38件（80.9%）、「積極的に関わるようにしている」が8件（17.0%）となっている。

「設置」「未設置」別に見ると、「積極的に関わるようにしている」との回答は設置都府県が7件（35.0%）なのに対して、「未設置」では1件（3.7%）となっている。比較すると設置都府県で市町村への積極的な働きかけが認められる。

Q40_設置：Q24_未設置 管内市町村担当者との日頃からの関わり

区 分	全体		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
積極的に関わるようにしている	8	17.0	7	35.0	1	3.7
必要に応じて関わっている	38	80.9	12	60.0	26	96.3
あまり関わっていない	1	2.1	1.0	5.0	0.0	0.0
合 計	47	100.0	20	100.0	27	100.0

1.6. 事業担当者の気づきとチャレンジしたいこと

(1) 担当者の気づきや感想

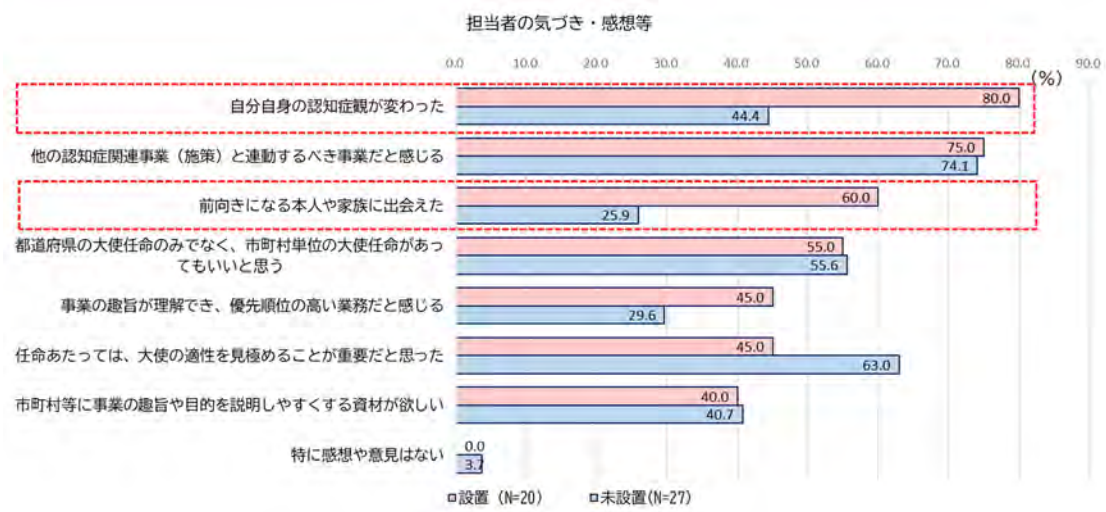
大使事業を担当したことで得られた担当者自身の気づきや感想を聞いたところ、全体では、「他の認知症関連事業と連動するべき事業だと感じる」が35件（74.5%）で最も多く、次いで「自分自身の認知症観が変わった」が28件（59.6%）、「任命あたっては、大使の適性を見極めることが重要だと思った」と「都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもいいと思う」が共に26件（55.3%）と続く。

しかし、「設置」と「未設置」を比較すると両者には差異があり、設置都府県では「自分自身の認知症観が変わった」が16件（80.0%）、次いで「他の認知症関連事業と連動すべき事業だと感じる」15件（75.0%）、「前向きになる本人や家族に出会えた」12件（60.0%）と続く一方、未設置都府県では「他の認知症関連事業と連動するべき事業だと感じる」が20件（74.1%）で最も多く、次いで「任命にあたっては大使の適性を見極めることが重要だと思った」17件（63.0%）、「都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもよい」15件（55.6%）などの割合が高い。

設置都府県において認知症観に変化が起きている担当者の割合が高い。

Q36_設置：Q21_未設置 大使事業を担当したことによる担当者の気づきや感想（複数回答）

区 分	設置+未設置（全）		設置		未設置	
	件数	%	件数	%	件数	%
①自分自身の認知症観が変わった	28	59.6	16	80.0	12	44.4
②前向きになる本人や家族に出会えた	19	40.4	12	60.0	7	25.9
③事業の趣旨が理解でき、優先順位の高い業務だと感じる	17	36.2	9	45.0	8	29.6
④他の認知症関連事業（施策）と連動するべき事業だと感じる	35	74.5	15	75.0	20	74.1
⑤市町村等に事業の趣旨や目的を説明しやすくする資材が欲しい	19	40.4	8	40.0	11	40.7
⑥任命あたっては、大使の適性を見極めることが重要だと思った	26	55.3	9	45.0	17	63.0
⑦都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもいいと思う	26	55.3	11	55.0	15	55.6
⑧特に感想や意見はない	1	2.1	0	0.0	1	3.7
母 数	47		20		27	



(2) 今後の事業展開に向けて望むこと

今後の事業展開を踏まえて担当者として望むことを聞いたところ、「全国の大使が交流できる機会」が18件（90.0%）で最も多く、「都道府県担当者同士の情報交換が出来る機会」が17件（85.0%）、「取組の効果を示せるわかりやすい評価指標」が10件（50.0%）と続く。

Q37_設置 今後あればよいと思う取組み（複数回答）

区分	件数	割合
都道府県担当者同士の情報交換が出来る機会	17	85.0
全国の大使が交流できる機会	18	90.0
取組みの効果を示せるわかりやすい評価指標	10	50.0
その他	0	0.0
合計	20	100.0

(3) 本人の声を施策に活かす取組・工夫等

本人の声を施策に活かすために取組んでいることや工夫を自由記述で聞いたところ、会議等で直接話を聞く以外にも、ヒアリングの機会を設ける、アンケートや本人ミーティングを実施する、管内市町に本人の声を施策に反映させる重要性を周知する等、様々な方法で取組まれていた。

【設置済み：本人の声を施策に活かすために取り組んでいること】

NO.	自由記述 (Q38)
1	認知症施策推進会議において大使の方にお話を伺う機会を設けている。
2	認知症に関わる事業を実施する際は、できるだけ丁寧に認知症当事者からヒアリングする機会を設けている。
3	ピアサポーター、希望大使の設置。県内におけるフォーラムの開催。
4	認知症施策推進計画の改定の年であり、管内の本人を対象にしたアンケート調査（98名）と本人ミーティング（12ヵ所、計40名参加）を実施した。

5	市町等の支援関係者を対象に、 <u>本人の声を施策に反映させるための方法を学ぶ「オレンジパワー活用セミナー」</u> を継続して開催。各種会議・研修等の場を活用し、希望大使の取組や本人の声を施策に反映させることの重要性を周知。
6	これから取り組んでいきたいことだが、県以外から活動依頼があれば、 <u>できる限り同行し、本人の声を随時拾っていく。</u>
7	本人ミーティングが未実施の市町に対し、 <u>デモ本人ミーティング</u> を県主催で開催している。
8	今年度より、経済産業省のオレンジイノベーション事業を展開し、 <u>当事者の声を加えた商品開発事業に参画</u> している。今後県としての事業化も検討したい。
9	市町村担当者向けに認知症の <u>意思決定支援研修会</u> を実施している。
10	県主催事業（若年性自立支援ネットワーク会議・健康づくり審議会認知症対策部会）への本人参画を進めており、大使以外のご本人から認知症施策に対する意見をきく機会を設けている。今年度は、本人・家族に県主催会議をオープンにするほか <u>認知症対策部会で伝えたいことを予めきく機会</u> も設け、本人・家族の声を認知症施策に反映するための工夫を進めている。

【未設置：本人の声を施策に活かすために取り組んでいること】

NO.	自由記述（Q4_22）
1	家族の会等の関係団体とは、メールや電話のやり取りだけではなく、 <u>事務所が近いので直接訪問</u> することで、色々な話を伺うことができています。
2	県認知症施策推進計画（仮称）の策定や地域版希望大使の事業実施・任命に向け、 <u>県内に住む認知症の方ご本人との意見交換会を実施する予定。</u>
3	認知症の人と家族の会のつどいや、市町村のピアサポート活動など、 <u>本人の活動の場に時間があれば参加する</u> ようにしている。
4	<u>家族会、認知症疾患医療センター、若年性認知症コーディネーター</u> 等と日常から情報交換をすることで、本人や家族のニーズを把握することに努めている。
5	若年性認知症本人交流会等で <u>アンケート</u> などを実施している。
6	様々な場面をとらえて、 <u>ご本人や家族、また関わる機会の多い市町職員等と話をする</u> ように努めている。
7	・他県の希望大使の講演、本人ミーティングの開催（当県の本人も参加） ・市町担当課、包括、事業所向けに認知症の本人の声を聞くことに関するセミナーを開催
8	①認知症施策推進会議の委員として意見をお聞きしている。② <u>若年性認知症意見交換会</u> では、本人・家族の参加のあり、意見を施策に反映している。
9	<u>当事者との意見交換の場</u> の設定。
10	<u>認知症本人ミーティング開催、オレンジドア開催、情報誌への本人意見の掲載、各研修会への本人参加の後押し、老人福祉計画及び介護保険事業支援計画等の策定の際の本人意見反映。</u>

(4) 事業担当者としてチャレンジしたいこと

大使事業等の担当者として、大使と一緒にチャレンジしたいことは以下の通りである。

【設置済み：チャレンジしたいこと】

NO.	自由記述 (Q4_41)
1	大使 1人1人に合った情報発信の仕方の検討
2	大使と一緒に、認知症当事者の方の課題を解決する商品やサービスを開発すること。 大使と一緒に、各地の認知症カフェや本人ミーティングに参加し、本人発信の大切さと姿を知ってもらうこと。 大使と一緒に、新たに大使として活動いただける方を探すこと。
3	認知症に関する理解促進事業
4	大使や支援者の皆さんと二人三脚で無理せず取り組み、関係機関と連携を図りながら、それぞれの大使が活躍できる体制や環境を整えていきたい。
5	市町村からの問い合わせが徐々に増えており、大使に活躍していただける機会が多くもてると感じている。まずは、各地域で活動するなかで、認知症になってもいきいきと過ごしている大使の存在を知ってもらい、認知症への正しい理解につなげていきたい。
6	大使と相談して決めたいと思います。
7	大使に企画段階から関わっていただき、大使が中心となったイベント等ができるとういと思う。
8	当県においては、R元年度よりピアサポート事業を展開しR2年度から希望大使を設置している。ピアサポート活動を通じて、本人は発信する自信をつけ、支援者は本人のやりたいことを引き出したり共有しながら、大使になる気持ちの醸成を図るという過程を大切にしている。今後も引き続きピアサポーター養成・活動促進に力をいれたい。 ピアサポーター養成については、現在6市23名のピアサポーターが在籍しているが、今後は県内18市町村で展開をしていきたい。(セミナー終了後に早速展開計画をピアサポート事業委託事業所と立案)
9	ピアサポーターの活動促進については、講演活動にとどまらず、家庭・病院・施設訪問等の個別支援の充実化と当事者開発オレンジノベーションの取組を加速させたい。(経済産業省事業を活用し、当事者の困り・「あったらいいな」を入り口とした商品体験・実証実験に参加している)
10	具体的にはまだ考えていないが、大使の希望に沿いながら、できるだけ地域に貢献できるような活動をしていきたい。
11	大使の声や思いを県内の多くの人に、広く知ってもらうため、各市町村で開催している研修や集いに大使と一緒に参加
12	現大使が大使活動を振り返った時に、「大使になってよかった」と思ってもらえるような活動にしていきたい。そのため、大使と思いを共有する機会を大切にする必要がある。また、現大使の輪を中心に、施策に関心をもって協力できる人を増やしていきたい。
13	まずは大使に興味をもってもらい、今後も新たな大使を任命することから始めたいと考えている。
14	委嘱済みの大使が、子ども世代への啓発に意欲があることから、今後は学校等への講演会も開催してみたいです。

2. 市町村調査

2.1. 基本情報

(1) 大使の設置有無別・回答市町村数

アンケートを回収した1,054市町村のうち、管轄する都道府県に地域版希望大使の設置が「あり」は442件(41.9%)、「なし」は612件(58.1%)となっている。以下では、大使の設置による市町村への影響を確認したい設問において、「設置あり」「設置なし」の区分を設けて集計した。

地域版希望大使の設置有無別/回答市町村の数

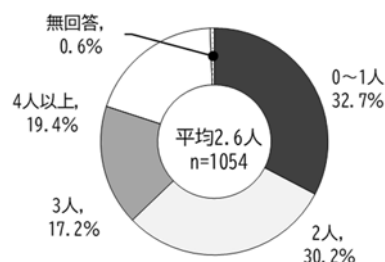
区 分	設置あり (n=442)	
	件数	%
設置あり	442	41.9
設置なし	612	58.1
合 計	1,054	100.0

(2) 認知症施策担当者数

市町村の認知症施策担当者数の平均は2.6人となっている。区分別に見ると「0~1人」が32.7%で最も高く、次いで「2人」が30.2%、「3人」が17.2%と続く。「4人以上」との回答も2割程度ある。

Q5_class : 認知症施策担当者

区 分	全体 (n=1,054)	
	件数	%
0~1人	345	32.7
2人	318	30.2
3人	181	17.2
4人以上	204	19.4
無回答	6	0.6
合 計	1,054	100.0
平 均	2.6人	



※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

Q3人口規模×Q5認知症施策担当者人数

Q3人口規模	Q5認知症施策担当者人数					
	全体	0~1人	2人	3人	4人以上	無回答人
1万人未満	237	119	62	37	17	2
	100.0	50.2	26.2	15.6	7.2	0.8
10万人未満	590	197	194	88	109	2
	100.0	33.4	32.9	14.9	18.5	0.3
50万人未満	196	27	60	50	59	0
	100.0	13.8	30.6	25.5	30.1	0.0
50万人以上	28	1	1	6	19	1
	100.0	3.6	3.6	21.4	67.9	3.6
無回答	3	1	1	0	0	1
	100.0	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3
合 計	1,054	345	318	181	204	6
	100.0	100.0	92.2	52.5	59.1	1.7

(3) 認知症施策推進基本計画（市町村計画）策定状況

認知症施策推進基本計画の策定状況について、「今のところ予定はない」が696件で全体の7割弱を占めている。また、「来年度以降に作成」は170件（16.1%）、「今年度中に作成」は66件（6.3%）で、「作成済み」との回答は僅かに34件（3.2%）となっている。

Q6_1：認知症施策推進基本計画（市町村計画）

区分	全体 (n=1,054)	
	件数	%
作成済み	34	3.2
今年度中に作成	66	6.3
来年度以降に作成	170	16.1
今のところ予定はない	696	66.0
その他	85	8.1
無回答	3	0.3
合計	1,054	100.0

Q6_1の設問で、「作成済み」「今年度中に作成」「来年度以降に作成」のいずれかを選択した270件を対象に、「計画を策定するにあたって認知症の人（本人）の意見を聞いたかどうかを確認したところ、全体では「はい」が114件（42.2%）で、「いいえ」が67件（24.8%）となっている。また、「わからない」との回答も80件と3割程度を占めている。大使設置有無別に見ると、「設置あり」では、「はい」が49.5%で、「設置なし」よりも12ポイント高くなっている。

Q6_2：市町村計画策定プロセスでの本人意見の収集

区分	全体 (n=270)		設置あり (n=111)		設置なし (n=159)	
	件数	%	件数	%	件数	%
はい	114	42.2	55	49.5	59	37.1
いいえ	67	24.8	28	25.2	39	24.5
わからない	80	29.6	25	22.5	55	34.6
無回答	9	3.3	3	2.7	6	3.8
合計	270	100.0	111	100.0	159	100.0

※母数=Q1_6_1の設問で「1,2,3」を選択の270件

2.2. 国及び都府県が任命した希望大使について

(1) 担当者における「希望大使」の認知状況

国が任命した認知症本人大使「希望大使」を「知っている」との回答は883件で全体の83.8%、「知らない」は150件（14.2%）となっている。大使設置有無別に見ると、「設置なし」で認知率が若干低い。

Q7：国が任命した認知症本人大使の認知状況

区分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし (n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
知っている	883	83.8	391	88.5	492	80.4
知らない	150	14.2	39	8.8	111	18.1
無回答	21	2.0	12	2.7	9	1.5
合計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

(2) 都道府県との連携状況

都道府県が設置する地域版希望大使の事業について、都道府県から市町村への説明が「あった」は 487 件で全体の 5 割弱となっており、「わからない」も 4 割弱と高い。大使設置有無別に見ると、「設置あり」では「あった」が 75.8%、「設置なし」では 24.8%で、大きく差がある。

Q8_1: 大使事業に関する都道府県からの説明

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
あった	487	46.2	335	75.8	152	24.8
なかった	166	15.7	14	3.2	152	24.8
わからない	393	37.3	89	20.1	304	49.7
無回答	8	0.8	4	0.9	4	0.7
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

Q8_1 の設問で、説明が「あった」と回答した 487 件について、都道府県からの情報連携の内容を確認したところ、全体では「国の通知が共有された」が 339 件 (69.6%)、「大使の活動内容について説明があった」が 304 件 (62.4%)、「国や他の都道府県の任命状況について紹介があった」が 282 件 (57.9%) の順に多い。

一方、大使設置有無別に見ると、「設置あり」では「大使の活動内容について説明があった」250 件(74.6%)、「都道府県の対応方針について説明があった」218 件 (65.1%)、「本人の声を施策に反映することの意義について説明があった」155 件 (46.3%) 等の項目において、「設置なし」よりも高い割合となっている。

なお、情報連携の内容に関する「その他」の自由回答には、「大使候補者の情報収集や推薦依頼に関すること」や「大使の設置要綱」等の記載がある。

Q8_2: 都道府県からの情報連携内容 (複数回答)

区 分	全体 (n=487)		設置あり (n=335)		設置なし(n=152)	
	件数	%	件数	%	件数	%
① 国の通知等が共有された	339	69.6	206	61.5	133	87.5
② 都道府県の対応方針について説明があった	270	55.4	218	65.1	52	34.2
③ 国や他の都道府県の任命状況について紹介があった	282	57.9	198	59.1	84	55.3
④ 大使の活動内容について説明があった	304	62.4	250	74.6	54	35.5
⑤ 本人の声を施策に反映することの意義について説明があった	209	42.9	155	46.3	54	35.5
⑥ 市町村での本人発信や社会参画の推進について説明があった	155	31.8	120	35.8	35	23.0
母 数	487		335		152	

※母数=Q2_8_1の設問で「あった」を選択の487件

(3) 大使候補者に関する推薦・協力依頼

Q8_1 の設問で、説明が「あった」と回答した 487 件について、「都道府県から大使候補者に関する相談や推薦依頼を受けたことがあるか」を聞いたところ、全体では「ある」が 41.5%、「ない」が 47.4%となっている。

大使設置有無別に見ると、「設置あり」では「ある」が 158 件 (47.2%) で、「設置なし」よりも 18 ポイント程度高い。

Q8_3: 大使候補者に関する推薦・協力依頼

区 分	全体 (n=487)		設置あり (n=335)		設置なし(n=152)	
	件数	%	件数	%	件数	%
ある	202	41.5	158	47.2	44	28.9
ない	231	47.4	141	42.1	90	59.2
わからない	50	10.3	33	9.9	17	11.2
無回答	4	0.8	3	0.9	1	0.7
合 計	487	100.0	335	100.0	152	100.0

※母数=Q8_1の設定で「あった」を選択の487件

(4) 地域版希望大使の参加・協力の状況

「設置あり」市町村における地域版希望大使の市町村活動への参加・協力状況を聞いたところ、「認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力」が99件で最も多く2割程度に該当する。その他の項目では、いずれも5%前後となっている

Q10: 地域版希望大使の参加・協力状況 (複数回答)

区 分	設置あり (n=442)	
	件数	%
認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	99	22.4
キャラバン・メイト活動への参加・協力	21	4.8
認知症ピアサポート活動への参加・協力	26	5.9
日々の暮らし(活動)の発信	23	5.2
管内の認知症本人同士のネットワーク(づくり)への参加・協力	24	5.4
認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への参加・協力	29	6.6
認知症関連事業・企画等へ意見やアイデア出し・ディスカッションなど	28	6.3
官民共同への参加協力(商品開発に関する意見出しなど)	2	0.5
ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	23	5.2
母 数	442	

また、大使が参加・協力している内容として、「その他」の自由回答は、認知症カフェへの参加・希望大使のインタビュー動画を市のケーブルテレビで放送・日々の暮らしを発信しているインタビュー動画の作成・チームオレンジ立ち上げのステップアップ研修への協力 等となっている。

2.3. 市町村における本人の活動状況

(1) 本人の活動に関する情報収集の状況

認知症の本人の活動に関する情報収集の状況を聞いたところ、全体では「なるべくしている」が496件(47.1%)で最も多く、「特にしていない」は483件(45.8%)で、「積極的にしている」は73件(6.9%)にとどまる。

Q11_1: 本人の活動に関する情報収集の状況

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
積極的にしている	73	6.9	38	8.6	35	5.7
なるべくしている	496	47.1	224	50.7	272	44.4
特にしていない	483	45.8	180	40.7	303	49.5
無回答	2	0.2	0	0.0	2	0.3
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

Q11_1 の設問で、情報収集を「積極的にしている」「なるべくしている」と回答した 569 件について、情報収集の仕方を聞いたところ、全体では「ふだんから管内の地域包括と連携している」が 420 件 (73.8%) で最も多く、次いで「地域の活動や認知症カフェ等に自分から出向くようにしている」が 376 件 (66.1%) の順になっている。大使設置有無別に見ても傾向の違いは認められない。

Q11_2: 情報収集の仕方 (複数回答)

区 分	全体 (n=569)		設置あり (n=262)		設置なし(n=307)	
	件数	%	件数	%	件数	%
① 市町村の取組みに関わっている本人がいる	153	26.9	70	26.7	83	27.0
② ふだんから管内の地域包括と情報連携している	420	73.8	195	74.4	225	73.3
③ ふだんから管内の介護事業者と情報連携している	247	43.4	89	34.0	158	51.5
④ 本人が関係する組織・団体等から情報を得ている	195	34.3	88	33.6	107	34.9
⑤ 地域の活動や認知症カフェ等に自分から出向くようにしている	376	66.1	162	61.8	214	69.7
⑥ 家族の会や関係団体から情報を得ている	262	46.0	122	46.6	140	45.6
母 数	569件		262件		307件	

※母数=Q11_1の設問で「1, 2,」を選択の569件

情報収集の仕方について、「その他」の自由回答には、・認知症カフェ・地域のグループ活動・普及啓発活動・本人ミーティング等の記述がある。

(2) 本人が参加・協力している活動

Q11_1 の設問で、情報収集を「積極的にしている」「なるべくしている」と回答した 569 件について、認知症の本人が参加している活動等を聞いたところ、全体では「地域のサークルやボランティア活動等」が 216 件 (38.0%) で最も多く、次いで「認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力」が 156 件 (27.4%)、「管内の認知症本人同士のネットワーク (づくり) への参加・協力」が 100 件 (17.6%) と続く。大使設置有無別に見ても傾向の違いは認められない。

Q11_3: 本人が参加している活動 (複数回答)

区 分	全体 (n=569)		設置あり (n=262)		設置なし(n=307)	
	件数	%	件数	%	件数	%
① 認知症施策を検討する委員会等に本人が参画している	25	4.4	14	5.3	11	3.6
② 認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	156	27.4	81	30.9	75	24.4
③ キャラバン・メイト活動への参加・協力	52	9.1	34	13.0	18	5.9
④ 認知症ピアサポート活動への参加・協力	74	13.0	41	15.6	33	10.7
⑤ 管内の認知症本人同士のネットワーク (づくり) への参加・協力	100	17.6	53	20.2	47	15.3
⑥ 認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任	19	3.3	10	3.8	9	2.9
⑦ 認知症関連事業・企画等へ意見やアイデアだし・ディスカッションなど	78	13.7	40	15.3	38	12.4
⑧ 官民共同への参加協力 (商品開発に関する意見だしなど)	9	1.6	6	2.3	3	1.0
⑨ ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	66	11.6	39	14.9	27	8.8
⑩ 地域のサークルやボランティア活動等	216	38.0	108	41.2	108	35.2
母 数	569件		262件		307件	

※母数=Q11_1の設問で「1, 2,」を選択の569件

(3) 本人発信活動等による認知症施策推進への好影響

Q11_1 の設問で、情報収集を「積極的にしている」「なるべくしている」と回答した 569 件について、本人発信活動等による認知症施策推進への好影響を担当者の印象で聞いたところ、全体では、「わからない」が 195 件で 34.3% と最も多く、次いで「大いにある」が 167 件 (29.3%) と「まあある」が 159 件 (27.9%) で共に 3 割程度となっている。

大使設置有無別に見ると、「設置あり」は「大いにある」が90件34.4%、「まあある」が73件(27.9%)で、合わせて62.2%が「ある」と感じており、「設置なし」に比べると9ポイント程度高い。

Q12_1: 本人発信・活動による認知症施策への好影響

区 分	全体 (n=569)		設置あり (n=262)		設置なし(n=307)	
	件数	%	件数	%	件数	%
大いにある	167	29.3	90	34.4	77	25.1
まあある	159	27.9	73	27.9	86	28.0
あまりない	20	3.5	6	2.3	14	4.6
全くない	3	0.5	2	0.8	1	0.3
わからない	195	34.3	80	30.5	115	37.5
無回答	25	4.4	11	4.2	14	4.6
合 計	569	100.0	262	100.0	307	100.0

※母数=Q11_1の設定で「1, 2」を選択の569件

さらに、Q11_1の設定で情報収集を「積極的にしている」と回答したグループ(73件)と、「なるべくしている」と回答したグループ(496件)に分けて、認知症施策推進への好影響を見たところ、「積極的にしている」グループは、「大いにある」が68.5%で、「なるべくしている」グループを大きく上回った。担当者が認知症の本人の情報を収集する行動と、認知症施策推進への影響を示唆している。

Q11本人活動の情報収集×Q12認知症施策推進への好影響

	全体	1大いにある	2まあある	3あまりない	4全くない	5わからない	6無回答
積極的にしている	73	50	14	0	1	8	0
	100.0	68.5	19.2	0.0	1.4	11.0	0.0
なるべくしている	496	117	145	20	2	187	25
	100.0	23.6	29.2	4.0	0.4	37.7	5.0
合 計	569	167	159	20	3	195	25
	100.0	29.3	27.9	3.5	0.5	34.3	4.4

※母数=Q11で「1, 2」を選択した569件を集計。

(4) 本人発信活動等が施策推進への好影響を与えている理由

認知症施策の推進において「好影響がある」と回答した理由を自由回答で聞いたところ、従来、施策を作成する上では気づけなかった認知症の本人の視点に気づき、施策づくり、ツールの開発、認知症観の転換に繋がっている等の記述が複数ある。

NO.	自由記述 (Q12_2)
1	認知症のネガティブな側面がフォーカスしてしまい、事業や個別支援展開についてもその視点から考えてしまっていた部分があったが、 <u>当事者の方の前向きなメッセージを受け取ることで、新たな視点から考えることができるようになった。</u>
2	<u>認知症の本人や家族の視点を取り入れた認知症ケアパスや、認知症の本人や家族・支援者の方々と共に認知症ケアパス別冊「いまのわたしで生きていく」を作成した。</u>
3	当事者が登壇した認知症シンポジウムには、400名以上の多くの市民が参加した。終了後のアンケートでは、 <u>登壇者への前向きなメッセージが多く寄せられた。参加者の6割以上が認知症のイメージが変わったと回答。</u> 認知症の理解が深まるとともに、市が掲げる「認知症とともに歩むまち」の実現に向けて、市民と一緒に考えていく、大きなきっかけとなった。
4	認知症ケアパス作成ミーティングに参画してもらった。本人らの意見を取り入れて、本当に <u>当事者が必要なもの</u> を作成していくための貴重な意見をいただいた。広報誌で本人の思いなど直筆のメッセージを掲載した。それを讀んだ市民から「 <u>認知症のイメージが変わった</u> 」「 <u>認知症を誤解していた</u> 」という感想をもらった。

5	認知症高齢者の方から話を聞く機会が少ないため、今後自分が認知症になった際どのように生活をすればいいのだろうと不安に感じている高齢者に対して、 <u>認知症になっても自分らしく生活することの大切さを身をもって知ることができる。</u>
6	条例の検討委員会に本人参画。 <u>意見をもとに「希望」の言葉が入った名称になり、条例の内容等にも大きな影響を受けた。</u> 講演や講座等において、本人が発信する機会を設け、本人の声や想いを通じて、区民の認知症観の転換に寄与している。
7	認知症ケアパスを作成する際、従来のものを見て、 <u>認知症の立場になった冊子に出来ているか等の意見をも</u> らえて、より良いものを作ることができたほか、認知症普及啓発月間のイベントにおいて、認知症の方が作った作品を展示することで、 <u>認知症に対するイメージを少しでも変えるきっかけになった。</u>
8	認知症ケアパスの改訂を行うにあたり、認知症の方に参画していただきました。その結果、 <u>認知症の方やそのご家族が必要としていた情報を掲載した認知症ケアパスを作成することができ、認知症の方ご本人の視点を重視した施策の推進を実施することができました。</u>
9	地域包括支援センターの運営協議会の委員として認知症の人に参加してもらったり、 <u>認知症ケアパスを認知症の人や家族の意見を直接聞きながら作り直す等、本人が実際に望んでいることを聞きながら施策に反映することができるようになった。</u>
10	認知症の本人の声から、 <u>本人発信する機会の大切さを関係者間で共有することができ、定期的に本人ミーティングを開催することにつながった。</u>
11	条例制定を検討する懇話会に参加していただき、 <u>本人の思いをたくさん聞くことでその思いを条例、介護保険事業計画（認知症施策推進計画）に反映することができ、大変よい影響がありました。</u>
12	認知症の本人が集まって行う <u>チームオレンジの活動チラシを、本人と一緒に作成した。文字の大きさやイラストのレイアウトなど、本人が見て見やすいものを作成することが出来た。</u>
13	認知症施策推進条例の策定ワーキングにて意見をもらい、 <u>条文や理念の参考にした。安心して外出したいという本人・家族の声から認知症賠償責任保険制度を新規事業として開始した。</u>
14	チームオレンジのメンバーとして、 <u>当事者に活動してもらっている。当事者目線での意見をいただくことで、他メンバーが活動に対してのイメージがつきやすく他メンバーから様々な案が出ているように感じた。</u>
15	認知症啓発フォーラムや認知症サポーターステップアップ講座等で本人から体験談や思いを話していただいているため、 <u>「自分も…」と次に話してくれる方がいる。そのため、住民にとって声を身近に感じる機会が多く、理解が広まっている。</u> 認知症カフェへの参加者が多いため、身近に認知症を感じている人が多いように思う。
16	<u>市民の認知症観の転換に繋がっている。市の認知症施策が本人の声に基づいたものに転換されつつあり、見直しや発想の転換に大きく繋がっている。</u>
17	今後の認知症施策を考えていく上で、 <u>認知症当事者の方のリアルな声（思いや考え）を聞くことで、こちら側の想像する一方的な支援ではなく、当事者と家族が本当に必要している施策を考えることが出来る。</u>
18	本人の思いを発信することで、 <u>認知症に対するマイナスのイメージの改善につながっている。</u> 地域で生活する本人の話聞くことで、 <u>自分事として捉えることができる。</u> 本人の活動は、 <u>本人の生きがいになっている。</u>
19	講演会を行い、 <u>認知症になってもできることがたくさんあること、本人は変わらないのに周りが変わるなど、本人からの言葉は説得力があった。</u>
20	認知症サポーターステップアップ講座や、 <u>認知症啓発イベントで本人に講話をしていただいた。</u> 参加者は熱心に聞いておられ、アンケートにも本人の声についての感想が多くみられた。具体的に本人と一緒にできることを考えるワークを通して、 <u>自分にもできることがあるのでは、という意識が芽生えるきっかけになった</u> と思われる。

2.4. 地域包括支援センターとの連携状況

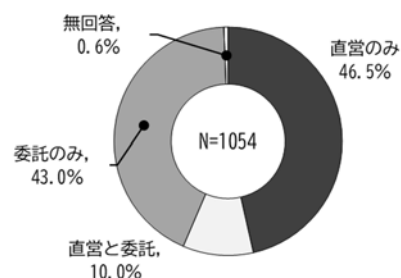
(1) 地域包括支援センターの運営形態

市町村における地域包括支援センターの運営形態を聞いたところ、「直営のみ」が490件（46.5%）で最も多く、次いで「委託のみ」が453件（43.0）、「直営と委託」が105件（10.0%）となっている。

Q14：地域包括支援センターの運営形態

区分	全体 (n=1,054)	
	件数	%
直営のみ	490	46.5
直営と委託	105	10.0
委託のみ	453	43.0
無回答	6	0.6
合計	1,054	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。



(2) 地域包括支援センターとの関わり

認知症の本人の活動情報等を知る上で連携が欠かせない地域包括支援センターとの関わりを聞いた。「積極的に関わっている」は581件（79.2%）で全体の8割程度を占めている。

Q15：市町村担当者と地域包括支援センターとの関わり

区分	全体 (n=734)	
	件数	%
積極的に関わっている	581	79.2
必要に応じて関わっている	150	20.4
あまり関わっていない	3	0.4
合計	734	100.0

※Q15の無回答320件を除外して集計。

(3) 地域包括支援センターとの連携状況

市町村と地域包括支援センターとの連携状況について、全体では、「ほとんどの地域包括とできている」が656件（89.9%）を占めており、回答のあった約9割で連携が出来ている。

一方、大使事業に関する地域包括支援センターへの説明・通知等の状況を聞いたところ、全体では「行っていない」が303件（41.5%）、「行っている」が269件（36.8%）で、状況はほぼ二分されている。

Q16：認知症施策全般に関する包括支援センターとの連携状況

区分	全体 (n=730)	
	件数	%
ほとんどの地域包括と出来ている	656	89.9
半数程度の地域包括と出来ている	26	3.6
一部の地域包括と出来ている	24	3.3
あまり出来ていない	24	3.3
合計	730	100.0

※Q15の無回答324件を除外して集計。

Q17_1：大使事業に関する包括支援センターへ説明・通知等

区分	全体 (n=730)	
	件数	%
積極的に行っている	65	8.9
行っている	269	36.8
行っていない	303	41.5
わからない	93	12.7
合計	730	100.0

※Q15の無回答324件を除外して集計。

(4) 大使事業に関する地域包括支援センターへの説明・通知等

Q17_1 の設問で、大使事業に関する説明・通知等を「積極的にやっている」「やっている」と回答した 334 件について、その具体的な内容を聞いたところ、全体では、「国の通知を共有している」が 228 件 (68.3%) で最も多く、他の項目は 3 割から 4 割でほぼ並んでいる。

一方、大使設置有無別に見ると、「設置あり」では、「大使の活動内容について説明している」や「都道府県としての対応方針を説明している」の項目で「未設置」よりも割合が高い。

なお、説明や通知内容に関する「その他」の自由回答は、・県からの通知 ・本人が参加する講演会等の情報 ・市独自の希望大使任命に関する相談 ・ピアサポート活動の説明 等の記述となっている。

Q17_2: 説明や通知内容 (複数回答)

区 分	全体 (n=334)		設置あり (n=215)		設置なし(n=119)	
	件数	%	件数	%	件数	%
①国の通知等を共有している	228	68.3	133	61.9	95	79.8
②都道府県としての対応方針を説明している	112	33.5	84	39.1	28	23.5
③国や他都道府県の任命状況について紹介している	127	38.0	87	40.5	40	33.6
④大使の活動内容について説明している	150	44.9	110	51.2	40	33.6
⑤本人の声を施策に反映することの意義を説明している	136	40.7	89	41.4	47	39.5
⑥大使活動を通じて市町村での本人発信や社会参画につなげていくことを説明している	75	22.5	50	23.3	25	21.0
母 数	334		215		119	

※母数=Q17_1の設問で「1, 2,」を選択の334件

(5) 本人発信の意義に関する理解の状況

本人発信の意義について、所管する地域包括支援センターの理解の状況を担当者の印象として聞いたところ、全体では「多くが理解している」が 555 件 (52.7%) で最も多く、「一部が理解している」が 303 件 (28.7%) となっている。大使設置有無別に見ても傾向の違いは認められない。

Q18: 本人発信に関する地域包括支援センターの理解状況

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
多くが理解している	555	52.7	247	55.9	308	50.3
一部が理解している	303	28.7	127	28.7	176	28.8
理解している人は少ない	72	6.8	24	5.4	48	7.8
わからない	120	11.4	43	9.7	77	12.6
無回答	4	0.4	1	0.2	3	0.5
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

2.5.本人発信支援について

(1) 本人発信支援の意義に関する回答者意見

本人発信支援の重要性について、担当者自身がどのように考えているかを聞いたところ、全体では、「大いに思う」が 550 件 (52.2%) で最も多く、「まあ思う」の 398 件 (37.8%) と合わせて 9 割が重要と考えている。一方、大使設置有無別に「大いに思う」の割合を見ると、「設置」は 58.4%、「未設置」は 47.7% で、設置の方が 10 ポイント程度高くなっている。

Q20_1: 本人発信支援の重要性に関する回答者の考え

区分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
大いに思う	550	52.2	258	58.4	292	47.7
まあ思う	398	37.8	149	33.7	249	40.7
あまり思わない	29	2.8	11	2.5	18	2.9
全く思わない	1	0.1	1	0.2	0	0.0
わからない	74	7.0	23	5.2	51	8.3
無回答	2	0.2	0	0.0	2	0.3
合計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

また、Q20「本人発信支援の重要性」の担当者の意識別に Q11「本人活動の情報収集」の積極度を見ると、重要と「大いに思う」グループでは、本人活動の情報収集を「積極的にしている」が 12.1%で、その他のグループよりも 10 ポイント以上高い。また情報収集を「特にしていない」の割合は、「まあ思う」のグループが 54.4%、「思わない・分からない」のグループが 73.1%で、「大いに思う」のグループとは大きな差がある。本人発信支援の重要度に関する担当者の意識により、本人活動の情報収集で行動の差がある。

Q20本人発信支援の重要性（担当者の意識）×Q11本人活動の情報収集のレベル

Q20本人発信支援の重要性	Q11本人活動の情報収集のレベル				
	全体	積極的にしている	なるべくしている	特にしていない	無回答
大いに思う	552	67	294	190	1
	100.0	12.1	53.3	34.4	0.2
まあ思う	398	6	174	217	1
	100.0	1.5	43.7	54.5	0.3
思わない・分からない	104		28	76	
	100.0	0.0	26.9	73.1	0.0
合計	1054	73	496	483	2
	100.0	6.9	47.1	45.8	0.2

(2) 本人発信支援に関する組織内の理解

本人発信支援の重要性について、組織内の理解の状況を担当者の印象で聞いたところ、全体では、「多くが理解している」が 442 件 (41.9%)、「一部が理解している」が 367 件 (34.8%) となっている。

大使設置有無別に見ると、「設置あり」では「多くが理解している」の割合が「設置なし」よりも若干高い。

Q21: 本人発信の意義について組織内の理解状況

区分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
多くが理解している	442	41.9	200	45.2	242	39.5
一部が理解している	367	34.8	158	35.7	209	34.2
どちらとも言えない	183	17.4	59	13.3	124	20.3
理解している人は少ない	58	5.5	24	5.4	34	5.6
無回答	4	0.4	1	0.2	3	0.5
合計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

(3) 本人の声や意見を聴く場所について

本人の声や意見を聴く上で協力が必要と思う人や場所について、担当者の意識を聞いたところ、いずれの項目も高い割合となっており、「地域包括支援センター」1008件（95.6%）、「介護支援専門員」982件（93.2%）、「認知症カフェ」948件（89.9%）、「家族」974件（92.4%）、「介護サービス事業所」897件（84.8%）、「医療機関」849件（80.6%）等の項目で8割以上となっている。

Q19_1: 本人の声等を聴くために協力して欲しい人や場所（複数回答）

区分	全体 (n=1,054)	
	件数	%
地域包括支援センター	1008	95.6
介護支援専門員	982	93.2
介護サービス事業所	894	84.8
医療機関	849	80.6
本人ミーティング	772	73.2
認知症カフェ	948	89.9
地域のサロン	732	69.4
民生委員	693	65.7
家族	974	92.4
その他	101	9.6
母数	1,054	

なお、本人の声や意見を聴く上で協力が必要と思う人や場所について、選択肢以外の具体的な人・場所を自由回答で聞いたところ、以下のような内容が挙げられた。

Q4_19 (その他自由記述)		
1 本人	11 社会福祉協議会	22 スーパー/コンビニ
2 家族の会	12 インフォーマルサービス	23 薬局
3 家族会	13 公民館/コミュニティセンター	24 ガソリンスタンド
4 キャラバンメイト	14 児童・学生などの若い世代	25 地域の商業施設
5 ボランティア	15 障がい者相談支援センター	26 公園
6 チームオレンジ	16 庁内（関係各課）	27 交番
7 生活支援コーディネーター	17 福祉課	28 図書館
8 若年性認知症コーディネーター	18 金融機関	29 地域住民
9 認知症地域支援推進員	19 銀行、郵便局	30 地域の団体
10 介護事業所	20 民間企業	31 自治会及び老人会

一方、これらの人や場所に対して、本人の声や意見を聴く目的や必要性などの共有状況を聞いたところ、「一部している」は772件で約7割となっているが、「している」との回答は141件で13.4%にとどまっている。また、「していない」との回答も183件（17.4%）となっている。

Q19_2: 目的や必要性などの共有状況

区分	全体 (n=1,054)	
	件数	%
している	141	13.4
一部している	722	68.5
していない	183	17.4
無回答	8	0.8
合計	1,054	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

Q19_2 の設問で、目的や必要性などの共有を「していない」と回答した 183 件について、その理由を聞いたところ、「どのように共有すればよいかわからない」が 106 件 (57.9%) で最も多く、「自分自身の理解が足りない・説明できない」も 93 件で 5 割程度に該当する。

Q19_3: 共有をしていない理由 (複数回答)

区 分	全体 (n=183)	
	件数	%
必要性を感じていない/意識していなかった	46	25.1
自分自身の理解が足りない、説明できない	93	50.8
忙しくて時間がない、先方の担当者に会えない	56	30.6
どのように共有すればよいかわからない	106	57.9
先方の担当者が、認知症の人は話せないと思い込んでいる	9	4.9
その他	20	10.9
母 数	183	

※母数=Q19_3の設問で「3」を選択の183件

共有していない理由は、「未だ準備段階である」との内容が多く、その他では「認知症への偏見に関すること」、「担当者自身の理解に関わること」などの記述がある。

NO.	自由記述 (Q4_19_3)
1	必要性は感じており、今後取り組んでいく予定。
2	令和6年度に協力していただきたい人や機関に協力を求めて、意見を集約する事業を計画している
3	具体的に認知症の人本人の声を拾い出す体制が整っていない。
4	本人発信の機会がけられていないので、共有もしていない。
5	まだ施策づくりの動きをしていないため
6	本人の声や意見を聞くことの必要性は理解しているが、実際に活動をするまでに至っていない。
7	認知症に対する偏見がまだ根強くあり、本人・家族が認知症であることを公にしにくい地域性。本人の前で認知症の話をする 것도躊躇する雰囲気があり、本人発信の場を設けることができていない。
8	本人・家族が知られたくないという風潮が強い。
9	どのような場を設ければよいのか、どのように当事者の方を発掘していけばいいのか考えあぐねている。
10	たとえ関係者から意見を聞いたとしても、その後、どのように施策展開に繋げていけばよいか分からない。

(4) 市町村における本人発信支援の状況

市町村における本人発信支援の取組状況を聞いたところ、全体では「取り組んでいない」が 621 件 (58.9%) で最も多く、「まあ取り組んでいる」が 339 件 (32.2%) となっている。

大使設置有無別で見ると、「設置あり」では「積極的に取り組んでいる」が 35 件 (7.9%)、「まあ取り組んでいる」が 166 件 (37.6%) で、合わせて 45.5% で取組があると回答しており、「設置なし」よりも 12 ポイント程度高い。

Q30: 本人発信支援の取組み状況

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし (n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
積極的に取り組んでいる	66	6.3	35	7.9	31	5.1
まあ取り組んでいる	339	32.2	166	37.6	172	28.1
取り組んでいない	621	58.9	232	52.5	389	63.6
無回答	28	2.7	9	2.0	19	3.1
合 計	1,054	100.0	442	100.0	611	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

また、Q20「本人発信支援の重要性」の担当者の意識別に、Q30「本人発信支援の取組状況」を見たところ、重要性を「大いに思う」グループでは、「積極的に取り組んでいる」と「まあ取り組んでいる」の割合が、それ以外のグループよりも大幅に高い。

Q20本人発信支援の重要性（担当者の意識）×Q30本人発信支援の取組み状況

Q20本人発信支援の重要性	Q30本人発信支援の取組み状況				
	全体	積極的に取り組んでいる	まあ取り組んでいる	取り組んでいない	無回答
大いに思う	552	63	226	251	12
	100.0	11.4	40.9	45.5	2.2
まあ思う	398	3	100	280	15
	100.0	0.8	25.1	70.4	3.8
あまり思わない	29	0	7	22	0
	100.0	0.0	24.1	75.9	0.0
全く思わない	1	0	1	0	
	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0
わからない	74	0	6	67	1
	100.0	0.0	8.1	90.5	1.4
合計	1054	66	340	620	28
	100.0	6.3	32.3	58.8	2.7

さらに、Q21「組織内の理解状況」別に、Q30「本人発信支援の取組状況」を見たところ、「多くが理解している」グループでは、「積極的に取り組んでいる」と「まあ取り組んでいる」の割合が、それ以外のグループよりも高くなっている。

Q21組織内の理解状況×Q30本人発信支援の取組み状況

Q21組織内の理解状況	Q30本人発信支援の取組み状況				
	全体	積極的に取り組んでいる	まあ取り組んでいる	取り組んでいない	無回答
多くが理解している	442	53	180	198	11
	100.0	12.0	40.7	44.8	2.5
一部が理解している	367	13	120	222	12
	100.0	3.5	32.7	60.5	3.3
どちらとも言えない	183	0	31	149	3
	100.0	0.0	16.9	81.4	1.6
理解している人は少ない	58	0	6	51	1
	100.0	0.0	10.3	87.9	1.7
無回答	4	0	2	1	1
	100.0	0.0	50.0	25.0	25.0
合計	1054	66	339	621	28
	100.0	6.3	32.2	58.9	2.7

(5) 本人発信支援による先入観の払拭について

本人からの発信が「認知症や認知症の人への先入観」の払拭につながる効果について、担当者の考えを聞いたところ、全体では「大いに思う」466件（44.2%）、「まあ思う」476件（45.2%）で、合わせて9割程度で肯定的な意見となっている。大使設置有無別で見ても、傾向の差は認められない。

Q22：本人発信による先入観払拭の効果

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
大いに思う	466	44.2	206	46.6	260	42.5
まあ思う	476	45.2	189	42.8	287	46.9
あまり思わない	40	3.8	18	4.1	22	3.6
全く思わない	5	0.5	3	0.7	2	0.3
わからない	62	5.9	24	5.4	38	6.2
無回答	5	0.5	2	0.5	3	0.5
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

(6) 基本法を活かした市町村計画策定の動き

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を市町村の計画づくり等に活かす動きを聞いたところ、全体では「計画への反映や検討の動きはない」が401件(38.0%)で最も多く、「具体的ではないが、反映の検討を始めている」が387件(36.7%)となっている。「市町村の計画に具体的に反映を始めている」は187件(17.7%)にとどまる。大使設置有無別で見ても、傾向に大きな差はない。

Q29：認知症基本法を市町村計画作りに活かす動き

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
市町村の計画に具体的に反映	187	17.7	101	22.9	86	14.1
具体的ではないが、反映の検討	387	36.7	158	35.7	229	37.4
計画への反映や検討の動きはない	401	38.0	159	36.0	242	39.5
その他	67	6.4	17	3.8	50	8.2
無回答	12	1.1	7	1.6	5	0.8
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

一方、Q20「本人発信支援の重要性」の担当者の意識別に、Q29「基本法を市町村計画に活かす動き」を見たところ、「大いに思う」のグループでは、「反映を始めている」と「検討を始めている」の割合がそれ以外のグループよりも高い。

Q20本人発信支援の重要性（担当者の意識）×Q29基本法を活かした市町村計画の作成

Q20本人発信支援の重要性	Q29基本法を活かした市町村計画の作成					
	全体	反映を始めている	検討を始めている	動きはない	その他	無回答
大いに思う	552	121	226	171	30	4
	100.0	21.9	40.9	31.0	5.4	0.7
まあ思う	398	61	140	160	30	7
	100.0	15.3	35.2	40.2	7.5	1.8
あまり思わない	29	2	6	19	1	1
	100.0	6.9	20.7	65.5	3.4	3.4
全く思わない	1	1	0	0	0	0
	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
わからない	74	2	15	51	6	0
	100.0	2.7	20.3	68.9	8.1	0.0
合 計	1054	187	387	401	67	12
	100.0	17.7	36.7	38.0	6.4	1.1

2.6. 担当者の意識と課題

(1) 担当者と本人との関わり

担当者と認知症の本人との関わり状況について聞いたところ、全体では「必要なときに関わっている」が658件(62.4%)で最も多く、「あまり関わっていない」157件(14.9%)と「積極的に関わっている」156件(14.8%)は、ほぼ同じ割合になっている。大使設置有無別で見ても、傾向に大きな差はない。

Q23: 担当者と本人との関わり

区分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
積極的に関わっている	156	14.8	67	15.2	89	14.5
必要なときに関わっている	658	62.4	259	58.6	399	65.2
あまり関わっていない	157	14.9	78	17.6	79	12.9
関わっていない	78	7.4	35	7.9	43	7.0
無回答	5	0.5	3	0.7	2	0.3
合計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

一方、Q11の「本人活動の情報収集の積極度別」にQ23「担当者と本人との関わり」を見ると、情報収集を積極的に行っているグループでは「積極的に関わっている」とする割合が、それ以外のグループよりも大幅に高くなっている。

Q11本人活動の情報収集状況×Q23担当者と本人との関わり

Q11本人活動の情報収集	Q23担当者と本人との関わり					
	全体	積極的に関わっている	必要なときに関わっている	あまり関わっていない	関わっていない	無回答
積極的にしている	73	36	32	4	1	0
	100.0	49.3	43.8	5.5	1.4	0.0
なるべくしている	496	79	325	74	18	0
	100.0	15.9	65.5	14.9	3.6	0.0
特にしていない	483	41	299	79	59	5
	100.0	8.5	61.9	16.4	12.2	1.0
無回答	2	0	2	0	0	0
	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
合計	1054	156	658	157	78	5
	100.0	14.8	62.4	14.9	7.4	0.5

担当者と認知症の本人との関わり場面を聞いたところ、全体では、「認知症の人と日常的に話をしたり、関わる機会がある」が519件(49.2%)、「管内市町村の本人と直接関わりがある」が430件(40.8%)、「上記以外で認知症の人と関わる機会がある」が411件(39.0%)の順になっている。大使設置有無別で見ると、「都道府県が任命した大使の活動やイベント等に参加したことがある」119件(26.9%)、「都道府県が任命した大使と直接的な関わりがある」51件(11.5%)の項目で、「設置あり」の割合が高い。

Q24: 本人との関わり (複数回答)

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
都道府県が任命した大使と直接的な関わりがある	52	4.9	51	11.5	1	0.2
都道府県が任命した大使の活動やイベント等に参加したことがある	150	14.2	119	26.9	31	5.1
管内市町村の本人と直接的なかかわりがある	430	40.8	181	41.0	248	40.5
管内市町村の本人の活動やイベントに参加したことがある	250	23.7	113	25.6	136	22.2
認知症の人と日常的に話をしたり、関わる機会がある	519	49.2	205	46.4	313	51.1
上記以外で認知症の人と関わる機会がある	411	39.0	163	36.9	248	40.5
認知症の人と話をしたり、関る機会はない	75	7.1	30	6.8	45	7.4
母 数	1,054		442		612	

(2) 本人発信支援を通じた担当者の気づき

認知症の人との関わりや本人発信支援を通じて、担当者自身の気づきや感想等を聞いたところ、全体では、「本人の声は、他の認知症関連事業（施策）と連動するべき取組だと思う」が626件（59.4%）で最も多く、次いで「本人発信支援の意義が理解できた」489件（46.4%）、「自分自身の認知症観が変わった」445件（42.2%）等の項目で割合が高い。

一方、大使設置有無別で見ると、「設置あり」では「本人の声は、他の認知症関連事業（施策）と連動するべき取組だと思う」（62.0%）、「本人発信支援の意義が理解できた」（53.2%）、「自分自身の認知症観が変わった」（47.3%）、「前向きになる本人や家族に出会えた」（45.5%）の項目で、「未設置」よりも高い割合になっている。

Q25: 認知症の人との関わりや本人発信支援を通じた気づき・感想

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし	
	件数	%	件数	%	件数	%
自分自身の認知症観が変わった	445	42.2	209	47.3	236	38.6
前向きになる本人や家族に出会えた	400	38.0	201	45.5	198	32.4
本人発信支援の意義が理解できた	489	46.4	235	53.2	253	41.3
本人の声は、他の認知症関連事業（施策）と連動するべき取組みだと思う	626	59.4	274	62.0	351	57.4
本人発信や大使事業の趣旨について、地域包括等に説明しやすい資材が欲しい	348	33.0	139	31.4	209	34.2
大使の任命は、都道府県だけでなく市町村単位の任命でも良いと思う	98	9.3	50	11.3	48	7.8
特に感想や意見はない（本人との関わり等がない）	92	8.7	33	7.5	59	9.6
母 数	1,054		442		612	

(3) 担当者の意識を変えた出来事

本人発信や活動を通じて担当者自身が認知症観を変えた出来事（場面等）の自由回答は以下の通り（抜粋）。

NO.	自由記述 (Q13)
1	認知症初期でおひとり暮らしの女性、長年、料理のお店をされていた方。何年も料理をされなくなっていた。一緒に料理をする集まりで、少しの声掛けと切り方を示すと、以前のプロの手さばきで上手に刻んだり味付けの方法や、盛り付けの伝授をしてくださった。認知症になったら、何もできないのではなく、少しの手助けで、今まで得意とされていたこと、生きがい、楽しみが続けていけることができるのを改めて感じた。
2	若年性認知症の当事者が、陶芸教室等の行事を企画、シンポジウム登壇やFM やまもと（ラジオ）出演、さらに地域の清掃活動に参加するなど活動の幅がひろがっている。さまざまな場面で当事者が楽しく生き生きと活動している様子を拝見し、認知症への偏見や誤解をなくしたいという思いが強くなった。
3	「認知症になったからといって私という人間が変わるわけではない。今までと何も変わらない。」といった内容の当事者の声を聞き、力強いポジティブな印象を受けました。以来ポジティブな内容や方法で認知症に関

	する普及啓発をしていくことを心がけるようになりました。
4	若年性認知症の本人ミーティングに参加したことがある。それまで、認知症に対する認識は「怒りっぽい」や「一度なってしまうたら、何もすることが出来なくなる」などネガティブなイメージしかなかった。しかし、本人ミーティングに参加した際に、楽しそうに活動する様子を見て「認知症になったとしても、支援があれば幸せに過ごすことができる」と認識を改めるきっかけとなった。
5	認知症当事者の方が1人で県外まで足を運んでいることを知って、支援者が本人の思考力や行動力を奪っている可能性があるということに気づいた。
6	「認知症の診断を受けると、周囲の対応は大きく変わるが、本人の生活は今までと変わらない。」と本人から言われた時に、認知症に対して、無意識の偏見を持っていることに気づいた。
7	カフェに携わる中で、認知症になっても、もともと得意なこと、昔からやっていること、好きなことができる。すべてのことができなくなるわけではないので、できないことのサポートをする（個別性）ことを大切にしたい。
8	認知症当事者の方が自ら工夫して前向きに自分らしく生活していることを聞き、認知症の自分を受け入れること、そのためには発症前から認知症の心構えをしておくことが重要であるということに改めて実感した。
9	「失敗しないように周りが事前に手を出し過ぎることで、失敗する体験ごと奪われている」という当事者のお話を聞いて、失敗してもやり直す、もっとよく取り組める可能性すらも奪っているんだと感じた。過剰に段取りをするのではなく、あくまで普通を意識するようになった。
10	若年性認知症の方がチームオレンジの活動として傾聴ボランティアを実施してくれているが、普段落ち着きのない方が傾聴を受けた日は落ち着いて生活しているという事例を聞き、専門職による関わりではなく本人の活動ならではの効果かと感じた。
11	本人から、「支援者たちは面談中に本人ではなく、家族に向かって話している」との発言を聞いて、自分自身の対応はどうであったか、振り返るきっかけになった。
12	本人の「できる事を奪わないで」という発信から、支援者が良かれと思って行った支援が、本人のできる事を奪ったり、本人の状態を悪化させてしまう可能性があることに気が付いた。本人と関わる時は、本人の気持ちを聞いて、伴走した関わりをしていきたいと思った。
13	本市で実施している「本人ミーティング」で、参加されている認知症の方から、他の参加者に対して「差別を受けたことはあるか」と問いかける場面がありました。その間に対して、「差別ではなく、社会と距離があって誤解されていると思うことはある」と回答されていました。この誤解は、認知症の方の活動等を通じて、解消できるものであると強く感じ、本人発信支援の重要性を再認識しました。
14	認知症ご本人やご家族の発信したものや、認知症ご本人のやりたいこと、役割として行っている活動を見学することで、認知症になったらすぐに介護保険認定や、施設への入所というイメージから、認知症ご本人やご家族の意志で、自分らしい活躍をすることができる、と意識が変わった。
15	認知症の本人と日常的にお会いする中で「支援が必要な人」から「困難な状況に立ち向かいながらも自身の残存する能力を活かす、頼りになる人」と感じるようになった。認知症の人の本人発信支援は、認知症の人やその家族だけでなく、誰にとっても励みになる力強い声になる、と大きく意識が変わった。
16	ある認知症高齢者宅に訪問した時。前日に高齢者サロンに行ったことはいつものようにすっかり忘れていただろうという先入観でいたが、話をしてみると、前日サロンで作って来たものやその時の状況などを説明してくれた。印象に残っていることは覚えていることもあり、認知症だから全て忘れてしまうという先入観は持ていけないのだと反省した。
17	令枝3年度にタレントの蛭子能収氏を招待し、講演いただいた。事前打合せの際に、マネージャーから蛭子氏が通い慣れた撮影現場で撮影を終えた後、「おれ、認知症治ったかも」と言ったエピソードを話してくれた。認知症になったとしても、周囲が認知症だからと特別な対応をせず、これまでと同じように接することで本人

	が安心して過ごすことができることを学んだ。
18	当事者の希望を推測して施策を進める従前の取り組みと違い、当事者の希望を聞きながら進める取り組みは、支援者、地域への取り組みの必要性を説明しやすいためか、心強さがある。当事者との話し合いを通じて、自身の認知症の人に対する思い込みにも何度も気付く。また、「認知症の人」ではなく、その人として尊敬、尊重するということを、体験として学ぶことができています。
19	本人発信の講演会に参加した時に、支援者がイメージしていることには想像も付かなかった思いや苦悩などを聞いた時に、当事者の声が如何に重要なかと自分の意識が変わった。それは当事者ならずとも、本人を取り巻く家族の活動などでも同様と考えている。
20	認知症カフェに参加し、本人から編み物を教えていただいた。自分だけでやっていたときより、私に教えていた時の方が生き生きとしているように感じた（普段からみているスタッフもそう感じたとのこと）。認知症の方に対してどこかで「支援される方」と思っていた自分に気づいた。お互いに支え合う方であり、また誰もが何かを教える・伝えることにやりがいを感じるのだと思った。
21	その人が得意なことなどを伺い、自分と何も変わらないんだと感ずることができた。家族の方が仰った「できなくなったこと以外はできる」という言葉に、はっとした。
22	認知症の本人の方々の発想の豊かさに気付いた。また、何か出来るとことをしたい、人の役に立ちたいといった気持ちが強く、チームオレンジの活動をして、認知症の本人の活動している姿に刺激され、更に他の人も自己表現が豊かになったり、積極的に活動されるなど、活動が広がっていけることが良く分かった。
23	ご本人に「今後のやりたいことの希望等」を聞いた際、しっかり答えてくれた。本人自身もやりたいことをしっかり持っているんだと改めて感じさせてもらった。
24	認知症の人と実際に関わる中で、認知症の〇〇さん、ではなくひとりの〇〇さんとして接する心構えがより腑に落ちるようになった。
25	実際に会話をし、一緒に時間を過ごすことで自分と変わらないということを自然と感じた。そのため、認知症に関する企画や啓発活動には本人と住民の皆さんが会話をする機会を積極的に持つようになっている。
26	沢山ありますが、今年度の印象的だったことは、本人に周囲に伝えたいことを聞いたときに、「認知症の人をどうするかではなく、自分がなったらどうするかを考えて欲しい」と話した場面があった。また、認知症バリアフリーに関連するインタビューの中で、「認知症の人にとって～」と本人に質問をしたときに、「そういう質問自体がおかしい、認知症の人を区別しているのでは」と意見をもらい、自分自身の先入観に改めて気づききっかけになった。そして、認知症の人のことを見続けるのではなく、脇に立ちともに、目指すべき方向性を一緒に見据えていく関係性を再確認した。
27	若年性当事者の方が、「何の支援がほしいか」という問いに対して、「特に何も困っていないので大丈夫です。困ったら自分で言います。」という発言に対し、自分たちが支援をしなくてはいけない、という考えに囚われすぎていたと気づき、今ある支援と当事者の希望される支援の違いはこういったところが原因なのだと感じた。
28	4月の異動に伴い、認知症施策に初めて携わることになりました。初めて参加した介護者の集いで、参加されていたご本人が「私、今でも上手に花を咲かせられるのよ」とお話しされた時の笑顔は印象的でした。私自身、認知症になるとできなくなることばかりと決めつけていたとハッとした瞬間でした。
29	認知症の人にお話を伺う機会があり、長い人生経験に裏打ちされた貴重なお話をいただいたことに驚いた。この時、自分としては意識していなかったが、心のどこかに「認知症の人は話せないのではないか」という偏見があったことに気付いた。
30	「自分のことを理解してくれる人に支えてもらいながら、自分の事は自分で決めたい」「認知症になった自分だからこそ誰かの力になりたい」などの思いを受け取り、「認知症の人は支援されるだけの人ではない」「それぞれ役割がありその役割を十分に発揮することが必要」と自身に刻み込まれた。

(4) 本人発信支援における担当者の不安・悩み

担当者が本人発信支援に取り組む上での不安や悩み等を聞いたところ、全体では、「本人発信支援の進め方がよくわからない」が637件で全体の6割に該当する。次いで「やるが多すぎて本人発信支援にまで手が回らない」が546件(51.8%)、「認知症の人と出会う(知り合う)ことが難しい」が303件(28.7%)等となっている。

大設置有無別に見ると、「設置あり」では「認知症の人と出会う(知り合う)ことが難しい」(35.5%)の割合が「設置なし」よりも10ポイント以上高い。

Q26: 本人発信支援に取り組むうえでの不安や悩み(複数回答)

区分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし	
	件数	%	件数	%	件数	%
本人発信支援の進め方がよくわからない	637	60.4	255	57.7	382	62.4
本人発信支援の必要性をあまり感じない	25	2.4	6	1.4	19	3.1
認知症の人と出会う(知り合う)ことが難しい	303	28.7	157	35.5	146	23.9
認知症の人との関わり方がよくわからない	41	3.9	18	4.1	23	3.8
やるが多すぎて本人発信支援にまで手が回らない	546	51.8	213	48.2	333	54.4
本人の声を聴くことについて、上司や関係各部の関心が低い	32	3.0	16	3.6	16	2.6
本人の声を聴くことについて、市町村自体の関心が低い	75	7.1	28	6.3	47	7.7
本人の声を聴くことについて、地域包括の関心が低い	35	3.3	16	3.6	19	3.1
母数	1,054		442		612	

認知症施策の担当者として抱えている不安や課題についての主な自由回答は以下の通り。認知症への偏見や本人発信ができる人がいないことに関するコメントが多くを占める。(抜粋)。

NO.	自由記述 (Q29)
1	認知症であることを隠したい風潮が根強く残っているため、発信して下さる本人さんがなかなかいない。
2	本人発信の大切さは理解しているが、認知症の偏見などを考えると、場面は慎重に考える必要があると思う。
3	狭い地域のため、認知症を公言することに抵抗がある人が多い。地域として古い認知症観の払拭や認知症の正しい理解の促進を進めることが必要と考える
4	認知症を本人自身が受け入れていないケースに関わることがほとんどで、本人発信してくれる人に出会えていない。
5	本人の声を聴いた上でそれを活かしていくには、他部署との連携が不可欠である。
6	本人ミーティングを実施しても本人自身が個人的にやりたいことの聞き取り・実現はできるが、自治体の施策に反映できるような本人の意見を引き出していくことは難しい。
7	認知症に対する偏見が大きく、本人が発信する立場となる不安が強いと感じる。その不安を払拭できるまでの支援や体制構築ができていない。
8	小規模自治体故? 本人発信するといった地域性にないと感じている。本人発信の必要性は大いに感じており、何かきっかけになることがあれば常に模索している。
9	地域では、まだ古い認知症への考え方があり、なかなか認知症であることをオープンに語る事ができる人が少ない状況がある。
10	本人発信の前提には、認知症当事者の病識と、家族等の理解が必要であるが、それらの条件がそろわないことも多い。

(5) 本人発信支援に関する情報連携の状況

本人発信支援に関連して、他の市町村担当者と情報交換や相談をしたことがあるかについて、全体では、「ない」が768件(72.9%)、「ある」が281件(26.7%)となっている。大使設置有無別に見ても、傾向に大きな違いは無い。

Q27_1:他の市町村担当者ととの情報交換や相談

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
ある	281	26.7	125	28.3	156	25.5
ない	768	72.9	314	71.0	454	74.2
無回答	5	0.5	3	0.7	2	0.3
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

※小数点以下第2位を四捨五入しているため、構成比の合計は100にならない。

また、Q20「本人発信支援の重要性」に関する担当者の意識別に、Q27_1「他の市町村担当者ととの情報交換や相談」の状況を見ると、本人発信支援の重要性を「大いに思う」グループは、その他のグループよりも「他の市町村担当者ととの情報交換や相談」が「ある」とする割合が若干高い。

Q20本人発信支援の重要性(担当者の意識) × Q27_1他の市町村担当者ととの情報交換や相談

Q20本人発信支援の重要性	Q27_1他の市町村担当者ととの情報交換や相談			
	全体	ある	ない	無回答
大いに思う	552	198	352	2
	100.0	35.9	63.8	0.4
まあ思う	398	73	322	3
	100.0	18.3	80.9	0.8
あまり思わない	29	6	23	0
	100.0	20.7	79.3	0.0
全く思わない	1	0	1	0
	74.0	0.0	100.0	0.0
わからない	74	4	70	0
	100.0	5.4	94.6	0.0
合 計	1054	281	768	5
	100.0	26.7	72.9	0.5

本人発信支援に関連して、都道府県担当者と情報交換や相談をしたことがあるかについて、全体では、「ない」が871件(82.6%)、「ある」が177件(16.8%)となっている。大使設置有無別に見ると、「設置あり」では「ある」が23.5%で、「設置なし」の11.9%に比べて10ポイント以上高い。大使に任命プロセスや大使事業に関連して、市町村との連携が密になっている可能性も考えられる。

Q27_2:都道府県担当者ととの情報交換や相談

区 分	全体 (n=1,054)		設置あり (n=442)		設置なし(n=612)	
	件数	%	件数	%	件数	%
ある	177	16.8	104	23.5	73	11.9
ない	871	82.6	335	75.8	536	87.6
無回答	6	0.6	3	0.7	3	0.5
合 計	1,054	100.0	442	100.0	612	100.0

3. インタビュー調査結果

3.1. 希望大使（本人）及び支援者（パートナー）

インタビューは、①地域版希望大使及び支援者への個別インタビューと②全国版希望大使及び支援者への合同インタビューを実施した。

■ 個別インタビュー

対象者：とくしま希望大使、あきたオレンジ大使、やまぐち希望大使
及び希望大使の支援者（パートナー）の皆さん
※各県の希望大使1名と支援者1名が同席する形で実施。

方法：訪問による聞き取り

内容：診断された当初の状況、仕事や職場の状況、周囲との関係、大使活動について、
支援者としての思い 等

■ 合同インタビュー

対象者：全国版希望大使（6名）及び支援者（6名）

方法：都内会議室におけるミーティング方式

内容：

[全国希望大使]

- 今後の大使活動でしたいこと・アイデア
- どんな人に大使の仲間になってほしいか
- 支援者(パートナー)に求めたいこと
- 地域で変わってほしいこと

[支援者]

- 支援者（パートナー）とはどのような存在か 他

3.1.1. 個別インタビュー結果

以下ではインタビューにおける本人の思いを尊重しつつ、カテゴリごとに聞き取り内容を箇条書きにまとめた（過去における本人の発言、出来事等、同席した支援者から補足・説明があった情報も本人の言葉と整理した）。また、支援者の心情に関する情報は「支援者」に分けて記載した。

① インタビュー 1 人目

○ 診断された当初の様子

- いくつかは周りの人にも分かることなので、さっさと行ってしまおうという気持ちで、SNS を使って認知症になったことを伝えた。みんな衝撃を受けていた。

(支援者)

- 認知症だとわかってすぐに、「これはもう自分一人で抱え込むことではない」と思った。経済的なことも含めて一気に全てのことが自分に押しかかってきたが、自分が潰れるわけにはいかないの、私もカミングアウトすることにした。認知症を隠すという事は全く考えていなかった。
- 周りに認知症のことを伝えたことで嫌な思いをしたことは全くない。皆、「何かあった時には…」と受け止めてくれたので、知ってもらおうと安心だと感じた。
- 誰か 1 人に相談すると、その人にとっては重すぎると思うので、いろいろな人に少しずつ気持ちを聞いてもらう方がいいと思う。

○ 仕事や職場について

- 診断後、職場の方では「今、仕事を辞めたら立ち行かなくなる」ということを理解し、どのような仕事なら出来るかを一緒に考えてくれた。また、車の通勤が難しくなったので、自転車で通える別の事務所へ異動させてもらった。
- 元々話をする事が好きで、イベント等を成功させた実績もあったため、得意分野を活かした仕事に就かせてもらうことができた。
- 最近は肉体労働をしているわけでもないのに、仕事の日には身体が非常に疲れる。寝る時間がとても早くなった。

(支援者)

- 職場には時々面談に行き、病気の経過や「今、何が出来るか」という話をしてくる。出来ることをやり続ける事がとても大事だと思っている。
- ただ、「今までやってきたことを今まで通りやり続ける」というのはとても大変な事だと思う。脳が疲れるせい、本人が無理をしているのが分かる。

○ 周囲との関係や大使活動について

- 家族会での活動等、仲間と一緒にいるから元気でいられる部分がある。自分自身がありのままで過ごせるからだと思うが、やはり現場は楽しい。

(支援者)

- 例えば、子どもだって楽しいことがあった日は家に帰っても元気がいい。逆にテストの時はしんどそうにする。それと同じ事のように思えるので、特に認知症だから元気がないという捉え方はしていない。

○ 支援者として思うこと

(支援者)

- 本人が落ち着いて活動できるよう、精神的にも安定した生活を送らせてあげたい。

② インタビュー 2 人目

○ 主治医との関係

- 自分にとって、現在の主治医に巡り合えたことはとても大きく、有難いと思っている。医師とは非常に話しやすい関係で、これからのことも含めて色々とディスカッションしている。

○ 仕事や職場の様子

- 診断を受けた後、組織体制が変わる時点で所属と役職を異動したが、職場の理解もあり現在も仕事を続けられている。
- 自分の支援者は、職場の同じ部屋で上司として傍にいてくれる。仕事でも支援者には何度も同じことを聞いてしまい、周りにいる若い職員はその様子を笑いながら見ているが、職場の中でのストレスは全く感じていない。
- 部署の中では年齢的にも一番上で、周りの人からすればおじさんみたいな存在だと思う。いろいろと声をかけてくれる人もいて、とても有難いと感じている。

(支援者)

- 私たちの部署だけでなく、組織の職員全体が本人への尊敬の念を抱いている。だからこそ、よい雰囲気がつくれていると思う。
- 職員は、「単に少し記憶が大変なだけで本人自身は何も変わっていない」という受け止め方をしていると思う。本人も自分の認知症の状態を面白おかしく教えてくれていて、以前よりも職場が明るくなったように思う。
- 若い職員が持ち物をチェックしてくれたり、自然にサポート体制が出来ている。

○ 地域との関係や本人発信について

- 認知症になっても友達と普通に話をして、笑い合っただけで過ごすし、縮こまっている必要はないと思う。私が指標にしているのは「ケ・セラ・セラ」。常に‘何とかなる’って思いながら過ごしている。
- 元気良く「私は認知症です」って手をあげてもいいと思う。そういう人を拒否する人はいないと思うし、多分、手を貸してくれると思う。
- そういうことを恥ずかしいとは思わないし、自信を持って「私は認知症だから助けて欲しい。教えてください。」って言った方が、周りもサポートしやすいのではないかな。
- 長年、自治会の副会長をしていたので、今でも地域の方と色々な付き合いがある。認知症になって役を降りたいと伝えた時も、周りの人からずっと手伝って欲しいと引き止められた。副会長からは降ろしてもらったが、病気になっても地域との関係性は変わることなく、声をかけてもらえるのは本当に恵まれていると思う。

(支援者)

- 本人がテレビに出た時に、普段はあまり話をしたことの無い近所の人から声をかけられたとのこと。本人の存在そのものが地域の理解になっている。まさに共生社会に繋がる話だと思う。
- もしも本人が引きこもっていたら、周りの人から声をかけることはなかったと思う。本人が自分から発信してくれているおかげだと思う。

③ インタビュー 3 人目

○ 診断された当初の様子

- 認知症と分かって 3 年ほど経った頃、今まで通りにしていくことの難しさを感じるようになり、不備が起こる前に仕事先に伝えることにした。
- 分からなくなってから言うのは嫌だと思った。今のうちに自分から状態を伝えた方がいいと思い、主治医に診断書を書いてもらって提出した。

(支援者)

- 最初は外出もせずに引きこもっていた時期があり、認知症カフェ等を勧めても全く行こうとしなかった。最初に家族会やカフェの活動に繋がったのは、家族である自分が先だった。
- 認知症の診断が出た頃、私は「あと何年くらい活動したり意思の疎通がとれるのか」と、限られた残りの時間のことばかり考えていた。やりたいこと、会いたい友達、行きたい場所のことばかり考えて計画を立てていた。読みたい本や映画にも順番をつけていた。
- ところが何年か経って、いろいろな人との出会いや活動が始まると、ありのままに話ができたり話を聞いてくださる方がいたりすると、本人から「とても嬉しい」「いい気持ちになる」と言う言葉を聞くようになった。
- それまで私は、限られた時間のことばかりを考えていたが、そうではなくて、今出来ることに向かっていくことが大事だと思うようになった。こういうのが、主人を元気にするのだということ強く思った。

○ 仕事の状況について

- 仕事は今でも続けているが、以前と比べて量的にはかなり減っている。
- 仕事内容は相談ごとの対応が中心で、まずは相手の話を聞くことを大事にしている。一般的な話でもあるが、相談対応ではやはり相手の話を聞くことが基本だ。聞けば聞くほど相手は話してくれるようになる。
- コツは、自分の方から余計なことを言わないこと。聞くことだけに徹するのを心がけている。それから、相手が誰であっても自分よりも立場が上の人くらいの感覚で向き合うことが大切だと思う。

○ 周囲との関係や大使活動について

- 月に 1 度、県営住宅の集会所を使って認知症カフェで活動をしている。そこでは、いつもまごころを込めて珈琲を入れている。もともと自分は珈琲を入れることが好きだった。
- 認知症になると閉じこもってしまいがちな面があると思う。みんな自分の立場を作ってから人に接しようとするが、本当はそんな必要はなくて、せめてこういう関係の中では「ぶっちゃけて言えば」というぐらいの感じを保っていけばいいと思う。
- 自分も認知症になった最初の頃、少しの間だけ外に出ていけなかった時期がある。でも、いざ外に出ていたら、素晴らしく開かれた世界があって、皆さんが「今日も来てくれてよかった」と言って応援してくださった。
- その経験があるから、「1 歩外に出たら『場』があるよ」ということを認知症の本人たちに伝えたい。

○ 大使になったきっかけ

- 大使になったきっかけは、希望大使の丹野智文さんとの出会いである。丹野さんが自分のことを発信している姿が輝いて見えて、その場に一緒にいた県や包括支援センターの方に、「自分もやりたい」と声に出して伝えた。その後、少しずつ活動の場を設けてくださるようになった。

(支援者)

- 本人が、「自分もやりたい」という気持ちを伝えられて本当に良かったと思った。本人も、ありのままの自分を表せる場ができて喜んでいる。
- 色々な場を与えてもらい、希望大使に任命される前から活動の機会が増えている。

○ 支援者としてのあり方について

(支援者)

- 私は、サポートという言い方は嫌なのだが、一緒にいて、一緒にいろんなことを感じていきたいと思っている。本人が生き生きとしているところを見ると、自分ももっと手伝いたいという気持ちになる。
- 「サポートという言い方は嫌」と言ったのは、主人とは長い間一緒に仕事をしてきて、ずっと共に歩いてきたから、これからもずっと一緒というのが根本にあって思わず出てきた言葉なのかもしれない。
- 認知症になっても、私が支えるということではなく、関係性としては「共に」だと思っている。

3.1.2. 合同インタビュー結果

① 希望大使へのインタビュー

テーマ1： 今後の大使活動でしたいこと・アイデア

柿下大使（東京都）

- せっかく仲間が増えたので年に何回か集まる機会を作り、色々な事を話し合ったりお互いに楽しめることをしてみたい。普段は別の地域にいて、考えもそれぞれ違うかもしれないが、それぞれの思いを出し合うことで見えてくることがあるかもしれない。

戸上大使（大分県）

- これまで地域版希望大使をやってきて、今回初めて全国版希望大使に任命された。地元ではピアサポート活動をメインに取り組んできたが、この活動は全国版希望大使になっても続けていこうと思う。
- 大分県には4人の地域版希望大使がいる。それぞれ個性がある人で、既に県内を一巡した。もう少しアクションを強くしながらさらに一巡すれば、行政や包括に理解してもらえることがあるように思う。

鈴木大使（京都府）

- 私の「元気」を伝えたいと思う。

春原大使（長野県）

- 私が暮らしている地区では月に2回ほど、オレンジサロンを開催して認知症の勉強をしている。認知症の知識を持つ看護師の方が講師となり、毎回7名から8名ほど集まって認知症になっても暮らしやすい地域づくりを進めている。この活動を続けていきたい。

藤田大使（鳥取県）

- 自分の元気な姿や意欲を持ってチャレンジしている姿を見てもらい、これから認知症になるかもしれない人に「認知症になるって怖くない」とか、認知症の人にも「あんなふうに元気でいたい」と思ってもらいたい。
- 希望大使として地域の中で存在し続けられるように、現状維持をしていけたら良いと思う。

丹野大使（宮城県）

- やはり目の前で不安を持った当事者が笑顔になれるような事を地域で取組んで欲しいと思う。自分だって常に笑顔でいられるわけではないが、笑顔でいる姿、頑張っている姿を多くの人に知ってもらい、認知症の本人に前向きになってもらいたい。
- 自分が最初に前向きになれたきっかけも、「この人のように生きてみたい」と思える人に出会ったからだ。自分もそう思ってもらえるような行動がしたい。
- その行動とは講演だけではないと思っていて、何かに挑戦している姿を見てもらうことも大切なのではないかと思う。

テーマ2：どんな人に大使の仲間になってほしいか

柿下大使（東京都）

- やる気のある人、夢や考えを持っている人が出て来てもらえると、新たな発想に繋がる可能性があると思う。やる気のある人に入ってもらえれば、活動の幅も広がる。

鈴木大使（京都府）

- 私自身も引っ張ってもらえるような、元気な希望大使が増えてほしい。

春原大使（長野県）

- 希望大使になる人も認知症のことを勉強している人が良いと思う。

藤田大使（鳥取県）

- 世の中にはまだ認知症への嫌悪感とか、恐れ、諦めなどがあるけれど、そうではなくて、「認知症になっても希望を持てる」「どうどうと生きていける」「暮らしやすい地域にしていきたい」と思っている人、少しでも地域を笑顔にしたい、元気にしたいと思っただけで大使になってくれる人を望みたい。
- 自分の地域で元気に暮らし、みんなと交流している姿を見せ、介護施設の中にも皆と笑顔で暮らしている日常があって、そういうことが大事だと思わせてくれるような人がいいと思う。

- 任命する側の意識として、推薦があれば誰でもいいとか、大使の仕事は講演する事だと思っているところがある。そういう間違った認識は問題であるし、それが影響してか、本人の中には「大使になったら有名になれる」とか自分が偉くなったように思ってしまう人もいます。そんなふうにする人は、大使になってはいけないと思う。

丹野大使（宮城県）

- やはり自分自身で「発信したい」という気持ちを持っていなければ、大使になってはいけないと思う。なぜ大使になったのかと聞くと、「家族や支援者にやれと言われた」と答える人がいるが、自分で理由を言えない人はダメだと思う。
- その他にも、家族が「本人を元気にしたい」という理由で希望大使をさせているケースもある。これも趣旨とは違うし、顔や名前を出さない人も「希望」にはならない。
- 結局、国から言われて県が焦ってしまうと、誰でもいいから任命しようということになりかねない。もし本当に候補者がいないのなら、無理につくる必要はないと思う。
- 確かに、希望大使になったことで活躍できるようになったり、元気になったりする人はいる。でも、希望大使というからには、やはり最初から元気な人で、「この人のように生きてみたい」と思える人であって欲しい。
- 自分自身は大使になってから、想いを持って講演活動をするようになったが、中には、有名になりたくて大使になる人もいます。何のために活動するかと言えば、やはり社会を変えていくこと、一人でも笑顔にしたいという気持ちがあってこそだと思う。
- やはり周りが持ち上げすぎるのは良くないと思う。最近、自分が元気になるため、自分が有名になるために活動したいという人が増えていて、それでは国が考えている希望大使とは違うものになってしまう。

テーマ3： 支援者（パートナー）について

① 支援者（パートナー）に求めたいこと

戸上大使（大分県）

- 私の支援者は知識も豊富で、私の良き理解者である。彼がいなくなったら本当に困ると思うが、そういう全てを分かってくれるような支援者がもっと増えて欲しい。

鈴木大使（京都府）

- 地元の地域包括支援センターの職員はみんな良い方で、私が活動しているカフェに大勢来てくれてパワーをもらっている。元気になれる。そんな支援が嬉しい。

春原大使（長野県）

- 地区の中には自分が認知症になる以前から私のことを知っていてくれる人が大勢いて、「認知症なっても変わらない」ということを言ってくれる。また長年、認知症の勉強会を続けてきたことにより、認知症になっても支えてもらえる体制がある。
- 支援者は知識を得るための勉強をすることや、認知症になる前からの本人との関係性が大事だと思う。

藤田大使（鳥取県）

- 私は、お互いに思ったことを言い合いながら、目的を成し遂げるために一緒に考え、作戦を練れるような人がいい。
- 大使のために何かしてもらうのではなく、お互いに切磋琢磨、討論しながら大使の役割を果たすために語り合い、大使として動くことを後押ししてくれるような人がパートナーでいて欲しい。

丹野大使（宮城県）

- 家族には心配かけたくないという気持ちがあって、不安や困ったことが言いづらい。だから仲間やパートナーの存在は大きくて、失敗した事や不安なことを話せる人であってほしい。
- それから、パートナーはあくまでも本人と平行でいて欲しい。大使のパートナーであることがステータスになってしまうと、本人の意思とは関係なく、本人を有名にするために動き始めてしまうケースも実際にある。
- パートナーとは、認知症のことだけではなく、一緒に美味しいもの食べに行ったり、お互いに困り事を相談できたりする関係でありたい。
- もう1つは、最近、「一緒に行動させてもらおうと勉強になるから、一緒に連れて行ってほしい」と頼まれることがある。自分たちと一緒にいることで、パートナーも学べる事がたくさんあるということだと思う。

② 支援者（パートナー）と活動しやすくするために求めたいこと

藤田大使（鳥取県）

- 大使活動では、先方に交通費や宿泊費、謝金等の負担が発生する事が多い。その場合、自分1人では移動が出来ず、色々な段取り等もあるのでパートナーも一緒に動いてもらう必要がある。先方にはパートナーにも同じように費用が発生する旨を説明し、交渉している。
- 自分の場合、パートナーは1人ではなく複数の方がいる。仕事を休んで来てくださる事もあるので、やはり日当のような形で対応してもらいたいと思う。そうした対価を払ってもらうことで、自分としてもパートナーにお願いしやすくなる。
- 活動依頼を受ける際、パートナーが必要な人にはこうした配慮が「当たり前」になってほしい。そうすれば、交渉ごとにも楽になるしパートナーにも頼みやすくなる。そうした事を本人が気を使ってあれこれ考えてしまうと、頭がいっぱいになって動けなくなる。

テーマ4： 地域でもう少し変わってほしいこと

柿下大使（東京都）

- 地元の地域は一生懸命やっていると思う。今後も様々な人の繋がりや新たな発想力

でもっと楽しいことが出来ると良いと思う。

戸上大使（大分県）

- この数年ピアサポート活動が続けてきたが、力不足のところもあってなかなか一気に変わらない。何事も積み重ねが大事だと思うので、引き続き頑張ろうと思う。

鈴木大使（京都府）

- 地域はとても変わってきていると感じている。カフェの活動等を通して、仲間がどんどん増えていて、そういう活動をもっと増やしていきたい。

春原大使（長野県）

- 地域の60代、70代は、「安心の地域づくりセミナー」で勉強を重ねており、認知症への偏見や差別がない地域づくりが進んでいる。困り事も聞いてくれるし、道に迷っても助けてもらえて、特に変わって欲しいと思うようなことはない。

藤田大使（鳥取県）

- 希望大使が偉い人であるかのように捉えられていて、なって欲しい人がいても敬遠されてしまうことがある。希望大使は、元気に普通の生活を送りながら発信するだけでもいいと思う。
- 地元には、ありのままの姿で気軽に大使になって欲しいと思うような人がたくさんいる。そういう気負わずに発信できる希望大使が増えて欲しいと思う。
- 地域の中にはまだまだ多くの認知症への偏見がある。認知症の人がどうどうと生きられる地域に変えていく努力を続けていきたい。

丹野大使（宮城県）

- 未だ認知症の本人が元気になると、誹謗中傷されることが多いという現実がある。講演会で話をしていたら、会場から「こんな認知症の話を聞きに来たんじゃない」と怒られたこともあった。
- やはりそういう地域の認識も変わってほしいと思う。また、変わってほしいと思う医者もいる。

② 支援者へのインタビュー

支援者（パートナー）とはどのような存在か

キーワード：共にいる、一緒に楽しむ、本人のパートナーは1人ではない

- 時間を共有するという事がとても大事だと感じていて、長い時間一緒にいると本当にいろいろなことが話せるようになる。
- 私の場合、地域包括支援センターの職員として他のスタッフと一緒に支援しているが、本来の自分の仕事時間などは考えずに、その方と付き合うようにしている。
- スタッフは皆同じ思いでいるので、たとえ自分が倒れたとしても困ることはない。

- 仕事でもプライベートでも、自分もやりたいと思えることを一緒にやっている。自分がやりたくないことを一緒にやっても楽しめないと思うので。もしも山登りに行こうと誘われても、自分が行きたくなかったら一緒に登りたい人を探せばいいと考えている。
- 本人がこんな目的でこうしたいと思った時、私もそう思ったら一緒にやる。やらされるとか、やってあげるという事ではない。やりたくないと思ったことも、お互いに話し合っただけで納得できたら一緒にやるというイメージ。
- 私はパートナーを務めているけれど、本人にとってのパートナーは1人ではなく、複数の人がいる。だから私は大使の予定や行動を全て把握しているわけではない。他のパートナーと分担しているし、次の活動は誰と行った方が良いか等を相談しながらやっている。
- パートナーと大使（本人）との関係は、全ての行動を把握する人、される人の関係ではないと思う。



3.2. 都道府県担当者

地域版希望大使事業を先行して実施している都府県並びに現在任命の準備を進めている道府県の中からインタビュー調査に協力頂き、各都道府県における事業の推進状況や担当者の取組状況、考え方等について情報を収集した。

【調査協力者（地域版希望大使事業担当者）】

徳島県 保健福祉部長寿いきがい課

秋田県健康福祉部長寿社会課・調整・長寿社会推進チーム

青森県健康福祉部高齢福祉保健課 高齢者支援グループ

大分県福祉保健部 高齢者福祉課 地域包括ケア推進班

山口県健康福祉部 長寿社会課 地域包括ケア推進班 （実施順）

3.2.1. 大使任命プロセスにおける取組

○ 大使の適性等に関する検討状況

各都道府県の地域版希望大使の任命が目的化し、大使の役割を担える人物像についての検討がなされていないのではないかとの指摘もある中、大使の適性に関する考え方や検討状況を確認した。インタビュー調査を実施した自治体では、任命以前から本人との直接的な関係をつくり、共に取組んでいくための意思疎通が図られているケースが多くあった。

- 大使の適性のようなことを考えても難しくなるだけなので、本人がどんな背景で生活されていて普段からどんな活動をされているのか、そうした様子や雰囲気私たちがもしっかりと確認し、その人のことを知ることが大切だと考えている。基準をつくるとか点数化するというよりも、それが大事だと思う。
- 大使を決める際、私たちは、本人にも、支援者の方にも、本当に何度も何度も会って話をさせていただいた。認知症カフェでの様子も拝見させていただきましたし、職場を訪ねて話を聞いたこともある。そうしたことを通して本人の人柄を知り、本人がどんな活動をしたいと考えているのかも分かってくる。
- 色々話を聞く中で、こういう方であれば私たちが考えている認知症の普及啓発や認知症施策に力を貸してもらえないかと思うようになった。決して基準をつくって、そこに当てはまるかどうかで決めることではないと思う。
- とにかく県として考えている事業の意味を理解してくださるなら、どのような方でも良いのではないかという思いがある。特に「話せる人」とか「表に立てる人」でなければいけないわけではなく、ちゃんと自分の姿を見せて、社会に伝えたいと言ってくれる方なら、「その人と一緒にやろう」という思いがある。

○ 大使候補者の探し方、出会い方について

令和4年度に実施した都道府県調査（地域版認知症希望大使の普及促進と活動支援に関する調査研究事業）の結果では、未設置道府県における「大使候補者が見つからない」との課題意識が多く挙げられている。

インタビュー調査を実施した自治体の多くは、管内の市町村、認知症疾患医療センター、家族の会、認知症カフェ等の地域資源関係者等からの情報を収集していた。また、公募による場合にも、大使事業実施以前から取り組んできた研修や交流機会を通して、管内関係者（市町村、専門職、地域資源等）との顔が見える関係や認知症施策に関する方向性が共有されており、大使事業の目的に沿った人選が行われやすい環境だったと考えられる。

- 管内の市町村、認知症疾患医療センター、家族の会等に問い合わせて候補者の情報を入手した。
- 若年性認知症コーディネーターとの連携が取れているので、何かあるとすぐに電話で相談できる関係がある。当県で実施しているピアサポート事業についても、コーディネーターからピアサポーターを紹介してもらった。
- 当県は大使の候補者を公募で探した。正直なところ、当初はこんなに多くの方が希望大使になってくださると思っておらず、担当者としてもびっくりした。認知症を公表するということはそう簡単なことではないと思っていたからだが、実際は県内各地から手をあげていただくことが出来た。
- 認知症に対する古い形の考え方が少しずつ変わってきたと思う。この1年くらいの間やってきて、「何かが動いた」と感じている。歴代の担当者が様々なところと良い関係を作りながら一緒に取組んできたこともあり、多くの推薦をいただけたと考えている。
- 令和元年度に開催した認知症カフェサミットをきっかけに、全国版希望大使に出会った本人の方が「自分も発信をしてみたい」との思いを語られるようになった。そのニーズに応える形で、県として本人発信支援の取組をスタートさせ、その後の大使任命にも繋がっている。

3.2.2. 事業の意義及び実施状況

○ 大使事業や本人発信の意義に関する担当者の意識

担当者における事業の捉え方や担当者のモチベーションは、大使事業の形骸化を防ぐ上でも重要なポイントになる。インタビューを実施した自治体の多くが、認知症の本人だからこそ伝えられることがあると考えており、他の認知症施策や関連事業との連動や一体的な取組として捉えられていた。

- 大使は、認知症になっても地域の中で、これだけ明るく、楽しく、暮らしていけるということを第一線で発信していただく存在だと思う。それを皆さんにいかに伝えていくかというところに行政としての役割があると思う。
- 国からは本人や家族の意見をしっかりと聞いて施策に活かすようにと言われているが、私自身も全くその通りだと思っている。県は市町村のように直接認知症の人に関わってきめ細かい支援が出来るわけではないが、本人や家族の意見を聞くことで伝えられることがたくさんある。

- やはり本人の言葉で発信することがとても大事だと思う。認知症の理解という部分では医師の話も勉強になるが、診断される前に何を感じ、診断された後はどうだったのか、角度を変えて本人の体験から話してもらうことに期待がある。
- 文章や映像ではなく、本人から直接話を聞くとやっぱり伝わり方が全然違う。会場に来てくださった方も必ずそう言って帰っていかれる。マイナスのイメージではなく、認知症の人が身近になるというか、言葉に出来ないグッとくるものがある。
- 当県は大使事業に先行してピアサポート事業に力を入れてきており、大使事業もピアサポート事業と一体的に展開している。次年度は、ピアサポート事業の横展開を図りながら、事業の中で市町村へのスーパーバイザー的な取組（本人も含めたチームの派遣）を考えている。一番大事な本人視点がブレないようにアドバイスをしていくイメージである。
- 今年度、第9期計画を立てるにあたりこれまでの事業の整理を行った。大綱に基づいて全市町村の事業の状況を見ると、ある程度の形は出来てきているように思うが、中身がうまく回っていないという声も聞く。担当班の中で全体を串刺しにする何か足りないのではないかという話し合いをした。その時、やっぱり本人の声が入ってないから事業が回らないのではないかという考えに至った。本人の声については、基本法でもしっかりと謳われていることだし、本人の声を横串に刺すような計画づくりを県も進めていくことが大事だと考えた。そうした県の姿を見れば、市町村も一緒にやってくれるのではないかと思う。
- 当県は長い時間をかけて多職種を交えた研修を継続している。顔の見える関係づくりも含めて地道に積み上げてきた基盤がつくられつつあり、認知症カフェも県内に110箇所つくられている。希望大使事業は、こうした認知症の人が暮らしやすい地域づくりへのアプローチの1つとして一体的に機能しているように思う。希望大使の制度がつけられたおかげで、県の認知症施策全体が分かりやすくなったと思う。

○ 大使の活動内容について

多くの自治体で講演会や研修会での講話が行われているものの、大使としての活動を講演会等に限定して考えている自治体はなかった。ピアサポート活動や認知症カフェでの活動と連動している自治体や本人のありのままの姿をメディア等で発信することも有意義な活動の1つとして考えている自治体もあった。また、地域版希望大使の声やその日常をPR動画として作成し、ホームページ等から発信している県もある。

- 毎年開催する認知症月間の記念講演で本人に想いを話していただく機会を設けている。また、ショッピングセンターでの普及啓発活動なども行っているが、任命してからまだ間がないので具体的な活動はこれからになる。
- 発信の場は研修会だけに留まらず、ニュースとか新聞等のメディアを活用できたらと考えている。その方が多くの人に知ってもらえるのではないかと思う。
- チームオレンジのオレンジコーディネータ研修で大使と支援者の話を聞いてもらいたいと考えている。市町村は「本人の意見を尊重してチームを作ること」とか、「本人にどうやってチームに入ってもらおうか」というところで悩みがちだが、意識しなくても自然にチームオレンジのようになっている大使と支援者たちの話を聞いてもらい、チームづくりの前提になる考え方を知ってほしいと思う。
- 大使は、同じ診断を受けた仲間を元気にしたいという思いから、認知症ピアサポーターとして活動している。当県の場合、令和元年にピアサポート事業がスタートして大使事業はその後になるので、ピアサポート事業がベースにあって大使活動があるという考え方になる。希望大使もピアサポーター23名の中の4人が大使を担っており、予算的にもピアサポート事業の中に大使の活動費を組み込んでいる。
- 認知症の本人からの発信を通して、広く県民の理解を図り、認知症があってもなくても同じ社会の一員として暮らせる地域づくりを推進することを目的に、以下の活動を委嘱の要件として定めている。
 - ① 県及び市町が行う普及啓発活動への協力—メッセージ動画への協力、広報誌等への寄稿、イベント等への参加・協力、普及啓発教材への助言等
 - ② 認知症サポーター養成への協力—県が行うキャラバン・メイト養成研修への協力や市町等が行う認知症サポーター養成や育成への協力
 - ③ その他県及び市町等が行う地域づくりに関する取組への協力—ピアサポート活動による認知症カフェや認知症疾患医療センター（診断後支援）への協力や各市町村における本人ミーティングの立ち上げ・合戦かへの協力等

○ 大使事業を進めていく上でのポイント

インタビューを実施した自治体の共通点としては、大使事業を進める上で、本人の気持ちや主体性を尊重しようとしている姿勢が挙げられる。また、大使と大使をサポートしている支援者たちとの関係性に着目し、「本人を支えるチームづくり」とは何かということを伝えようとしていた自治体もあった。

さらに、事業の委託先と都道府県との関係性に関する言及もあり、施策や事業の目的を達成するための委託のあり方として丁寧に進められていた。

- 本人が自ら「やってみたい」という前向きな気持ちや姿勢を大事にしたい。講演会で話すことが難しい状況になったとしても、出来そうなことを一緒に考えながらやっ

ていきたい。

- 大使任命に向けて準備をしていた頃に国の担当の方から言われたことは、本人の気持ちを大事にして進めて欲しいとのアドバイスだった。やはり本人の気持ちが一番大事。本人の気持ちを伝えていかないと周りには伝わらない。
- 任命するにあたり大事にしたことは、本人のことだけではなく、周りの人が本人をどのように受け止めて支援しているか、チームをつくっているか等のことも含めて話を聞くようにしたことだ。
- 何よりも本人が納得して引き受けてくださることが大切だと思う。
- 大使事業の一部を委託しているが、委託の根本は「県がやるべきことを委託先にやってもらうこと」だと思うので、1から10まで自分たちが委託先に関わるのは当然のことだと思っている。例えば、若年性認証カフェや本人ミーティングを委託している団体とは、互いに協力しながら同じ方向に向かって事業を進めている。それが出来るのは、事業を始める以前から一緒にやってきているからで、どちらも主体だという感じがする。実際、担当班の業務量はかなり多くて保健師1人にかかる負担も凄まじい状況がある。組織としては委託を出しながら業務を切り離していくことが必要だが、委託先と距離が出てしまうような弊害は避けなければならないと考えている。

○ 市町村との連携について

インタビュー実施自治体で多く聞かれた共通点は、市町村との連携や協働に向けて、顔の見える関係づくりに取り組んでいることであった。方法としては自ら市町村に出向いて情報収集をしたり、研修会等の機会を通じてコミュニケーションを図ったり、県の考え方を伝えたりしていた。また、こうした機会に市町村が抱えている課題を把握し、課題解決に向けたバックアップの役割を担っているところもあった。

- 気になる市町村から少しずつ回って、自分たちから情報をもらいに行くような形でやっている。積極的に訪ねて行き、市町村との関係が出来てくると、逆にいろいろな情報をもらえるようになるし、私たちの仕事もやりやすくなる。今回、大使をお願いした方についてもこうした市町村との関係の中で情報をもらうことができた。
- 県は市町村が何に悩んでいるのかを把握し、そのためにどうすれば良いかを考える必要がある。また、様々な国の補助制度があるので、市町村の事業とマッチングしながら進めやすくしていくことも県の役割だ。市町村も人が足りず、やりたいことがあってもなかなか手を出せない事情があり、そこをどう進めていくか、市町村と協力しながらやっていく必要がある。

- 当県はずっと保健師が認知症の担当を担ってきているので、各保健所には県の認知症施策の経験者が1人ずつくらいはいる。県の担当者してみれば、保健所に馴染みの保健師がいて、相談や情報共有がしやすい状況と言える。
- 市町村は事業の必要性を分かっているけど、具体的にどのような場面で大使を呼べばいいのか戸惑っている様子がある。電話で相談してくる時も恐る恐る聞いてきたり、本人の迷惑にならないようにと慎重になっていたり、足踏みをしている市町村が多いように思う。
- 当県は認知症サポート事業を軸に認知症施策を進めており、大使事業も一体的に展開している。昨年11月と12月にピアサポーターを増やしていくための市町村担当者向けのキックオフ研修会を開催した。研修会では、ピアサポーターの活動内容や効果を市町村が具体的にイメージできるように留意し、各市町村にはどんなやり方が出来るか、それぞれに合ったやり方を考えてもらいたいと考えている。その成果もあってか、今年度のピアサポーター養成講座は参加者が増え、本人、家族、市町村、専門職と幅広く参加してもらうことができた。
- 「オレンジパワー活用セミナー」の開催により、認知症の本人の声を活かした取組や本人からのメッセージを学ぶ機会を継続的に作り、市町等地域の関係機関の取組を後押ししている。本人発信支援に取り組む市町数は年々増加しており、地域の関係機関の協力のもと、多くの大使候補者の推薦につながった。

3.2.3. 担当者自身に関すること

○認知症施策や大使事業を担当してからの自身の気づきや変化

インタビューに応じてくれた全ての方から認知症観の変化に関する話を得ることが出来た。いずれも、本人と直接交流したり話を聞いたりする中でマイナスからプラスへ、認知症や認知症の人への理解が大きく変化したとのことである。

- 当初は認知症になると何もできなくなるといったマイナスのイメージを持っていたが今はだいぶ変わった。本人同士の集いで、皆さんが本当に和気あいあいと過ごしていてマイナスのイメージは全く感じない。
- 認知症のことを学んでいくうちに、認知症になっても本人が困っていなければ自宅や地域で生活していけることに気づいた。周りにサポートがあれば、そして本人が満足していれば、認知症でも暮らしていけるということも知った。そして、認知症になるということを必要以上に怖がる必要はないのではないかと思うようになった。

- 認知症の人も活動しようとしていることを知り、私たちも出来ることをもっとやらなければならないという気持ちになった。家族や本人と話をしていると、行政に伝えなかったことを話してくださることがよくある。そういう意見の吸い上げは、こちらからもっと前のめりに取組んでいかなければならないと思う。
- ここの仕事をするようになってから、認知症になっても出来ることはたくさんあるということがよく分かった。実際の現場を見たからこそ分かることだと思うが、当初の理解とは全く違ってきた。
- これまでは保健所での勤務が多く、認知症の人には精神疾患の1つとして関わっていたことが多かった。やはり偏見的な考えになっていたと思う。本人のところに行っても本人の話を聞かず、家族に話を振ってしまうなど、本人に向き合っていなかったと思う。現在の仕事を担当するようになってからは、本人から「自分が何をしたいか聞いてほしい」とか、「まだまだ言える」「発信できる」というメッセージをたくさん頂くので、やっぱり本人の話をしっかり聞き、本人に向き合うことを第一に考えるようになった。
- 家族の話は、「本人を支える立場」という切り分けをして聞くようになった。決して本人を代弁しているわけではないと考えられるようになった。
- 保健所勤務の頃は、精神科の側面から認知症の人に関わる機会があったが多くは困難ケースへの対応だった。担当になってからは、自分自身の古い認知症観にも気づかされた。本人からの発信で周りの人の認知症に対するイメージが変わったり、元気をもらったりしていることを実感している。
- 祖母が認知症だったこともあり、年齢を重ねれば色々と忘れてたり、分からなくなったりするのは自然なあり方だというイメージを持っていた。担当になって、ここで知ること全てが新たな知識になっている。関わらせていただいている本人の方々は皆さん元気で、一緒にいてもあまり認知症のことを意識せずに過ごしている。大使の方が大勢の前で堂々と話をしている姿を見て、私たちには出せないパワーがあると感じている。

○ 担当者としての課題意識

各々が抱えている課題意識については、大使、支援者、担当者自身、事業全体の方向性等、様々な側面からの意見や考えを聞くことができた。

(大使の負担に関すること)

- 当県はまだ大使を設置していないが、同じような役割を担ってくれているピアサポ

ーターが2名いる。徐々に管内市町村から本人の話を聞きたいという要望が増えており、2名の移動等の負担も重くなっていくので、地域的な偏りを考慮してもっと多くの本人に活動してもらえるようにしていきたい。

(支援者の負担に関すること)

- 支援者の負担感をどう軽減するかが課題だ。大使の支援者の方は自分が大使に同行出来ない場合にもチームで対応すると言ってくれており、職場の皆さんも協力してくださるとのこと。窓口は支援者の方に一元化することになるが、活動を長続きさせるためにも役割分担をしながら協力してもらえるようにしたい。

(担当者の負担に関すること)

- 大使関係の業務が担当者1人に集中してしまうので、そこをどう解決するかが課題だ。現在も大使の派遣に関わる申請受付や報酬の支払事務などを委託しているが、複数いる大使のマネジメントの部分はどうしていくかは今後の課題だ。

(事業展開に関すること)

- 大使事業は緒に就いたばかりなので、今後どのような取組を続けていくか、どんな方向性を出していくかなどの展開を考えて次年度に繋げていく必要があると考えている。

(大使の役割に関すること)

- 大使の活動は講演会以外にもあると思うが、具体的にどのような活動の仕方があるのか悩んでいる。例えば、認知症カフェやピアサポーターで具体的にどのような形にすればよいかイメージが掴めない。他県の情報を聞きたい。

4. 大使活動を支える支援者・家族調査

4.1. 支援者について

(1) 大使と支援者の関係性

大使と支援者（アンケート回答者）との関係は、「その他」が17件（37.0%）で最も多く、「家族・親族」が14件（30.4%）、「活動を通じて知り合った」が12件（26.1%）と続く。

Q1. 大使との関係

区 分	件数	%
1. 家族・親族	14	30.4
2. 以前からの知人	3	6.5
3. 活動を通じて知り合った	12	26.1
4. その他	17	37.0
合計	46	100.0

「その他」の関係性は以下のような内容となっている。

介護サービス関係者、家族の会関係者、地域の相談拠点関係者、地域のボランティア関係者、病院関係者、年性認知症支援コーディネーター、県の担当者、職場の上司、地域包括支援センター職員、認知症地域支援推進員 等

(2) 支援者になったきっかけ

上記の設問で大使との関係が家族以外の方（32件）について、支援者になったきっかけを聞いたところ、「その他」が10件（31.3%）で最も多く、「自分から声をかけた」が9件（28.1%）、「活動の関係者から声をかけられた」が6件（18.8%）で、「本人に頼まれた」も5件（15.6%）ある。

「その他」の具体的な内容としては、「友人を介して紹介された」「カフェの参加を通して自然に仲良くなった」「職場で一緒に啓発活動を行っていた」「他にいなかった」等、様々である。

Q1-SQ. 支援者になったきっかけ

区 分	件数	%
a. 本人に頼まれた	5	15.6
b. 自分から声をかけた	9	28.1
c. 活動の関係者から声をかけられた	6	18.8
d. その他	10	31.3
無回答	2	6.3
合計	32	100.0

4.2. 支援者としての活動状況

(1) 支援活動の頻度

Q2-1. 活動頻度（月）

2日未満	17件
2日以上5日未満	15件
5日以上10日未満	4件
10日以上20日未満	2件
20日以上	3件
無回答	5件
平均稼働日数（月）	2.8日
合 計	46件

支援者としての活動日数（1カ月あたり）を確認したところ、「2日未満」が17件、「2日以上5日未満」が15件、「5日以上10日未満」が4件と続く。平均日数は2.8日となっている。

「支援者としてのやりがい」に関する意識は、「大いに感じる」が26件（56.6%）で最も多く、「まあ感じる」が19件（41.3%）、「あまり感じない」が1件（2.2%）となっている。

Q2-2.支援者としてのやりがい

区 分	件数	%
1. 大いに感じる	26	56.5
2. まあ感じる	19	41.3
3. あまり感じない	1	2.2
合計	46	100.0

(3) 支援者としての負担感

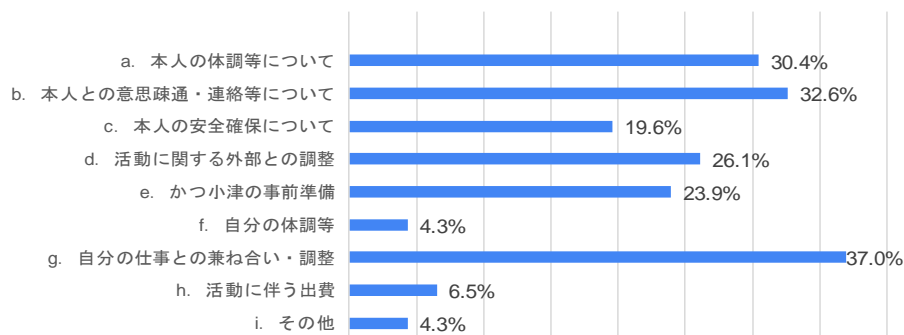
一方、活動における支援者としての負担感については、「あまり感じない」が16件（34.8%）で最も多く、「まあ感じる」が12件（26.1%）で、「大いに感じる」との回答は7件（15.2%）となった。

Q2-3.支援者としての負担感

区 分	件数	%
1. 大いに感じる	7	15.2
2. まあ感じる	12	26.1
3. あまり感じない	16	34.8
4. 感じない	2	4.3
無回答	9	19.6
合計	46	100.0

負担を感じている具体的な内容は、「自分の仕事との兼ね合い・調整」が37.0%で最も高く、「本人との意思疎通・連絡等について」が32.6%、「本人の体調等について」が30.4%等となっている。

負担に感じること（複数回答）



(4) 支援者の仕事の状況

支援者としてサポートする際に自分の仕事の調整状況を聞いたところ、「出勤扱いになっている」が16件（34.8%）で最も多く、「休みをとっている」と「その他」が共に11件（23.9%）となっている。また、「出勤扱いになっている」との回答は、介護・福祉・行政等に関わる専門職の割合が高かった。

Q3. 仕事の状況

区 分	件数	%
1. 休みをとっている	11	23.9
2. 出勤扱いになっている	16	34.8
3. 仕事はしていない	8	17.4
4. その他	11	23.9
総計	46	100.0

一方、「仕事をしていない」との回答は8件（17.4%）となっている。

4.3. 大使活動における支援者への謝金・交通費の支払い状況

(1) 謝金の支払い状況

主に行政等の依頼を受けて大使活動の支援をする際に、支援者への謝金支払い状況を聞いたところ、「一部の活動で支給される」が15件（32.6%）、「ほとんどの活動で支給される」が12件（26.1%）で、「ほとんど支給されない」は9件（19.6%）となっている。

Q4-1. 謝金の支給状況

区分	件数	%
1. ほとんどの活動で支給される	12	26.1
2. 一部の活動で支給される	15	32.6
3. ほとんど支給されない	9	19.6
4. その他	10	21.7
合計	46	100.0

(2) 謝金に対する満足度

上記の設問で「ほとんどの活動で支給される」（12件）と「一部の活動で支給される」（15件）と回答した27件について、謝金への満足度を聞いたところ、「まあ満足」が14件（51.9%）、「大いに満足」が13件（48.1%）で、不満との回答は無かった。

Q4-2. 謝金の満足度

区分	件数	%
a. 大いに満足	13	48.1
b. まあ満足	14	51.9
c. 少し不満	0	0.0
d. 大いに不満	0	0.0
合計	27	100.0

(3) 交通費の支払い状況

交通費の支払い状況を聞いたところ、「少し持ち出しがある」が16件（34.8%）、「不足なく支給されている」が13件（28.3%）で、「大いに持ち出しがある」との回答も8件（17.4%）ある。

Q4-3. 交通費の支払い状況

区分	件数	%
1. 不足なく支給されている	13	28.3
2. 少し持ち出しがある	16	34.8
3. 大いに持ち出しがある	8	17.4
4. その他	8	17.4
無回答	1	2.2
合計	46	100.0

4.4. サポートする際に大事にしていること

自由回答では、体調への配慮、本人の意志を尊重、本人が望む活動等を意識している様子や、活動がより良いものとなるように質問の意図を分かりやすく本人に伝えたり、場の雰囲気や環境への配慮が行われたりしていることが分かる。また、支援者自身の「待つ」「あきらめない」「一緒に楽しむ」「黒子に徹する」といった支援者としての姿勢に関するコメントもある。

【家族支援者の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	本人に無理をさせない事、体調に応じての活動。
2	主催者の意図や質問内容を、本人が理解しやすいよう伝え、本人が自身の想いを伝えられるよう、フォローする。本人の緊張を和らげる。
3	本人が緊張せず、楽しみながら参加出来るように工夫している。
4	本人が気持ちよくなること。やりがい、やってよかったと思えること。
5	待つこと、あきらめないこと、体調にも気分にもムラがあるので一喜一憂しないこと、やさしく接すること。

【家族以外の知合い等の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	大使の意思を尊重する。大使が判断しやすいように環境や情報を整える。様々なことに興味を持ち楽しみを見出しながら活動する。
2	当事者が話しやすいような流れや雰囲気作りを心がけています。
3	何かをしてあげるではなく、“ともに”という考え。
4	本人の意向や本人のペースの尊重 本人が活躍できる場への橋渡しなど縁の下の力（小さいけれど）になれればと思っています。
5	大使に同行する時は率先し前に出ず、一緒に場所（講演会場）を確認しながら歩く。1人で出来ることはやってもらう。

【介護・福祉等専門職の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	あくまでもサポート役、本人に前面に出ていただき「黒子」に徹している。本人の思いを大切にしている。
2	本人と共に楽しみ活動すること。
3	本人の思いを大切に、本人が無理なく続けられるようサポートすること。
4	伝えたいと日頃思っている事が周りに伝わるような形を模索する、予定を詰め込まない、体調や日々の変化を確認し必要に応じて調整する。
5	本人が望む活動内容かどうか／本人がやりたいことが伝わっているかどうか。

4.5. サポートしやすくするために「あったらいいな」ということ

自由回答では、家族支援者に限らず、交通費や移動手段に関する要望が多く挙げられている。また、支援者間のネットワークや情報交換の機会を求める声もあった。

【家族支援者の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	大使活動を行う際、家族が支援するだけでなく、他の人の付き添い等の協力があると助かる。
2	事前に日程や内容を連絡していただきたい。事前にきちんとした打ち合わせがなく、直前の数分の話でどのような内容を発信するのか確認するのは負担に思う。
3	送迎の何れかをお願い出来るとありがたい。交通費の前払い。
4	イベントを企画する際に認知症のことをよくご存じの方にサポート担当者として派遣して欲しい。インタビュー記者も含めて。
5	活動場所への送迎や、活動するときは付き添いの人を必ずつけていただきたいです。

【家族以外の知合い等の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	地域(県や市や区単位)での支援者との交流の場が増えれば、結果的に、当事者の方の行先が増えたり、楽しむことが増える。仲間が増える。
2	・同行者への交通費や謝礼について考慮していただくと助かります。 ・事前の講演会の打ち合わせなどは大使の方に依頼者側が来てくれるなどの配慮をしてほしい。 ・当日の会場までの送迎などは、場所が分からずに遅刻する等のこともあるので配慮してくれると助かる。 ・認知症の方はぶっつけ本番で講演活動をするのは難しいので、事前打ち合わせや資料作成も依頼内容として含めて謝金等の積算として考えてほしい。 ・講師の話せる内容等をあらかじめ周知しておくようなフォームがあるとよいのではないかと思います。また、受講者や企画の意図についてなどを事前に本人にわかりやすく説明してもらえるとよいと思う。
3	大使と支援者への講演料と旅費の交渉を窓口の都道府県が先にしておいてくれるとありがたいです。
4	大使の了承があり、可能であれば、2人以上で支援に入れるとよい。支援者1人あたりの負担が軽減でき、悩んだ時も相談できる。また急な仕事や体調不良の時でも、代わりにサポートに入ってもらえるので安心して活動の依頼を受けることができる。
5	機能低下が進行してきた本人が出かけやすいように、家族以外の人の旅費なども支給されると家族の負担も少なく動きやすいと思います。
6	交通手段の確保：タクシー券があると本人だけで、研修会場へ迎えることも増えるのではと思います。ご家族が送迎を担っている方が多いと感じます。

【介護・福祉等専門職の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	送迎等の時間等、一人で担うには時間も要する。複数でのサポートも必要ではないか？だが、本人が、人が変わる事で混乱や不安を増す様なら考慮が必要。
2	交通費。講演日時を調整する際に支援者は入っておらず、急に「連れて来て」と言われて困る時がある。タクシーを使えたらありがたい。
3	大使活動は本人の特性により方法はそれぞれ異なります。本人がそこにいるだけで良いと周りの者が感じられる工夫。一緒に笑ったり、感情が表われるような雰囲気づくりが必要。
4	講演先までの「移動サポート」などが難しく、参加を断念する時もある。支援者以外(例えば主催者側)などからのサポートもあると、より本人の活動の幅も広がるのではと考えている。
5	支援者がどのような活動を行っているのか、ZOOMなどでも良いので意見交換の機会があればよいと思う。
6	支援者同士のネットワークや情報交換の場。

4.6. 支援者として日頃から感じていること等

活動に対する支援者それぞれの想いが記載されており、活動の意義を実感しつつも支援者としてどこまで対応すべきかに悩んでいる様子もうかがわれる。また、講演会等の主催者側の配慮不足、大使活動の事業評価の必要性、サポートチームに関する提案等、その気づきや感想は多岐にわたる。

【家族支援者の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	本人共々後期高齢者になり、体力的にも落ちていくので、若い方にも活躍して欲しいと願っております。
2	本人が、本人の言葉で発信できることが、認知症への理解、関心、支援に繋がることを毎回強く感じる。支援体制や活躍できる場の多さを、本人と一緒に活動することで知り得ることができた。そのことが、励みにもなっている。
3	・段上に上がるとどうしても緊張するので、和やかな雰囲気の中でお話させて頂けるとありがたい。 ・グループワークは実質的なお話しができる。また質疑応答の際も経験のある方が間に入って頂けるとよりスムーズに会話が進むと思われる。
4	まだ話ができるうちに、もっと活動させて欲しい。
5	私自身が元気に、おだやかな気分にいるという事が大切。これから次のステップに進んだら、状況により周りの皆さん(医師、ケアマネ、施設の職員、サポートして下さる方)に相談しながら、ゆっくりと一緒に生きていこうと思います。

6	色々な人と交流でき、刺激になればと思っているけど、私たち以上に結構疲れるようなので、なかなか遠方に行くのは考えてしまう。
7	様々な場面で手厚く接して頂いていることに、ありがたいと思っています。応援されていたり、励まされたりしていることで、元気になります。

【家族以外の知合い等の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	大使の想いが、きちんと届くように。理解されるように。意識しながらサポートをしています。「当事者が自らの経験や想いを伝える」ことの大きな意味を理解した上で、主催側も企画をして欲しいと感じることもあります。また、大使としての活動が時期によって集中しているので、年間を通して、活躍の場面があると良いかなと思います。(可能であれば) 支援者が1人の場合、スケジュール調整が難しいので。コーディネーターとしては、一緒にお話をさせていただけることに感謝しています。
2	・認知症の当事者理解の普及・啓発に本人の力を借りるのは良いと思うが、講演等の依頼主(地域包括支援センター等)が謝金・交通費など、認知症のご本人・ご家族等の生活状況、生活保護を受給しているなどの制度的な制約などに対して配慮が行き届いているのか、疑問を感じる。そういう意味では、依頼主のほうも当事者理解が不十分なのではないか。認知症のご本人・ご家族に対する講演等を依頼する側にも、啓発のための研修などを講じる必要はないのか？
3	大使活動が、関わった人たちのスティグマや感情などの心理社会的側面にどのような影響をもたらしたのか、知りたいと常々思っています。もちろん、活動をしている大使自身への影響も。なかなか量的に示すことには制約やハードルがあることはわかっていますが、どのような効果があるのかを知った上で、明確な目的を持って活動するのも大事なことなのではと思います。
4	大使の活動を支援するためには常日頃の関わりが大切。大使の活動以外の活動や時間を共にすることでお互いの理解がより深まり、より充実した支援やよりよい大使の活動を行うことができる。
5	本人が前向きに生活していることが支援者としても励みになります。奥様のサポートも素晴らしく尊敬です。でも、ときには人間なのでつらいこと腹立たしい時もあるかもしれません。いつでも本音でお付き合いできるような関係を続けていければと思っています。ご本人たちのお邪魔にならない範囲で寄り添い続けることができればそれでよくて、ささやかな一部であるということに徹したいと思います。「私しかない」みたいなことには絶対にならないようにしたいものです。
6	主催者側の認知症の方の理解不足

【介護・福祉等専門職の回答より抜粋】

NO.	回答内容
1	活動(交流会や講演時)の際の移動手段の確保が課題です。いつも、私を中心とした周囲の支援者が送迎対応をしています。また、講演時の服装や身だしなみ、散髪等に関してもこちらの支援が必要になりつつあります。金銭管理も困難となっており、外出時にお財布を忘れることもあり、建て替えが必要なこともありました。(送迎時にお財布をもって来るように声をかけすればいだけなのですが)あとは、支援者として活動していると、行政関係をはじめアポイントを全て私が窓口となるため、自分はマネージャー? って思うこともあります。直接、大使とやりとりして欲しい…と思うことも正直あります。なんでも、かんでも、私になると正直負担感もありますが、活動自体は楽しくさせて頂いているので、仕方ないのかなとも感じます。
2	複数の方でサポートする場合…やはり本人の能力を見極め、サポートする側のスキルも必要だと思われる為、そんな人材育成の場も必要ではないかと感じている。
3	事業担当職員として大使任命前から本人たちと関わりがあり、信頼関係の中でサポートしていますが、担当職員が変われば、信頼関係も一から築くこととなり、本人の負担になることが考えられます。担当職員がけでなく、日常生活において本人が身近に関わる人とともに(チームで)サポートできればと思います。
4	希望大使の活動が本人にとって負担になっていないか、影響はないのか?と不安になることはある。また、いつまで活動できるのか?その判断は誰がするのか?と考えることがある。
5	一番近くで認知症の実際を勉強させていただいており、感謝しています。職場でも一緒に過ごしており、大使も若年性認知症の方のみならずどのような障害があっても希望すれば働き続けられたり、社会参加できる環境や場が当たり前になったらとの思いもあるため、それに向けて一緒に伝えられたらと思っています。
6	希望大使との協働を通じて、認知症の人と家族が前に向かって歩むことができるための一助となることができると考えている。また、都道府県版希望大使とともに活動できる市町村版の希望大使が移植されることを期待している。
7	希望大使との協働を通じて、認知症の人と家族が前に向かって歩むことができるための一助となることができると考えている。また、都道府県版希望大使とともに活動できる市町村版の希望大使が移植されることを期待している。

4章 事業成果物

1. 事例集及び手引きの作成

1.1. 動事例集：わたしたちの暮らしと活動－地域版希望大使 2023年度

全国の地域版希望大使の協力により、大使の日々の暮らしや活動の様子を紹介する事例集を作成した。

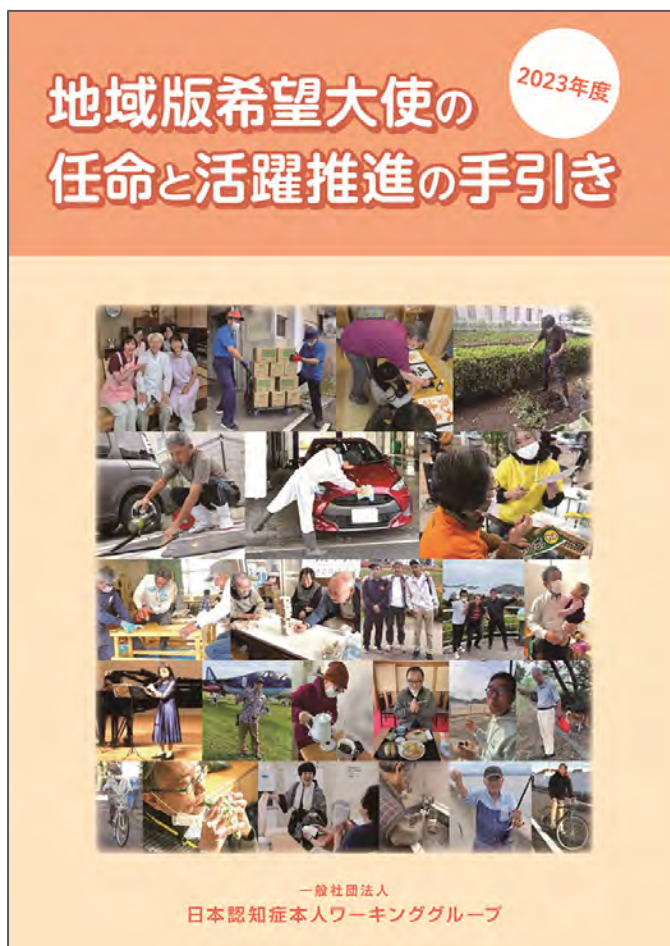


<主な内容>

都道府県別 地域版希望大使情報	・氏名、委嘱時年齢、居住市町村、認知症の病名、任命時期 ・大使を紹介しているホームページ
都道府県の問合せ先	担当課名、電話番号等
大使ごとの情報	・大使になったきっかけ ・日々の暮らしや楽しみ ・大使としての活動と感じていること ・大使からみなさんへのメッセージ 等

1.2. 行政向けガイド集：地域版希望大使の任命と活躍推進の手引き

「希望大使設置都府県アンケート調査」及び「全国希望大使交流会」「希望大使任命・活動推進セミナー」等で収集した情報を整理し、行政担当者向けの手引きを作成した。



<主な内容>

都道府県が地域版希望大使を設置する目的	<ul style="list-style-type: none"> ・目的 ・設置準備 等
地域版希望大使の人物像と役割	<ul style="list-style-type: none"> ・大使像、役割 ・大使が活躍していく上で必要なこと 等
地域版希望大使の任命（委嘱）までのプロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・各プロセスにおける設置済みの都府県の工夫、配慮 等
地域版希望大使の具体的な役割・活動の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・役割の決め方 ・依頼から活動までの流れ ・主な活動事例 ・活動のフォローと調整 等
よりよい活動に向けて	
参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・地域版希望大使の設置に関する厚生労働省通知 ・認知症施策推進大綱（抜粋） ・共生社会の実現を推進するための認知症基本法（概要）

2. Web コンテンツの作成と公開

希望大使活動事例集及び希望大使任命・地域参画手引きを作成に向けて収集した各種情報やインタビュー記録（動画）を活用し、幅広い層に閲覧してもらうための Web コンテンツを作成。成果物は日本認知症ワーキンググループのホームページに公開。

【コンテンツ一覧】

1. 全国希望大使交流会議
 - ① 希望大使自己紹介
 - ② 希望大使グループワーク
 - ③ 家族・支援者グループワーク
 - ④ 発表～記念写真
2. 地域版希望大使及び支援者インタビュー
 - 1) 島田 豊彰氏／とくしま希望大使（徳島県）
 - 2) 神原 繁行氏／あきたオレンジ大使（秋田県）
 - 3) 阿部 俊昭氏／やまぐち希望大使（山口県）
3. 全国版希望大使インタビュー
 - ① 前編
 - ② 後編
4. 都道府県大使事業担当者インタビュー
 - 1) 徳島県
 - 2) 秋田県
 - 3) 青森県
 - 4) 大分県
 - 5) 山口県

3. 国内外への情報発信：PR コンテンツの作成と公開

希望大使の活動について、より効果的かつ持続的に国内外へ情報発信するあり方について検討し、PR コンテンツを作成した。素材としては、本事業の「全国希望大使ミーティング」におけるインタビューの映像記録、及び本事業の期間中に国内の希望大使が参画した「希望のリレーフォーラム」及び「打合せ会&拡大本人ミーティング」（JDWG が共催）の映像記録を活用。成果物は日本認知症ワーキンググループのホームページで公開。

【コンテンツ一覧】

- 1) 「希望をもって暮らせる社会を作り出そう～各地で活躍する希望大使たちから」

5章 考察と提案

地域版希望大使の設置状況は、現在、21 都府県で 68 名となり(令和 6 年 2 月 22 日時点)、次年度以降、未設置道府県の任命も続いていくと思われる。

地域版希望大使事業の持続的かつ効果的な推進が課題となる中、5

章第 1 項では、実態調査の結果を基に既に希望大使を任命している都府県で蓄積されつつある事業効果等を確認し、改めて大使を設置する意義について考察した。

続く第 2 項では、令和 5 年度研究事業で実施した全国希望大使交流会議や各種インタビュー調査、検討委員会における本人委員からの意見等を基に、本人の思いを起点とした希望大使のあり方・役割を考察した。

また、第 3 項では研究事業全般を通して得られた情報を基に、都道府県が希望大使事業を円滑かつ適切に展開していくための課題を整理し、その課題への対応を提案した。なお、第 3 項 1「任命プロセス及び任命後の活動に関する取組ポイント」については、本報告書の先行研究に位置づけられる「地域版希望大使の普及促進と活動支援に関する調査研究事業報告書(令和 4 年度)」の第 3 章(委員会提案)で提起されたものを基にしつつ、今年度の知見を取り入れ、今後に向けてのバージョンアップを図った。

1. 地域版希望大使を設置する意義と効果

1.1. 認知症観の転換

- 大使を設置した都府県に希望大使事業の効果に関する意識を聞いたところ、「十分に感じる」が 65.0%、「まあ感じる」が 30.0%で、合わせて 95.0%の都府県が効果を感じていた。
- 具体的な効果についてアンケート自由記述には、大使からの発信を通して認知症に関する県民やメディアの関心が高まり、認知症を自分事として考えたり、ポジティブに捉えられる人が増えるなど、多数の設置都府県において基本法で重視されている認知症観の転換に関する効果が認識された。
- あわせて、大使事業の効果として、地域住民の認知症観の転換に留まらず、認知症の人同士の出会いや地域との繋がり、地域の活性化、そして本人発信の意義に関する行政関係者の理解浸透等、基本法で目指されている共生社会の実現の推進に寄与している様子も具体的に記載されていた。

1.2. 市町村との関係

- アンケート調査及びインタビュー調査の双方において、大使事業を推進する都府県の姿勢を通して、本人発信や本人の社会参加の重要性、本人視点の認知症施策のあり方等を市町村に伝えられたと対象者の多数が回答していた。
- また、都道府県と市町村との関係性について「半数以上の市町村と協力関係がある」と回答した割合は、設置都府県が75%、未設置道府県が50%となっている。関係性を築くきっかけが大使事業であったとは言い切れないものの、大使候補者の情報や本人が活動する場への訪問など、大使事業を通して都府県の担当者が市町村と連携する場面は多く、実際にそうしたやりとりを通して相互の理解と協力関係が作られてきた県もある。こうして、都道府県と市町村との関係性が深まることで、認知症施策全般を本人視点で推進していく考え方も共有されやすくなる可能性が示唆された。

(県担当者のコメントより)

「大使を設置してから本人発信・本人の社会参加に対する県の姿勢を示してきたので、市町も各地域の本人とのつながりを重視した考え方が広まってきている。」

「大使頼みではなく、まずは地元の認知症の方との繋がりに目を向けようとする、担当者のアンテナの高まりを感じている。」

1.3. 計画や認知症関連事業等への本人参画

- アンケート調査結果によると、計画策定や認知症関連事業等への本人の参画状況について、設置都府県では「本人が委員等のメンバーとして参画している」が7件(35.0%)、「メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある」が3件(15.0%)で、合わせて5割が本人参画を実現している。一方、未設置道府県では「本人が委員等のメンバーとして参画している」は6件(22.2%)、「メンバーではないが委員会等に参加し意見を述べる機会がある」は0件で、設置都府県と未設置道府県の本人参画には大きな差があることが確認できた。
- また、設置都府県の認知症関連事業等への波及効果に関する意識は、「様々な認知症関連の事業に効果が広がっている」と「一部の認知症関連の事業に効果が広がっている」が共に8件(40.0%)で、合わせて8割が何らかの波及効果を感じていた。
- 具体的には、「認知症の本人と接する機会が増え、高齢者保健福祉計画や認知症施策に本人の意見を反映しやすくなった」「検討メンバーとして参加していただき、具体的な取組を検討しながら進められる」「‘本人の声を起点とした地域づくり’や‘本人の社会参加・本人発信’を県事業の共通テーマとして重視していく県の方針を共有した」等で、大使事業をきっかけに認知症施策の根幹の部分に本人の声を活かそうとしている自治体が増えつつあることが確認できた。

1.4. 都府県職員の理解の深化とモチベーション

- 大使事業や認知症関連業務を通して担当者自身が気づいたことや感想を聞いたところ、設置都府県の担当者は、「自分自身の認知症観が変わった」が16件（80.0%）で最も多く、「他の認知症関連事業と連動すべき事業」15件（75.0%）、「前向きになる本人や家族に出会えた」12件（60.0%）と続く。一方、未設置道府県の担当者は、「他の認知症関連事業と連動するべき事業」が20件（74.1%）で最も多く、「任命にあたっては大使の適性を見極めることが重要だと思った」17件（63.0%）、「都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもよい」15件（55.6%）の順となっている。設置都府県と未設置道府県とでは、担当者の意識が大きく異なることが分かる。
- そこで、県担当者へのインタビュー調査で、担当者の認知症観が変わるきっかけ等について補足調査を試みた。インタビューに応じてくれた全ての担当者が、自分自身の認知症観の変化を認識しており、いずれも本人と直接交流したり話を聞いたりする中でマイナスからプラスへ、認知症や認知症の人への理解が大きく変化したという点で共通していた。
- また、本人との会話や交流から、「自分の役割を再認識するようになった」との話も複数聞かれた。

（県担当者の自由回答より）

「認知症の人も活動しようとしていることを知り、私たちも出来ることをもっとやらなければならないという気持ちになった」「家族や本人から、行政に伝えなかったことをお聞きすることがよくある。こうした意見の吸い上げは、こちらから積極的に取り組んでいかなければならないと思う」「本人ミーティング等に自分が参加する意義は、当事者の意見を施策に反映するためだと気づいた。」

1.5. 希望大使事業をきっかけにした共生社会の実現

- 以上のように、本研究事業を通して確認出来たことから推察される事は、大使を設置する目的である「認知症に関する社会の見方を変えるきっかけにする」、あるいは「多くの認知症の人が希望をもてる」といった普及啓発のミッションに取り組むことにより、結果として、県担当者をはじめとする行政全体の意識が本人に向けられ、認知症施策全体の基盤に本人の声を据えていくきっかけになり得るという点である。
- 実際、希望大使事業以前から本人の活動支援や本人の声をもとに認知症施策に取り組んできた一部の県では、大使事業を個別の事業として位置づけるのではなく、他の認知症関連事業と一体化させながら、本人の声を起点にした地域づくりを目指している。

（県担当者のコメントより）

「市町村の事業がうまく回らないのは、本人の声が入っていないからではないかという

考えに至り、本人の声を横串に刺すような計画づくりを進めていくことにした。」

「希望大使事業は、こうした認知症の人が暮らしやすい地域づくりへのアプローチの1つとして一体的に機能しているように思う。そして、希望大使の制度がつくられたおかげで、県の認知症施策全体が分かりやすくなったように思う。」

- 希望大使事業と他の認知症施策を一体的に位置づけていくことは、決して希望大使及び行政担当者にさらなる負担を強いるものではなく、各種事業の様々な場面で、行政の側から、「本人の声を聞こう」という姿勢を貫いていく現れであり、その取組の先で「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が目指す認知症の人が尊厳を保持しつつ希望を持って暮らせる社会の実現に近づいていくと考えられる。

2. 本人の思いを起点とした希望大使の役割とあり方

検討委員会での委員（希望大使）意見をはじめ、全国希望大使交流会議、インタビュー調査等、本人から直接希望大使事業への思いや意見を聞く機会を得た。以下ではこれらの情報をもとに、本人の思いを起点とした希望大使の役割・あり方等について考察する。

<全国希望大使交流会議のまとめより>

—私たちが思う希望大使とは—

…工夫をしながら、みんなの助けをもらいながら、声援をいただきながら、毎年毎年、1日1日、自分の本分を全うできるように頑張っています。そういう姿を見せていく、そして、次に続く人たちに繋いでいくという役割があると思っています。その流れを作りながら「あきらめずに生きていくんだ」と思える人を増やしていくのが希望大使の役割だと考えている。

(JDWG 代表 藤田和子氏)

○ 活動を通して大使自身も学びと気づきを持ち、主体的に活動している

- 多くの大使は任命される以前から地元地域で活動をされていた方が多く、任命により「大使」の肩書きを持つことで、本人の中には一定の使命感が生じ、個人として活動してきた頃よりも積極的に人や場と繋がろうとしたり、都道府県との関わりを大切にしたりするようになったとの話も聞かれた。
- 希望大使の役割を担う本人たちの多くは、「希望大使」という役割を通して自ら考え、学び、伝え方に悩み、勇気を持って前進しようとしている。
- その気持ちを後押しするためにも、大使自身が事業の意義を理解し主体性を持って取組んでいけるよう、任命者である都道府県の配慮や支援が求められる。

○ 自分の姿を通して、認知症の人やこれから認知症になる人の希望に繋げようとしている

- 検討委員会や希望大使交流会では、認知症の普及啓発のあり方について多くの意見が挙げられた。中でも、「大使の存在そのものが『希望』になるべき」との考え方は、今

後の事業展開における重要な視点になると考えられる。

- 大使は、認知症になっても「希望を持って生きていける」「自分らしく生きていける」「諦めなくても大丈夫」ということを、いま認知症になって不安に思っている人、あるいはこれから認知症になるかもしれない人に伝えていきたいと語っていた。そして、その伝え方は言葉による発信である場合もあれば、日常の生活や活動を通じた本人の姿から感じ取ってもらう場合もあるという。
- また、症状が進んで話が出来ない状態になったとしても、自分らしく前向きに『希望』を発信し続けるその姿から、多くの人の共感に繋がっている。まさに希望大使の生き様を通して『希望』を伝えていく取組であり、「普及啓発活動は講演会だけではない」との意見にも合致する。

○ 共生社会を目指して、都道府県と共に歩むパートナーとしての心持ちで活動している

- 希望大使の役割を理解し主体性を持って取組んでいる大使ほど、任命プロセスにおける都道府県担当者とのコミュニケーションや意思疎通を大切にしている。希望大使の体験談として、「担当者だけでなく、県が組織として自分の意見に耳を傾けてくれる。私にとって県は、「行政」というよりも「仲間」と感じるようになった」との思いが語られていた。
- 任命者は大使にどのような役割を求めているのか、どのようなことを一緒にやりたいと思っているのか、ひいては希望大使事業をきっかけにどのような認知症施策に繋がりたいと思っているのか。都道府県はこうしたビジョンをパートナーである大使と共有しながら、「大使と共に歩いていく」という意識を持つことが大切なのではないか。
- また、希望大使の存在そのものが認知症の人の『希望』であるべきとの考えから、任命する際の候補者の見極めについては慎重を要するとの意見も聞かれた。大使の選定については都道府県によって様々な状況や考え方があり、一概に方法論を語ることは出来ない。しかし、都道府県における大使事業のビジョンを明確にし、それを一緒にやっていける人物であるかの見極めは不可欠と考えられる。

○ 本人が発信の継続を望むのなら、人生を全うするまで希望大使であるべき

- 前述の「希望大使の生き様を通して認知症を知ってもらう」という考え方に関連して、希望大使の退任時期に関するテーマも話し合われた。時間の経過とともに認知症の症状が進む可能性や加齢に伴う身体機能の低下による住み替えなど、日々の生活に様々な変化が起こり得る。
- このような時、講演活動が難しくなったことや施設に入所することを理由に、周りの方から大使の任を解く必要は無いのではないかと意見がある。もちろん、本人の意志決定として退任するという選択はあるとしても、希望を発信し続けるという本人の意思がある限り、その時々の状態、状況に応じた発信方法を支援者が一緒に考えていけばい

い。大使自身が望むのであれば、その人は人生を全うするまで希望大使として存在しても良いのではないか。

○ 今後も大使同士が交流できる機会を望んでいる

- 地元の大使の人数は限られているため、地元の大使同士で話し合い、関係性をつくることは難しい状況にある。全国の大使が一堂に会して交流することが出来た今回の交流会議では、それぞれが大使としての自分の役割を改めて確認し、今後の活動のあり方を考える貴重な機会になっていた。
- 基本法が目指す共生社会の実現に向けて、地域でのふだんの暮らしをしながら希望大使として活動する意義を確認しあえる交流や情報交換ができるネットワークは大使事業を推進していく上で不可欠な取組だと考えられる。

3. 地域版認知症希望大使の普及と活動支援に向けて（提案）

3.1. 任命プロセス及び任命後の活動に関する取組ポイント

地域版希望大使の普及促進と活動支援を円滑かつ適切に展開していくために

1. 地域版希望大使を都道府県として設置する目的の明確化・浸透

1) 地域版希望大使を設置する目的について

地域版希望大使を設置する目的は、認知症の人本人が自らの言葉で語り、認知症になっても希望をもって前を向いて暮らしている姿等を積極的に発信していくことである。また、その取組を通じて、

- ① 都道府県内で暮らすすべての人々に、「認知症になっても希望をもって日常生活を過ごせる」ことへの理解の普及啓発をはかる
- ② 共生社会の実現を本人とともに進めていく姿勢やあり方を都道府県が示していくの2点が重要と考えられる。

2) 目的の明確化と浸透の必要性

- ① 大使の任命やその後の活動支援を一貫して着実に進めていくためには、都道府県として大使設置の目的を明確にした上で、広く浸透を図ることが必要である。
 - ◇ 目的が不明確なまま大使を設置してしまうと、大使の任命やその後の活動で本人や関係者に混乱や不安をもたらす、取組が円滑・適切に進まない。
- ② 大使設置の目的を管内市町村全体に浸透させることで、大使の存在や活動の意味への理解が広がり、より高い大使活動の成果や活躍しやすい環境整備が期待できる。

- ◇ 大使設置の目的が理解されていないと、大使の存在や事業の意味が誤解されてしまったり、矮小化した役割（例：単発的な講演の講師）として大使が使われてしまったりする危険がある。そうすると、本来の目的が達成されないだけでなく、大使が消耗して活動が長続きしないリスクも生じてしまう。

2. 地域版希望大使の人物像及び役割、要件の明確化

1) どんな人か：人物像の明確化

希望大使になる人のイメージは、認知症になってからも地域の中で自分らしい暮らしを続けながら、前を向いて暮らしている人。

- 「特別な人」ではなく、一人ひとり、自分なりに暮らしている「ふつうの人」
できなくなったことは自分なりのさまざまな工夫で補いながら、できることを活かして、今まで通り、日々普通に暮らしている人。
- あきらめずに挑戦する人
自分の生きがいになること（例：趣味等）や自分なりの生活を、あきらめずにやっている人。
- 年齢や状態像に限定されない
話せなくても、できなくなったことは自分なりのさまざまな工夫で補いながら、できることを活かして、今まで通り、日々普通に暮らしている人。

2) 何をする人か：役割

- ① 自分なりの言葉や姿を通じて、地域の中で自分らしく前向きに暮らしている実際や思いを伝えていく。
- ② そのことを通じて、他の認知症の人や地域社会の人たちが、認知症への希望のある見方をするようになり、目の前にいる不安を持った人がひとりでも多く前を向き、ともに暮らしていけるようすることが役割。
- 伝え方（発信の仕方）は、人それぞれでいい
大使の役割は講演をすることではない。発信方法はそれぞれに合ったやり方を考えればよくて、最初から発信できる人はいないし、話せる人もいない。話すほど上手になるが、話せる機会が与えられていないことが課題。
- 言葉が出る-出ないに関わらない
本人の声に耳を傾けると、本当はたくさん発信をしている。本人発信とは、本人が自分で話をするのと捉えるのではなく、本人の小さな声を聞いた人がまた他の誰からに共有してくることも「本人発信」と考えていい。

3) 大使として活躍していくために必要なこと

- ① 大使になるかどうかは、本人が決めること。やらされるのではなく、本人の意思で、納

得して決めてもらうことが必要。

- ◇ まず信頼関係を築き、なぜその役割を‘あなた’にやって欲しいと思うのか、時間をかけてしっかりと説明する。
- ◇ 周囲が熱心に大使になることを勧めるあまり、本人自身が大使の目的等を理解しないまま任命されてしまうケースがある。そうなると、活動が受け身になり本来の大使活動にならなくなってしまったり、名前だけの大使になってしまったりする場合もある。
- ◇ 本人の周囲の人（家族や支援者等）が大使活動に対して消極的な場合、本人の気持ちがそちらに引っ張られてしまう場合がある。受任や更新の際には、本人自身の意思を確認し、本人の意思が反映されるような協議や調整が必要。
- ◇ 本人は大使として活動したい/活動を続けたいという意向があるのに、周囲の考え（負担になると悪い、認知症が進行しているから等）や、周囲の負担（活動の連絡調整やアテンドが大変など）が理由で受任や更新に至らないケースもある。

② 本人が大使活動を続けていくための伴走者・チーム

ふだんから本人とつきあい、希望大使としての活動を応援・伴走する人（たち）が必要。

- 応援・伴走者は専門性や資格の有無で決めるのではなく、本人が「この人と一緒なら活動したい」と思える人と進めていくことが重要。
- 一人ではなく、何人かでチームを組んでいることが望まれる
 - ◇ 本人の周囲の人（家族や支援者等）が大使活動に対して消極的だったり、逆に大使活動の本質とは異なる期待（例えば、大使名義等）が強い場合、本人の気持ちがそちらに引っ張られてしまう場合がある。受任や更新の際には、本人自身の意思をできるだけ本人に直接会って確認し、本人の意思が反映されるような協議や調整が不可欠。あわせて本人の周囲の人たちの考え方や姿勢等の確認や協議・調整も不可欠。
 - ◇ 大使の活動では、本人や関係者との連絡調整、活動内容についての本人との話合いや事前準備、活動当日のアテンド、活動後のフォロー等、見えにくい役割・機能が多い。伴走者が一人だけだと負担がかかり、当初は対応できていたとしても、持続的な活動や大使活動に応じてよりよく改善することが難しい。
 - ◇ 本人が活動したいのに、伴走してくれる人の都合がつかないため、本人が活動できなかった場合がみられている。
 - ◇ 都府県の担当者は、大使任命後に大使活動とその支援者の動きや関係性に細かく目配りし続けることが困難な場合も多く、任命当初の段階から大使活動の伴走者やチームのあり方を意識しておくことが必要。

3. 「地域版希望大使の任命（委嘱）」のあり方

1) 大使を「探す」のではなく、本人との出会いのプロセスを大切にする

希望大使の任命（委嘱）が目的ではなく、任命後の展開を見据えて適任者に会うことが必要。

2) 市町村内で本人が発信できる環境づくりの促進

- ① 大使は任命後にいきなり都道府県での大使活動を始めるのではなく、任命以前から市町村・地域での大使的活動の実績を積み上げている本人を委嘱することが望まれる。
- ② 管内市町村において普段から本人が話せる環境づくりを促進していくことで、市町村担当者、そして都道府県担当者が本人と出会い、互いの関係がつけられていく機会が増える。
- ③ 管内市町村と連携しながら、さまざまな本人の活動情報の収集や再配信を通して本人が発信できる環境づくりの促進をサポートする。（発信する本人が増えていく中で、希望大使の任命につながる。）

3) 更新は、本人が自己決定する

再掲。上記2. 3) ①参照。

- ① 本人、家族、推薦者、支援者等と都道府県担当者が直接会い、主旨や活動についてわかりやすく説明し、本人自身の意向を確認する。
- ② 本人から現在の暮らしや今後について希望等をうかがい、大使としての活動の可能性やその人に応じた活動のあり方などを検討していく基礎にする。

4) 大使となることや活動していく上での適性の検討

大使としての自覚や活動内容は、実際が取組が始まってから高まっていく場合が多い。人前で話すことも経験を重ねることで上手くなる人が多くいる。そのため、任命や活動が始まる前から大使の適性を判断することは難しく、慎重に行う必要があるが、以下のような場合には十分な検討や対応が必要。

- ◇ 本人の中には、認知症に関する負の発信をする方もいる。負の発信に他の本人も引っ張られ、自分のことを否定しはじめたり、先のことが不安になったりする場合もみられる。また、地域社会の人々の前向きな理解にはつながらない。（負の発信をされる本人は、大使の活動の前段階として仲間との出会いや前向きになれるような地域での何らかの活動が必要）
- ◇ 病気を受け入れられない方も希望につながりにくい。
- ◇ 個人的な関心や特定のサービスやモノを PR する発言が多い場合、大使の立場としては、偏った発信や誤解を広げてしまう恐れがある。
- ◇ 本人あるいは家族・親戚等の意向により、実名や写真等の公表を望まない場合、任

命されても、大使本来の存在意義や発信が地域社会に伝わりにくく、マイナスの印象をもたらしてしまう状況もみられる。任命を急がずに、実名や写真等の公表を本人や周囲の人たちが受け入れられるようになる時期（身近な地域での理解者等が増えていく段階）を待つことも必要である。

大使になる人は、自らが負の体験をしつつもそれを乗り越えてきか体験がある人、暮らしやすい地域をつくるために前向な発信をしていこうと考えている人が適している。

4. 「地域版希望大使」の具体的な役割の設定について

1) 役割は都道府県ごとに、大使それぞれと話しあいながら設定していく

- ① 希望大使の役割は「希望ある暮らしを続けている姿を発信すること」で、その発信方法は行政と本人とが一緒に考えていくことが大事。
- ② 都道府県が画一的に決めて、それにあわせて「大使を利用する」のではなく、大使となる本人それぞれの状況や意向に応じて、話しあいながらその人にあった具体的役割と一緒に検討していくことが必要。
- ③ 「閉じこもっている認知症の人を1人でも多く元気にしたい」と大使を引き受けた人は多い。1人ひとりの活動への想いを丁寧に聞き取り、その気持ちに沿った活動を一緒に考えていく。
- ④ 施策検討等の委員会や会議等への参画支援では、事前の説明、会場の設営や環境面、資料の作り方、発言のしやすさ、サポート体制などの配慮が必要。

【主な活動事例】

- 都道府県が実施する認知症の普及啓発活動への参加・協力
- 認知症サポーター講座の講師であるキャラバン・メイトの活動または活動への応援
- ピアサポート活動
- 市町村や関係機関からの依頼による活動
- 都道府県の施策検討等の委員会等での委員、会議等への参加 など

3.2. 都道府県のマネジメント機能の強化

- アンケート調査結果から、ほとんどの都道府県が担当者1名体制で希望大使事業を進めている。担当者が大使関連の業務にかけている工数は、業務全体の2割～3割で、困難や課題に関する質問では、「やるが多すぎて大使事業に手が回らない」と回答した人の割合が3割以上となっている。
- こうした状況の中でも様々なことに気を配りながら、丁寧に事業を進めようとしている多くの自治体があることは、アンケートの自由記述やインタビュー調査からも容易に窺い知ることができる。

- 全ての業務が1人の担当者に集中している中、外部の関係団体等と連携のもとに委託を活用するという考え方もある。アンケートの結果では、業務の一部を委託している割合は2割から3割程度となっている。しかし、委託であっても事業の趣旨に沿って確認しながら進めていかなければ取組が形骸化することも危惧される。
- 都道府県としてのマネジメントを機能させながら、委託先との意思の疎通を丁寧に図る必要がある。

(県担当者のコメントより)

委託の根本は、「県がやるべきことを委託先にやってもらうこと」だと思うので、1から10まで自分たちが委託先に関わるのは当然のことだと思っている。

委託先とは互いに協力しながら同じ方向に向かって事業を進めている。それが出来るのは、事業を始める前から先方と一緒にやってきているからで、どちらも主体であると感じている。

実際、担当職員1人にかかる負担は凄まじい状況があり、組織としては委託に出しながら業務を切り離していくことも考える必要もあるが、委託先と距離が出てしまうような弊害は避けなければならないと考えている。

3.3. 都道府県は率先して本人発信の意義を理解し、本人視点の施策づくりをすすめる

- 本人が声を上げていくことの意義を都道府県が理解することで、共生社会の実現に近づけられる。4章第1項5の記述の通り、担当者をはじめとする行政全体の意識が本人に向けられ、認知症施策全体の起点に本人の声を据えていくことが重要である。
- そのためには、都道府県で認知症施策に関わるより多くの職員が本人と出会い、場や活動を共に過ごす体験を重ねていくことが大切。本人との交流が多くのお気づきを促してくれることは調査からも明らかとなっている。
- 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法(令和6年1月1日施行)」は、長年の本人たちの活動を通して生み出された法律であり、目指す共生社会の実現は今後の取組方にかかっている。そして、基本法の理念をどう浸透させていくかは、希望大使事業や本人活動の推進に関わっていると考えられる。

3.4. 市町村レベルの認知症施策に連動させる工夫

- アンケート調査では大使事業が市町村の認知症施策に好影響を与えている状況も確認できたが、地域によっては講演活動が大使事業の全てであるかのように捉えられてしまい、市町村での具体的な認知症施策に連動していないことを課題視する声もある。大使活動が地元地域における本人同士の繋がりや本人発信とは異なる次元での活動になっているとの指摘である。

- 大使が担う普及啓発を「大使の話を聞くこと」と捉えてしまえば、市町村は単に希望大使に来てもらうことしか思いつかないだろう。しかし、目指すべきは希望大使の活動をきっかけにしながら、地元地域で本人同士が語り合う場がつけられたり、本人が活躍できる機会を増やしたりしていくことだ。
- 大使活動を推進していく都道府県は、市町村に対して事業の意義と県としてのビジョンを丁寧に伝えていく必要がある。そのためには、市町村が集まる研修会や会議の場で、県としての考え方やビジョンを繰り返し伝えていくことが必要である。また、そうした場にこそ大使に協力してもらおうという考え方もあるだろう。本人発信の意義を市町村が理解することで、地元の本人が中心にいる様々な場が増えていくのではないか。

(県担当者のコメントより)

具体的なことをテーマに県と市町が協働することで、市町の意識は変わっていくということを実感している。市町が変わってきた要因は、本人の社会参加を促進するために、どのように取り組むべきかの具体的なことを、県と市町担当者と一緒に考えてきたからだ。大事なのは、本人が生き生きと語れる場をつくることだと思う。

県にとって希望大使はパートナーのような存在だ。県が本人たちと一緒に政策に取り組み、一緒に歩んでいる状況を市町の方に見てもらえるように発信していきたい。

3.5. 大使の主体的な活動を支えるための支援者のチームづくり

- 本人が大使活動を続けていくためには、支援者の協力が不可欠な場合も少なくない。活動の日程調整や諸々の準備は、支援者や家族が担っていることが多く、大使が所属する団体や事業委託先の団体が管理しているケースもある。
- いずれにしても各々の支援者等にはそれぞれの仕事や予定があり、必ずしも大使活動が優先されるとは限らない。事業を委託した団体等が忙しすぎて、大使が希望しても活動を制限されてしまうこともあるという。任命された大使が前向きに活動しようとする時、その機会を保障するための体制づくりは考えていく必要があるだろう。
- 本人にとっての伴走者は必ずしも一人とは限らない。場面ごと、状況ごとに本人を支えている複数の人たちが必ずいるはずである。大使活動の進め方を考える際には、その活動を支えるための支援者チーム、体制づくりについて、本人を取り巻く家族や支援者と共に話し合う必要がある。

3.6. 大使活動を円滑に進めていくための支援者への配慮と対応

- 支援者の多くはボランティア的な立場で大使のサポートをしていることが多いが、大使に活動を依頼する際には、支援者が費やす時間や経費に対する配慮は欠かせないも

のと考える。それは家族が支援者である場合も同様である。

- 調査結果を見ると、大使本人への交通費や謝金等についての説明や支払いはなされていても、支援者に係る費用が考慮されていないケースは少なくない。その都度交渉しなければならない状況も起きており、依頼する側に『本人が活動するためにはどのようなサポートが必要なのか、なぜ支援者が必要なのか』等のイメージが掴めていない状況も見取れる。
- 支援者は自分の仕事を持ちながら活動支援を行っている者も多く、活動の際には仕事を休んで対応しているケースも多い。単なるボランティアと捉えるべきではなく、大使活動を支える重要なキーパーソンとして、大使と同等の配慮がなされるべきである。また、そうした処遇があればこそ、大使も安心して支援者にサポートを依頼することができる。
- 本調査研究事業で実施した支援者へのアンケート調査では、交通費や移動に関する多くの要望が挙げられていた。個別の状況・状態によっては、タクシーの利用も必要になるケースがあるという理解が求められており、大使の心身の状態に配慮した柔軟な対応が望まれている。

3.7. 本人の生きる力を発揮させる支援のあり方について議論と共通理解を

- 共生社会を目指す中、大使事業を通じて「本人を支える支援者」という存在についての議論を深めていく意義は大きい。支援者、パートナー等、その呼び方は一様ではなく、言葉の拘りも様々ある。また、の役割を担う者は、家族、住民、ボランティア、専門職等多様な立場の人がいる。
- これら支援者・パートナーとは、本人にとってどのような存在であるべきか。希望大使交流会における支援者・パートナーによるディスカッションでは、「本人の生きる力を発揮させる者」として、その存在の意味を見出していた。
- 本人を支援されるだけの立場に置かず、自らの意志で希望ある日常生活及び社会生活を送れるようにするための支援のあり方は、支援者・パートナーに留まらず、家族のあり方、地域のあり方、専門職のあり方にも関わる非常に重要なテーマである。大使事業を契機に、今後の議論が展開されていくことが望まれる。

資料編

1. 設置済・都道府県調査票

令和5年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）事業
希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査 設置済み都府県調査票

※当てはまる選択肢がない場合は、無回答のまま進んでください。

I. 基本情報	
1 都道府県名	
2 人口規模（該当する番号を入力）	
1. 50万人以上 100万人未満 2. 100万人以上 200万人未満 3. 200万人以上	
3 高齢化率（数値を入力）	%
4 認知症施策担当部署名	
5 認知症施策担当者 合計人数	人
6 うち希望大使事業担当者人数	人
II. 大使任命の進捗状況等について	
7 最初に大使を任命した年度（令和年度を数値入力）	令和 年度
8 現在、任命が完了している大使の人数（数値記入）	人
9 今年度新たに任命を予定している人数（最大値） ※特に決めていない場合は「9」を入力	人
10 これまでに退任した大使の人数（累計人数） ※いない場合は「0」を入力 （自由回答）退任者がいる場合は、退任理由の例を記入してください。	人
11 大使の任命要件として、重視していることを記入してください。 （自由回答）	
12 大使の候補者は、どのように把握していますか。該当する項目全てに「1」を入力してください。 （複数選択可）	
1 以前から都道府県や市町村の活動に関係しているなど、実績がある本人	
2 管内市町村に推薦を依頼	
3 ふだんから管内市町村と本人の活動について情報をやり取り	
4 認知症本人の関係組織に推薦を依頼	
5 家族の会等、関係組織に推薦を依頼	
6 公募している	
7 その他	
13 大使候補者の状況について、当てはまる項目を選んでください。（選択は1つ）	
1. 候補者が増えている 2. 増えてはいないがいる 3. 候補者がいなくて困っている 4. その他	
14 任命前に、候補者本人に目的や役割などの説明を担当者がしていますか。（選択は1つ）	
1. 十分にしている 2. だいたいしている 3. あまりしていない 4. していない 5. その他	
15 任命に際して、本人自身に就任の意向を担当者が確認していますか。（選択は1つ）	
1. 必ず確認している 2. だいたい確認している 3. あまり確認していない 4. 確認していない	

16 大使の活動内容について、実施している項目全てに「1」を入力してください。		(複数選択可)
1	認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	
2	キャラバン・メイト活動への参加・協力	
3	認知症ピアサポート活動への参加・協力	
4	管内の認知症本人同士のネットワーク（づくり）への参加・協力	
5	認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任	
6	認知症関連事業・企画等へ意見やアイデア出し・ディスカッションなど	
7	官民共同への参加協力（商品開発に関する意見だしなど）	
8	ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	
9	活動はこれから	
10	（自由回答）その他、具体的な例があればご記入ください。	
17 市町村や関係機関等から大使活動の依頼を受ける際の決め方について、最も近い項目を選んでください。（選択は1つ）		
1. 必ず本人が決めている 2. だいたい本人が決めている 3. 本人より周囲が決めることが多い		4. だいたい周囲が決めている 5. 大使によって違いがある 6. 把握していない
18 大使活動を進めていく上での対応について、該当する項目を選んでください。（選択は1つ）		
① 今年度の大使事業について予算化していますか。		
1. はい 2. いいえ		
② 大使の活動に対して保険の加入をしていますか。		
1. はい 2. いいえ 3. 検討中		
③ 大使活動に関して、本人に報酬を支払っていますか。		
1. 支払っている 2. 支払っていない 3. ケースによって異なる 4. 把握していない 5. その他		
④ 大使活動に関して、本人に旅費を支払っていますか。		
1. 支払っている 2. 支払っていない 3. ケースによって異なる 4. 把握していない 5. その他		
⑤ 大使の支援者に対して、報酬を支払っていますか。		
1. 支払っている 2. 支払っていない 3. ケースによって異なる 4. 把握していない 5. その他		
⑥ 大使の支援者に対して、旅費を支払っていますか。		
1. 支払っている 2. 支払っていない 3. ケースによって異なる 4. 把握していない 5. その他		
19 大使の活動窓口・調整等の担当についてお答えください。		
① 大使としての活動の窓口・調整等は、主に誰がしていますか。（選択は1つ）		
1. 都道府県の担当者 2. 事業委託している組織 3. 委託はしていないが任せている組織・人 4. その他		
② ①で「1. 都道府県の担当者」を選んだ方は、調整内容について書ける範囲でご記入ください。		
(自由回答)		

③ ①で「2.事業を委託している組織」を選んだ方は、事業を委託している理由をご記入ください。	
(自由回答)	
④ ①で「4.その他」を選んだ方は、具体的な内容を記入してください。	
(自由回答)	
20 任命後の大使本人との関わりについて、ご自身の状況をお答えください。(選択は1つ)	
1. 積極的に関わっている	2. 必要などきに関わっている
3. あまり関わっていない	4. 関わっていない
21 都道府県担当者として、大使の活動予定(スケジュール)はどの程度把握していますか。(選択は1つ)	
1. ほぼ全て把握している	2. だいたい把握している
3. あまり把握していない	4. 把握していない
22 大使事業の運営についてお答えください。(選択は1つ)	
① 運営規定の整備状況で該当する項目を選んでください。(選択は1つ)	
1. 十分に整えた	2. だいたい整えた
3. まだ不十分などところがある	4. まだできていない
② 今後、大使の心身の状態が進行した場合の対応について、担当課内で検討しましたか。(選択は1つ)	
1. 検討した	2. 検討中
3. 検討したことはない	(選択は1つ)
③ 上記で「1.検討した」を選択した方は、現時点での対応方針についてご記入ください。それ以外を選択した方は、ご自身の考えをご記入ください。	
(自由回答)	
Ⅲ. 事業評価	
23 大使事業の効果について、ご担当者の考えを選んでください。(選択は1つ)	
1. 十分に感じる	2. まあ感じる
3. あまり感じない	4. 全く感じない
5. わからない	
(自由回答) 上記を選んだ理由を教えてください。(※「5.わからない」を選んだ人は除く)	
24 大使事業に対する担当部署内の理解状況について、あなたの印象をお答えください。(選択は1つ)	
1. 多くが理解している	2. 一部が理解している
3. 理解している人は少ない・いない	4. わからない
25 大使事業に対する管内市町村の理解の状況について、あなたの印象をお答えください。(選択は1つ)	
1. 多くが理解している	2. 一部が理解している
3. 理解している人は少ない・いない	4. わからない
26 地域住民の認知症や認知症の人への先入観を払拭する上での大使の効果についてご担当者の印象をお答えください。(選択は1つ)	
1. 大いにある	2. まあある
3. あまりない	4. まだこれから
5. わからない	
27 大使の適性に関する検討状況について、お答えください。(選択は1つ)	
1. 組織として検討したことがある	
2. 担当職及び関係者で検討したことがある	
3. 担当職として考え方を整理したことがある	
4. 検討したことはない	
5. 上記以外	

28 大使にはどのような人が適任だと思いますか。
担当者として重要と思う項目を3つを選んで、「1」を入力してください。 (選択は3つ)

1	希望大使事業の目的や意義を理解し共感している	
2	移動などのサポートがしやすい人	
3	大勢の人の前でも上手に話が出来る人	
4	認知症を受け入れ、自分らしく前を向いて暮らしている人	
5	生活上の困難や辛い気持ちを説明できる人	
6	生活上の工夫や楽しく暮らすコツを話せる人	
7	本人の活動などについて、実績がある人	
(自由回答) 大使の適性や人物像などについて、ご意見やお考えがあればご記入ください。		

29 都道府県並びに管内市町村における認知症関連事業・施策の状況についてお答えください。

① 都道府県の認知症施策を検討する委員会等に、認知症本人が参画していますか。(選択は1つ)

1. 本人が委員等のメンバーとして参画している 2. 委員等々のメンバーではないが、委員会等に参加し意見を述べる機会をつくっている 3. 委員会等には参加していないが、意見を聞き委員会等に反映をしている 4. これまで本人の参画や参加、委員の反映はまだないが、今後予定している 5. これまでなく、予定もまだない	
--	--

② 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を都道府県の計画作り等に活かす動きがありますか。(選択は1つ)

1. 都道府県の計画に具体的に反映を始めている 2. 具体的ではないが、反映の検討を始めている 3. 計画への反映や検討の動きはない 4. その他	
--	--

③ 認知症施策に関する都道府県と管内市町村との協力について、該当する項目を選んでください。(選択は1つ)

1. ほとんどの市町村と出来ている 2. 半数程度の市町村と出来ている 3. 一部の市町村と出来ている 4. あまり出来ていない	
---	--

④ 認知症施策の進捗状況についてお答えください。

a ピアサポートの実施 (選択は1つ)

1. ほとんどの市町村で実施 2. 半数程度の市町村で実施 3. 一部の市町村で実施 4. 把握していない	
--	--

b 本人ミーティング等の実施 (選択は1つ)

1. ほとんどの市町村で実施 2. 半数程度の市町村で実施 3. 一部の市町村で実施 4. 把握していない	
--	--

c 見守りネットワーク・SOS体制の構築 (選択は1つ)

1. ほとんどの市町村で実施 2. 半数程度の市町村で実施 3. 一部の市町村で実施 4. 把握していない	
--	--

d チームオレンジの取組み (選択は1つ)

1. ほとんどの市町村で実施 2. 半数程度の市町村で実施 3. 一部の市町村で実施 4. 把握していない	
--	--

e 認知症カフェ等の展開 (選択は1つ)

1. ほとんどの市町村で実施 2. 半数程度の市町村で実施 3. 一部の市町村で実施 4. 把握していない	
--	--

30 大使任命や活動を通じた管内市町村への影響について

① 大使活動を通じた管内市町村の手ごたえについてお答えください。(選択は1つ)

1. 十分に感じる 2. まあ感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない 5. わからない	
--	--

② 上記で「1」または「2」を選んだ方は、どのようなところで「手ごたえ」を感じるか教えてください。
(自由回答)

--	--

31 大使任命や活動を通じた都道府県事業への効果の波及について	
① 都道府県事業への影響について、あなたの印象をお答えください。（選択は1つ）	
1. 様々な認知症関連の事業に効果が広がっている 2. 一部の認知症関連の事業に効果が広がっている 3. ほとんど効果はみられない	
② 上記で「1」または「2」を選んだ方で、具体的な例があれば教えてください。	
(自由回答)	
32 大使の活動について、好事例などがあれば教えてください。	
(自由回答)	
IV. 事業担当者の状況	
33 あなたの業務全体のうち、大使事業にかけているエフォートはどのくらいですか。	%
34 都道府県担当者としての困難や課題について伺います。	
① 大使に関する事業を進める上で、ご自身が抱えている困難や課題はありますか。（選択は1つ）	
1. 大いにある 2. まあある 3. あまりない 4. 全くない	
② 「1」または「2」を選択した方は、下記の中で該当する項目全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1 事業の進め方がよくわからない	
2 事業の必要性をあまり感じない	
3 候補者の見つけ方がわからない	
4 大使の適任者がみつからない	
5 認知症の人とのかかわり方がよくわからない	
6 やることが多すぎて大使事業に手が回らない	
7 大使の活動の継続や今後の展開のあり方について検討が必要	
8 上司や関係各部の関心が低い	
9 管内市町村の関心が低い	
10 (自由回答) その他 困っていること等があればご記入ください。	
35 他都道府県担当者との情報連携について伺います。	
① 大使事業に関することで、他の都道府県担当者との情報連携や相談をしたことがありますか。（選択は1つ）	
1. ある 2. ない	
② 上記で「ある」を選んだ方は、どのような内容についてか教えてください。	
(自由回答)	
36 大使事業を担当したことによるご自身の気づきや感想等について、該当する項目全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1 自分自身の認知症観が変わった	
2 自分自身が前向きになれる本人や関係者に出会い、認知症施策への取組が積極的になった	
3 事業の趣旨が理解でき、優先順位の高い業務だと感じた	
4 他の認知症関連事業（施策）と連動するべき事業だと感じる	
5 市町村等に事業の趣旨や目的を説明しやすくする資材が欲しい	
6 任命あたっては、大使の適性を見極めることが重要だと思った	
7 都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもいいと思う	
8 特に感想や意見はない	
9 (自由回答) その他の気づきや感想等があればご記入ください。	

37 今後あればよいと思うこと全てに「1」を入力してください。		(複数選択可)
1	都道府県担当者同士の情報交換が出来る機会	
2	全国の大使が交流できる機会	
3	取組みの効果を示せるわかりやすい評価指標	
4	その他	
(自由回答)		
38 本人の声を施策に活かすために、取り組んでいることや工夫等があればご記入ください。		
(自由回答)		
39 管内市町村への説明について		
① 大使事業に関する都道府県の対応や状況について、管内市町村への説明や通知等を行いましたか。 (選択は1つ)		
1. はい 2. いいえ 3. わからない		
② 上記で「1.はい」を選んだ方は、下記の中で該当する項目全てに「1」を入力してください。 (複数選択可)		
1	国の通知等を共有している	
2	都府県としての対応方針を説明している	
3	国や他都府県の任命状況について紹介している	
4	大使の活動内容について説明している	
5	本人の声を施策に反映することの意義を説明している	
6	大使活動を通じて市町村での本人発信や社会参画につなげていくことを説明している	
40 管内市町村担当者への日頃からの関わりについて、該当する項目を選んでください。 (選択は1つ)		
1. 積極的に関わるようにしている 2. 必要に応じて関わっている 3. あまり関わっていない		
V. 自由回答		
41 今後、大使事業等の担当者として、大使と一緒にチャレンジしたいこと等がありましたらご記入ください。		
(自由回答)		

2. 未設置・都道府県調査票

令和5年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）事業
希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査 未設置道府県調査票

※当てはまる選択肢がない場合は、無回答のまま進んでください。

I. 基本情報	
1 都道府県名	
2 人口規模（該当する番号を入力）	
1. 50万人以上100万人未満 2. 100万人以上200万人未満 3. 200万人以上	
3 高齢化率（数値を入力）	%
4 認知症施策担当部署名（文字入力）	
5 認知症施策担当者 合計人数（数値を入力）	人
6 うち希望大使事業担当者人数（数値を入力）※不在の場合は「0」を入力してください。	人
II. 大使任命の進捗状況等について	
7 今後、大使の任命を予定していますか。	
1.今年度予定している 2.来年度以降予定している 3.予定はない 4.わからない	
※「3」または「4」を選択した方は、「Ⅲ.大使事業及び認知症関連施策について」（52行目）にスキップしてください。	
8 今年度新たに任命を予定している人数（最大値）※特に決めていない場合は空欄	人
9 大使の任命要件として、重視したいことがあれば記入してください。※無ければ空欄	
（自由回答）	
10 大使の候補者は、どのように把握していますか。該当する項目全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1 以前から都道府県や市町村の活動に関係しているなど、実績がある本人	
2 管内市町村等の関係機関に推薦を依頼	
3 ふだんから管内市町村と本人の活動について情報収集	
4 認知症本人の関係組織等に推薦を依頼	
5 家族の会等、関係団体に推薦を依頼	
6 公募している	
7 その他	
11 大使の活動内容について、今後予定しているものがあれば全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1 認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	
2 キャラバン・メイト活動への参加・協力	
3 認知症ピアサポート活動への参加・協力	
4 管内の認知症本人同士のネットワーク（づくり）への参加・協力	
5 認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任	
6 認知症関連事業・企画等へ意見やアイデアだし・ディスカッションなど	
7 官民共同への参加協力（商品開発に関する意見だしなど）	
8 ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	
9 まだわからない	
10 （自由回答）その他、具体的な例があればご記入ください。	

12 大使としての活動の窓口・調整等は、主に誰がすることになりそうですか。（選択は1つ）	
1. 都道府県の担当者 2. 事業委託する組織 3. その他 4. わからない/まだきめていない	
13 大使事業に関する運営規定の整備状況をお答えください。（選択は1つ）	
1. 十分に整えた 2. だいたい整えた 3. まだ不十分などところがある 4. まだできていない	
Ⅲ. 大使事業及び認知症関連施策について	
14 現時点での大使事業への期待について、あなたの考えを選んでください。（選択は1つ）	
1. 十分あると思う 2. まああると思う 3. あまりないと思う 4. ないと思う 5. わからない	
(自由回答) 上記を選んだ理由を教えてください。	
15 大使事業に対する担当部署内の理解状況について、あなたの印象をお答えください。（選択は1つ）	
1. 多くが理解している 2. 一部が理解している 3. 理解している人は少ない/いない 4. わからない	
16 現時点で、大使の適性に関する検討はされていますか。（選択は1つ）	
1. 組織として検討したことがある 2. 担当職及び関係者で検討したことがある 3. 担当職として考え方を整理したことがある 4. 検討したことはない 5. 上記以外	
17 大使にはどのような人が適任だと思いますか。 担当者として重要と思う項目を3つを選んで、「1」を入力してください。（選択は3つ）	
1	希望大使事業の目的や意義を理解し共感している
2	移動などのサポートがしやすい人
3	大勢の人の前でも上手に話ができる人
4	認知症を受け入れ、自分らしく前を向いて暮らしている人
5	生活上の困難や辛い気持ちを説明できる人
6	生活上の工夫や楽しく暮らすコツを話せる人
7	本人の活動などについて、実績がある人
(自由回答) 大使の適性や人物像などについて、ご意見やお考えがあればご記入ください。	
18 都道府県並びに管内市町村における認知症関連事業・施策の状況についてお答えください。	
① 都道府県の認知症施策を検討する委員会等に、認知症本人が参画していますか。（選択は1つ）	
1. 本人が委員等のメンバーとして参画している 2. 委員等メンバーではないが、委員会等に参加し意見を述べる機会をつくっている 3. 委員会等には参加していないが、意見を聞き委員会等に反映をしている 4. これまで本人の参画や参加、委員の反映はまだないが、今後予定している 5. これまでなく、予定もまだない	
② 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を都道府県の計画作り等に活かす動きがありますか。（選択は1つ）	
1. 都道府県の計画に具体的に反映を始めている 2. 具体的ではないが、反映の検討を始めている 3. 計画への反映や検討の動きはない 4. その他	
③ 認知症施策に関する都道府県と管内市町村との協力について、該当する項目を選んでください。（選択は1つ）	
1. ほとんどの市町村と出来ている 2. 半数程度の市町村と出来ている 3. 一部の市町村と出来ている 4. あまり出来ていない	

④ 認知症施策の進捗状況についてお答えください。	
a ピアサポートの実施 (選択は1つ)	
1. ほとんどの市町村で実施	2. 半数程度の市町村で実施
3. 一部の市町村で実施	4. 把握していない
b 本人ミーティング等の実施 (選択は1つ)	
1. ほとんどの市町村で実施	2. 半数程度の市町村で実施
3. 一部の市町村で実施	4. 把握していない
c 見守りネットワーク・SOS体制の構築 (選択は1つ)	
1. ほとんどの市町村で実施	2. 半数程度の市町村で実施
3. 一部の市町村で実施	4. 把握していない
d チームオレンジの取組み (選択は1つ)	
1. ほとんどの市町村で実施	2. 半数程度の市町村で実施
3. 一部の市町村で実施	4. 把握していない
e 認知症カフェ等の展開 (選択は1つ)	
1. ほとんどの市町村で実施	2. 半数程度の市町村で実施
3. 一部の市町村で実施	4. 把握していない
IV. 事業担当者の状況	
19 都道府県担当者としての困難や課題について伺います。	
① 大使に関する事業を進める上で、ご自身が抱えている困難や課題はありますか。(選択は1つ)	
1. 大いにある	2. まあある
3. あまりない	4. 全くない
② 「1」または「2」を選択した方は、下記の中で該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)	
1	事業の進め方がよくわからない
2	事業の必要性をあまり感じない
3	候補者の見つけ方がわからない
4	大使の適任者がみつからない
5	認知症の人とのかかわり方がよくわからない
6	やるが多すぎて大使事業に手が回らない
7	大使の活動今後の展開のあり方について検討が必要
8	上司や関係各部の関心が低い
9	管内市町村の関心が低い
10	(自由回答) その他 困っていること等があればご記入ください。
20 他都道府県担当者との情報連携の状況について伺います。	
① 大使事業に関する事で、他の都道府県担当者との情報連携や相談をしたことがありますか。(選択は1つ)	
1. ある	2. ない
② 上記で「ある」を選んだ方は、どのような内容についてか教えてください。(自由回答)	
21 大使事業に関する説明や関連業務等を踏まえて、ご自身の考えに当てはまる項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可) (複数選択可)	
1	自分自身の認知症観が変わった
2	前向きになる本人や家族に出会えた
3	事業の趣旨が理解でき、優先順位の高い業務だと感じる
4	他の認知症関連事業(施策)と連動するべき事業だと感じる
5	市町村等に事業の趣旨や目的を説明しやすくする資材が欲しい
6	任命あたっては、大使の適性を見極めることが重要だと思った
7	都道府県の大使任命のみでなく、市町村単位の大使任命があってもいいと思う
8	特に感想や意見はない
9	(自由回答) その他の気づきや感想等があればご記入ください。

22 大使事業に関わらず、本人の声を施策に活かすために取り組んでいることや工夫等があればご記入ください。
(自由回答)

V. 管内市町村の状況

23 管内市町村への説明について

① 大使事業に関する都道府県の対応や状況について、管内市町村への説明や通知等を行いましたか。(選択は1つ)

1. はい 2. いいえ 3. わからない	
-----------------------	--

② 上記で「1.している」を選択した方は、下記の中で該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)

1	国の通知等を共有している	
2	都府県としての対応方針を説明している	
3	国や他都府県の任命状況について紹介している	
4	大使の活動内容について説明している	
5	本人の声を施策に反映することの意義を説明している	
6	大使活動を通じて市町村での本人発信や社会参画につなげていくことを説明している	

24 管内市町村担当者への日頃からの関わりについて、該当する項目を選んでください。(選択は1つ)

1. 積極的に関わるようにしている 2. 必要に応じて関わっている 3. あまり関わっていない	
---	--

V. 自由回答

25 今後、大使任命や活動を推進していくには、どのような支援やサポートが欲しいですか。

(自由回答)

26 その他、何かご意見等あればご記入ください。

(自由回答)

3. 市町村調査票

令和5年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）事業
希望大使任命・活動状況及び本人発信支援実態調査 市町村調査票

※当てはまる選択肢がない場合は、無回答のまま進んでください。

I. 基本情報		回答欄
1	都道府県名	
2	① 市町村コード	
	② 市町村名	
	③ 部署名	
3	人口規模（該当する番号を入力） 1. 5千人未満 2. 5千～1万人未満 3. 1万～3万人未満 4. 3万～10万人未満 5. 10万～20万人未満 6. 20万～50万人未満 7. 50万～100万人未満 8. 100万人以上	
4	高齢化率（数値を入力）	%
5	認知症施策担当者 合計人数（数値を入力）	人
6	認知症施策推進基本計画（市町村計画）の策定状況について	
① 貴自治体に当てはまる番号を入力してください。（選択は1つ）		
1. 作成済み 2. 今年度中に作成 3. 来年度以降に作成 4. 今のところ予定はない 5. その他		
※上記の質問で、1～3を選んだ方に伺います。		
② 市町村計画を策定するにあたり、認知症の人（以下、本人）の意見は聞きましたか。または、聞く予定がありますか。（選択は1つ）		
1. はい 2. いいえ 3. わからない		
7 あなたは、国が任命した認知症本人大使「希望大使」のことを知っていましたか。（選択は1つ）		
1. 知っている 2. 知らない		
II. 都道府県が設置する地域版認知症希望大使について		
8 都道府県からの情報の連携状況について伺います。		
① 都道府県が設置する大使事業について、都道府県から市町村への説明等ありましたか。（選択は1つ）		
1. あった 2. なかった 3. わからない ←2, 3を選択した方は設問「9」へスキップ		
② ※上記の質問で、「1」を選んだ方に伺います。 都道府県からの情報の連携状況について、 <u>当てはまる項目全てに「1」</u> を入力してください。（複数選択可）		
1	国の通知等が共有された	
2	都道府県の対応方針について説明があった	
3	国や他の都府県の任命状況について紹介があった	
4	大使の活動内容について説明があった	
5	本人の声を施策に反映することの意義について説明があった	
6	市町村での本人発信や社会参画の推進について説明があった	
7	その他（自由回答）	
③ 大使候補者について、都道府県から相談や推薦の依頼を受けたことはありますか。（選択は1つ）		
1. ある 2. ない 3. わからない		
9 貴都道府県では、地域版希望大使（以下、大使）が任命されていますか。（選択は1つ）		
1. はい 2. いいえ 3. わからない ←2, 3を選択した方は設問「11」へスキップ		

10 ※上記の質問で、「1」を選んだ方に伺います。

以下の取組み等について、都道府県の大使に参加・協力してもらったことはありますか。
該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)

1	認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	
2	キャラバン・メイト活動への参加・協力	
3	認知症ピアサポート活動への参加・協力	
4	日々の暮らし(活動)の発信	
5	管内の認知症本人同士のネットワーク(づくり)への参加・協力	
6	認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への参加・協力	
7	認知症関連事業・企画等へ意見やアイデアだし・ディスカッションなど	
8	官民共同への参加協力(商品開発に関する意見だしなど)	
9	ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	
10	その他(自由回答)	

Ⅲ. 市町村での認知症の本人自身による活動について

11 市町村内の本人の活動状況について伺います。

① 「本人自身の活動」について、情報収集をしていますか。選択は1つ)

1. 積極的にしている	2. なるべくしている	
3. 特にしていない ← 「3」を選んだ方は、設問「14」にスキップしてください。		

② ※上記の質問で、「1」または「2」を選んだ方に伺います。
情報収集の仕方について当てはまる項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)

1	市町村の取組みに関わっている本人がいる	
2	ふだんから管内の地域包括と情報連携している	
3	ふだんから管内の介護事業者と情報連携している	
4	本人が関係する組織・団体等から情報を得ている	
5	地域の活動や認知症カフェ等に自分から出向くようにしている	
6	家族の会や関係団体から情報を得ている	
7	その他(自由回答)	

③ 本人が参加しているものに「1」を入力してください。
※ご存じの範囲で結構です。(複数選択可)

1	認知症施策を検討する委員会等に本人が参画している	
2	認知症普及啓発フォーラム、講演会等への参加・協力	
3	キャラバン・メイト活動への参加・協力	
4	認知症ピアサポート活動への参加・協力	
5	管内の認知症本人同士のネットワーク(づくり)への参加・協力	
6	認知症関連事業・施策・各種委員会・部会等への委員就任	
7	認知症関連事業・企画等へ意見やアイデアだし・ディスカッションなど	
8	官民共同への参加協力(商品開発に関する意見だしなど)	
9	ホームページやマスコミへの取材協力など、広報活動への協力	
10	地域のサークルやボランティア活動等	
11	その他(自由回答)	

12 本人発信や活動による市町村事業への影響について伺います。

① 本人の発信や活動は、貴自治体の認知症施策の推進によい影響がありましたか。ご自身の印象をお答えください。(選択は1つ)

1. 大いにある	2. まあある	3. あまりない	4. 全くない	5. わからない	
----------	---------	----------	---------	----------	--

② 上記で「1」または「2」を選んだ方で、具体的な例があれば教えてください。
(自由回答)

--	--

13 本人の発信や活動等を通じて、あなたの認知症に関する意識を変えた出来事（場面等）があれば教えてください。	
(自由回答)	
IV. 認知症施策担当と地域包括支援センターとの連携について	
14 貴自治体の地域包括支援センターについて、該当する項目を選んでください。（選択は1つ）	
1. 直営のみ 2. 直営と委託 3. 委託のみ	
※回答者ご自身が直営の地域包括支援センターに所属しており、市町村内に1ヵ所だけの場合は、設問「18」にスキップしてください。	
15 市町村の行政担当者と地域包括支援センターとの日頃からの関わりについて、該当する項目を選んでください。（選択は1つ）	
1. 積極的に関わっている 2. 必要に応じて関わっている 3. あまり関わっていない	
16 認知症施策全般について、地域包括支援センターとの連携状況を教えてください。（選択は1つ）	
1. ほとんどの地域包括と出来ている 2. 半数程度の地域包括と出来ている 3. 一部の地域包括と出来ている 4. あまり出来ていない	
17 大使事業について、地域包括との情報の連携状況について教えてください。	
① 大使事業について、地域包括支援センターへ説明や通知等を行いましたか。（選択は1つ）	
1. 積極的に行っている 2. 行っている 3. 行っていない 4. わからない	
② 上記で「1」または「2」を選んだ方は、下記の中で該当する項目全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1	国の通知等を共有している
2	都道府県としての対応方針を説明している
3	国や他都府県の任命状況について紹介している
4	大使の活動内容について説明している
5	本人の声を施策に反映することの意義を説明している
6	大使活動を通じて市町村での本人発信や社会参画につなげていくことを説明している
7	その他（自由回答）
18 本人発信の意義について、地域包括支援センターの理解状況を伺います。ご自身の印象でお答えください。（選択は1つ）	
1. 多くが理解している 2. 一部が理解している 3. 理解している人は少ない 4. わからない	
19 本人視点での施策づくりについて伺います。	
① 本人の声や意見を聴くには、どのような人や場所の協力が必要だと思いますか。そう思う項目全てに「1」を入力してください。（複数選択可）	
1	地域包括支援センター
2	介護支援専門員
3	介護サービス事業所
4	医療機関
5	本人ミーティング
6	認知症カフェ
7	地域のサロン
8	民生委員
9	家族
10	その他
(自由回答) その他の具体的な内容を記入してください。	

② 上記の設定で「1」を入力したところと連携し、本人の声や意見を聞く目的や必要性などについて共有していますか。(選択は1つ)				
1. している	2. 一部している	3. していない		
③ 上記の設定で「3.していない」を選択した方は、その理由について該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)				
1	必要性を感じていない/意識していなかった			
2	自分自身の理解が足りない、説明できない			
3	忙しくて時間がない、先方の担当者に会えない			
4	どのように共有すればよいかわからない			
5	先方の担当者が、認知症の人は話せないと思込んでいる			
6	その他			
(自由回答) その他の具体的な内容を記入してください。				
V ご自身(ご担当者)についてお答えください				
20 本人の発信支援についてお答えください。				
① 本人発信支援の重要性について、ご自身はどのように考えていますか。(選択は1つ)				
1. 大いに思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 全く思わない	5. わからない
② 上記で「1」または「2」を選んだ方は、重要だと思った「きっかけ」などがあれば教えてください。				
(自由回答)				
21 本人発信の意義について、組織内の理解の状況を伺います。ご自身の印象でお答えください。(選択は1つ)				
1. 多くが理解している	2. 一部が理解している	3. どちらとも言えない	4. 理解している人は少ない	
22 あなたは、本人からの発信が「認知症や認知症の人への先入観」の払拭につながると思いますか。ご自身の印象でお答えください。(選択は1つ)				
1. 大いに思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 全く思わない	5. わからない
23 あなたご自身の本人との関わりの状況をお答えください。(選択は1つ)				
1. 積極的に関わっている	2. 必要なときに関わっている	3. あまり関わっていない	4. 関わっていない	
24 本人との関わりについて、該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)				
1	都道府県が任命した大使と直接的な関わりがある			
2	都道府県が任命した大使の活動やイベント等に参加したことがある			
3	管内市町村の本人と直接的な関わりがある			
4	管内市町村の本人の活動やイベントに参加したことがある			
5	認知症の人と日常的に話をしたり、関わる機会がある			
6	上記以外で認知症の人と関わる機会がある			
7	認知症の人と話をしたり、関わる機会はない			
25 認知症の人との関わりや本人発信支援を通じて、ご自身の気づきや感想等がありますか。該当する項目全てに「1」を入力してください。(複数選択可)				
1	自分自身の認知症観が変わった			
2	前向きになる本人や家族に出会えた			
3	本人発信支援の意義が理解できた			
4	本人の声は、他の認知症関連事業(施策)と連動すべき取組みだと思う			
5	本人発信や大使事業の趣旨について、地域包括等に説明しやすい資材が欲しい			
6	大使の任命は、都道府県だけでなく市町村単位の任命でも良いと思う			
7	特に感想や意見はない(本人との関わり等がない)			
8	その他(自由回答)			

26 本人発信支援に取り組むうえでの不安や悩み等について、該当する項目があれば全てに「1」を入力してください。 (複数選択可)	
1	本人発信支援の進め方がよくわからない
2	本人発信支援の必要性をあまり感じない
3	認知症の人と出会う（知り合う）ことが難しい
4	認知症の人との関わり方がよくわからない
5	やるが多すぎて本人発信支援にまで手が回らない
6	本人の声を聴くことについて、上司や関係各部の関心が低い
7	本人の声を聴くことについて、市町村自体の関心が低い
8	本人の声を聴くことについて、地域包括の関心が低い
9	その他（自由回答）
27 本人発信支援に関する情報の連携状況について	
① 本人発信支援に関連して、他の市町村担当者と情報交換や相談をしたことがありますか。（選択は1つ）	
1. ある	2. ない
② 本人発信支援に関連して、都道府県担当者と情報交換や相談をしたことがありますか。（選択は1つ）	
1. ある	2. ない
28 ご自身の業務の状況について教えてください。（選択は1つ）	
1. 市町村の計画に具体的に反映を始めている	
2. 具体的ではないが、反映の検討を始めている	
3. 計画への反映や検討の動きはない	
4. その他	
VI. 貴自治体の状況についてお答えください	
29 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を市町村の計画作り等に活かす動きがありますか。（選択は1つ）	
1. 市町村の計画に具体的に反映を始めている	
2. 具体的ではないが、反映の検討を始めている	
3. 計画への反映や検討の動きはない	
4. その他	
30 貴自治体における本人発信支援の取組み状況について教えてください。（選択は1つ）	
1. 積極的に取り組んでいる	2. まあ取り組んでいる
3. 取り組んでいない	
31 認知症施策の担当者として、現在抱えている不安や課題などがあれば教えてください。	
（自由回答）	
32 認知症施策の担当者として、今後、特に取り組みたいことがあれば教えてください。	
（自由回答）	

地域版希望大使のみなさまへ

メッセージ、写真等のご協力をお願い

いつも日本認知症本人ワーキンググループ(JDWG)の取組にご協力いただきありがとうございます。

- ・ 今年度実施しております「認知症地域版希望大使の普及促進と活動強化に関する調査研究事業」(令和5年度厚生労働省老人保健健康増進等事業)において、都道府県・市町村調査やヒアリングから、他地域の大使活動に関する情報等が求められていました。
- ・ 今後の大使活動の取組の普及、活性化に向けて、地域版希望大使の活動事例集と自治体むけの手引きを作成中です。
- ・ つきましては、大使のみなさまに、次のようなメッセージ、写真等のご協力いただければ幸いです。

【お願いしたいこと】

1. 内容について	①大使を引き受けて	<ul style="list-style-type: none"> 引き受けた時の思い これからやっていきたいこと
	②日々の暮らしや楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> 日々の暮らし ※様子がわかる写真も数枚添付ください。 楽しみ ※様子がわかる写真も数枚添付ください。
	③大使活動について	<ul style="list-style-type: none"> 活動内容と写真 活動を通じた感想、やりがい、手ごたえ
	④みなさんへのメッセージ	皆さん(都道府県民)へ伝えたいこと
	*JDWGがR4年度に作成した「地域版希望大使の任命と活躍の手引き 地域での活動事例集」もご参考に。	
2. メッセージ・写真の活用について	JDWG が作成する事例集・手引き等に掲載させていただきます。(原稿は、掲載前に大使へご確認させていただきます。)	
3. 謝礼について	JDWGが実施する厚生労働省老健事業の規程に基づき、些少ですが謝礼をご用意させていただきます。	
*謝礼の対象は、 <u>大使ご本人</u> 、ならびに <u>本件をアシストして下さる方1名(おられる場合)</u> となります。		

以上、どうぞよろしくお願いたします。

5. 希望大使活動支援アンケート

提出はこちらへお願いします ○メール : hope-st@jdwg.org ○ F A X : 03-6774-7388

希望大使 活動支援アンケート

大使活動の支援の現状と、よりサポートしやすくするための率直なご意見をお聞かせください。

都道府県		記入者 名前		支援している 希望大使の名前※	
------	--	-----------	--	--------------------	--

※大使の名前が非公表の場合は、本人の活動時の名前等。複数の方を支援している場合は、その名前をすべてご記入ください。

1. 希望大使とあなた(記入者)との関係について教えてください(主な1つに○)

1. 家族・親族
2. 以前からの知人
3. 活動を通じて知り合った
4. その他()

→上記の質問で、「2.以前からの知人」「3.活動を通じて知り合った」「4.その他」を選んだ方にお伺いします。

あなたが支援者になった「きっかけ」を教えてください。(1つに○)

- a. 本人に頼まれた
- b. 自分から声をかけた
- c. 活動の関係者から声をかけられた
- d. その他(自由記述)

2. 支援者としての活動状況について

(1) 現在の活動は概ね月()回程度

(2) 活動における支援者としての「やりがい」について教えてください。(1つに○)

1. 大いに感じる
2. まあ感じる
3. あまり感じない
4. 感じない

(3) 活動における支援者としての負担感を教えてください。(1つに○)

1. 大いに感じる →
2. まあ感じる →
3. あまり感じない
4. 感じない

負担感に当てはまるものを全て選んでください。(複数回答)

- a. 本人の体調等について
- b. 本人との意思疎通・連絡等について
- c. 本人の安全確保について
- d. 活動に関する外部との調整について
- e. 活動の事前準備について
- f. 自分の体調等について
- g. 自分の仕事との兼ね合い・調整について
- h. 活動に伴う出費について
- i. その他()

3. 支援者としてサポートされる際、自分の仕事の調整はどうされていますか。(主な1つに○)

1. 休みをとっている
2. 出勤扱いになっている
3. 仕事はしていない
4. その他(自由記述:)

4. 主に行政等の依頼で行う大使活動における、支援者への謝金・交通費について伺います。

(1) 支援者への謝金について、当てはまるものを選んでください。(1つに○)

1. ほとんどの活動で支給される
2. 一部の活動で支給される
3. ほとんど支給されない
4. その他(自由記述: _____)

→ 上記の質問で、「謝金を受け取ったことのある方」に伺います。

受け取った謝金について、当てはまるものを選んでください。(主な1つに○)

※活動によって異なる場合は、全体的な印象で回答ください。

- a. 大いに満足
- b. まあ満足
- c. 少し不満
- d. 大いに不満

(2) 交通費の支給について、当てはまるものを選んでください。(主な1つに○)

※活動によって異なる場合は、全体的な印象で回答ください。

1. 不足なく支給されている
2. 少し持ち出しがある
3. 大いに持ち出しがある
4. その他(自由記述: _____)

5. あなた(記入者)が支援者としてサポートする際、大事にしていることを教えてください。

6. 今後、支援者として大使活動をよりサポートしやすくするために、「あったらいいなあ」と思う配慮や対応を教えてください。

7. 支援者として日頃から感じていること、考えていること等、自由にお書きください。

◆ご協力ありがとうございます。些少ですが、些少ですが謝礼をお送りさせていただきます。(郵送予定)

以下に、謝礼受取先の郵便番号、住所、法人名(あれば)、お名前について、ご記入ください。

(謝金を辞退される場合は、謝礼受取先のご記入は不要です)

令和5年度 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）

認知症地域版希望大使の普及促進と
活動強化に関する調査研究事業
報 告 書

発 行：一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ
<http://www.jdwg.org/>

令和6（2024）年3月